

ポケットモンスター モノクローム

ラフィオル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2人の主人公が大きな夢を目指す王道ハートフルストーリーをぼちぼち書いていきます。

※文法がころころと変わります。 章ごとに不定期更新になると思います。

目次

第1章 プロローグ

第1話 強さを追い求める 黒の主人公 1

第2話 ゴウカザルとガバイト 7

第3話 平穩を追い求める 白の主人公 12

第4話 黒く塗られた過去 17

第5話 孤高のトレーナー ロウ 21

第2章 ヨスガシテイ テンガン杯編

第6話 テンガン杯 25

第7話 白黒のバトル 30

第8話 ジムリーダー ユウバ 35

第9話 下剋上 40

第10話 それぞれの意思 45

第11話 先へと進む決意 50

第12話 決勝進出者 55

第13話 アブソル 60

第14話 次なる目的地へ 64

第3章 クロガネシテイ 化石博物館編

第15話 クロガネシテイの小説家 68

第16話 ロコンとコジョフー 73

第17話 小説家アトリエ 78

第18話 たてのカセキ 83

第19話 動き出す闇 88

第20話 始まる争い 93

第21話 止まらぬ惨劇 98

第22話	結末	103
第23話	旅立ち	107
第4章	ハクタイシティ 終わりの始まり編	
第24話	藍色のスーツの男	111
第25話	ハクタイシティを歩く	116
第26話	もりのようかん	121
第27話	明かされる過去	125
第28話	青と赤	130
第29話	願い続けた一試合	135
第30話	100年に1人のトレーナー	139

第1章 プロローグ

第1話 強さを追い求める 黒の主人公

シンオウ地方に彗星の如く現れた1人のトレーナー、名前はコウキ。

ギンガ団の野望を阻止し、当時最高峰だったシンオウ地方のポケモンリーグを、肩を鳴らすように勝ち抜いた。その後にあるチャンピオンリーグでさえも、圧巻の強さで優勝し、そのまま彼は『チャンピオン』という名の席に、座りついた。

彼が、その席に座ると、シンオウ地方にやってくるトレーナーの数が増えだし、すべては『最強の彼』に挑むためと、トレーナーたちは、ポケモンと共に、地方で腕を磨く。彼もまた、チャンピオン防衛戦と、各地方のチャンピオンとの成績は全勝無敗と、残した影響力と功績は『この100年の間』で越した人物はいない。

誰もが認める最強のチャンピオンであり、そのとてつもなく高い壁にそれ以降のチャンピオンは下から眺めるばかりだった。

——その彼に匹敵するトレーナーなんて、もう現れない。

誰もそう思っていた。

『シンオウ地方』

地方の中央にある巨大な山が大陸を二分していて、とても自然が豊かで肌寒い場所で、他の地方の人々からは、北の大地と呼ばれている。

『ヨスガシテイ』

地方の東部にある大都市で、人にもポケモンにも優しい町を目指した町作りを行っていて、きれいに整備された街並みの美しさには、時折目を奪われるくらいだ。町の北側は、ポケモンバトルやポケモンコンテストが行われる大きな競技場がある。

『あの伝説』から100年たった今、この物語は『ここから』始まる。



——ポケモンセンターの近くにあるバトルフィールド。

ヨスガシティにやってくるポケモントレーナーたちは、まず最初にこの場所にたどり着く。多くのトレーナーが集まり、腕を振るう場所であり、毎日のように気の入ったポケモンたちの声と、トレーナーの弾んだ声が、聞こえていた。

「ゴウカザル! かみなりパンチ」

1つのバトルフィールドを見てみよう。体をよろめかせたダイケンキと構えた拳に力を入れたゴウカザル、見守るように佇んでいる多くの人々。そして、2匹のポケモンの後ろ側に立つ、2人のトレーナー。

バチバチと音を鳴らした拳は、今にも倒れそうだったダイケンキに当たる。

『ダイケンキ、戦闘不能!』

——気付けば圧勝だった。

ポケモンバトルは、時間が進んでいることをついつい忘れてしまう。ポケモンたちの気迫、トレーナーたちの熱意を伝えるような指示、その空間に身を委ねてしまったら最後、歓声が聞こえて目が覚める。

——勝利したトレーナーを見てみよう。

黒髪に赤い無地の帽子を被り、半袖半ズボンに身を包んだ少年が、嬉しそうな表情をしている。シンオウ地方の御三家、『ほのおタイプ』のヒコザルの最終進化系、『かえんポケモン』のゴウカザル、そしてトレーナーの名前は、ラク。

彼は、ダイケンキのトレーナーに勝って5連勝目を達成していた。「勝負してくれて、ありがとう!」

ラクは、少し上の空のような声で言う。

* * *

口では言えないけども、この相手も他のトレーナーと同じでジムリーダーと戦うような緊張感はない。

強い相手はいないのか？

ゴウカザルを回復せずに5人のトレーナーに勝ち、尊敬の眼差しで見られている大衆の前で、そんなことは言えない。

「僕のゴウカザルはまだまだ戦えるから、また誰か勝負してくれないかな？」

これが精一杯だ。

彼は、強さに飢えているわけでない。自分の中の”ある弱さ”と向き合う強さに飢えていた。

「——自分で良ければ、相手になるよ」

自信がないような声を発し、彼と同じくらいの少年、黒髪に黒いリュックに暗い服装で、地味なエリートトレーナーのような風姿であった。

そのトレーナーの名前は、クオン。

あの人、3戦目あたりから僕の試合をずっと見ていたトレーナーだ。

誰も名乗り出ないからか、それとも少し疲れているゴウカザルを見てなのか。どっちだとしても中途半端な気持ちで名乗り出てくるトレーナーには、負ける気がしない。

ラクはそう思っていた。

* * *

『彼』とバトルをして、もし勝ってしまったら、連勝を止めてしまっ

たトレーナーになってしまおう。ゴウカザルを見ていて、少し熱が入り過ぎたか。

いつの間にか、言葉を返していた。

ゴウカザルと戦いたい、彼に勝って目立ちたい、そうではないと、言えるのに。

——言い訳は、やめよう。

クオンの行動は突発的であった。

『目と目が合ったらポケモンバトル！』

この世界では、そんな言葉がある。

相手の視線を避けていれば、ポケモンバトルはしなくていい。しかし、それだけだと、トレーナーが経験値を得ることは出来なくなる。とても深い言葉だと思う。



「いけ、ガバイト！」

クオンが投げたボールからは、『ほらあなポケモン』のガバイトが現れる。

2匹は見つめあい、その後ろで2人のトレーナーが硬い表情で見守る。

その時を息を呑み待つ人々。

彼らの試合は、まもなく始まろうとしていた。

——ゴウカザルが動いた。

ラクが”インファイト”を指示した頃には、ゴウカザルはガバイトの目の前にいた。連戦による疲労を感じさせない強者の風格を見せていた。

「ガバイト、”きりさく!”」

ガバイトは腕を構える、迎え撃つ気だ。冷静だと言えるガバイトの行動に、ゴウカザルの口から火の粉が飛ぶ。そのまま吹き飛ばしてやると、叫ぶようだ。

ゴウカザルは、目を閉じて、両腕のみに意識を集中させて、とにかく1発でも多く、拳を振るう。——しかし、あることに気付く、手ごたえがない。

目の前で身構えていたはずのガバイト、当たらないわけがない。

——ゴウカザルが目を開けるとガバイトがいない。

『どこに消えた?』

◆ ◆ ◆

ゴウカザルが”インファイト”を放ち、ここまでの出来事を横からもう一度見てみる。

ガバイトは、向かってくるゴウカザルに対して、気付かせることなく後ずさりをして、わずかな距離を作っていた。右拳を下がりながら避けて、左拳を低い体勢で避けた後、ゴウカザルの横に回り込んでいた。

隙だらけのゴウカザルに、ガバイトが”きりさく”を叩き込む。

”インファイト”を使った代償で防御力が下がり、”きりさく”の追加効果が発動して、威力が倍に膨れ上がっていたダメージ量がゴウカザルに加わった。

まさに絶望的な状況、息も絶え絶えになって、右手を顔に当てるゴウカザル。

ラクは、ゴウカザルに”かえんほうしゃ”を指示して、ガバイトを退けようとする。

それを知った上で、ガバイトは間合いに入ろうとしていた。

ゴウカザルの特性、『もうか』で威力を増した攻撃が、ガバイトの足元近くに当たり、その衝撃で大量の煙が舞う。

* * *

ガバイトは、この煙に紛れて攻めてくるだろう。

僕がガバイトのトレーナーだとしたら、その選択肢しか選ばない。

こんなに追い詰められた状況から勝ってきた試合なんて、いくつも
ある、僕とゴウカザルの強さを舐めないでほしい。

「ゴウカザル、”インフアイト”を構えて！」

逃げも隠れもしない、力でねじ伏せる。

第2話 ゴウカザルとガバイト

ラクは、ゴウカザルに”インファイト”を指示、そして煙を見続けた。

——足音は聞こえない。この大量の煙に紛れて、ガバイトは必ず現れる。

まだか、まだなのか。

あらゆる可能性を脳内でコマ送り動画のように予測し、唯々時間が過ぎていく。徐々に少なくなる煙を見て、ラクの頬から汗が垂れる。

——煙は晴れた。そこには何もいない。地面を掘ったような形跡もなく、ガバイトはどこかに消えていた。

「ガバイト、”りゅうせいぐん”！」

声を聞き、ラクが上を向くと、無数の隕石と空中に漂うガバイトの姿があった。

——クオンはあることをしていた。

煙が消えかけるタイミングを見計い、技を使いガバイトを空中に、煙が晴れ地上にいるゴウカザルを、ガバイトが目視した瞬間に”りゅうせいぐん”を指示。

この一連の流れは、少しのミスさえ許されない。失敗した瞬間、ゴウカザルの”インファイト”を受けることになっていただろう。

隕石はガバイトを追い越し、ゴウカザルに襲い掛かる。ゴウカザルは多くの隕石を避けられずに被弾した。

『ゴウカザル、戦闘不能！』

——負けた。

バトルフィールドの周りにいる多くのトレーナーたちは、思わず大歓声を上げていた。

——いつもゴウカザルの力に頼っては、勝ち続けていた。

僕が求めていた強さに負けた、泣きたいくらい悔しいのに。

試合に勝ったクオン、負けたはずのラクにも大きな拍手が送られていて、ラクの悔しさは、まるで煙のように消えていた。



空は青紫色に染まり、道路脇にある街灯が光りだす。時刻は夕食頃の時間。ヨスガシティの中心部に、とある飲食店があつた。ここに訪れた者は、温かなスープを口にし、英気を養い明日に備える。色鮮やかなポフィンなども置いてあつて、ポケモントレーナーたちにも、人気の店である。

クオンは、ラクに連れられてこの店にやってくる。中へ入ると、4人くらいで囲めるテーブルが所狭しと置かれている。誰が見ても、店の回転率を上げることしか考えていないと思えてしまう作りだ。

クオンが席に着くと、テーブルの上には、華やかな料理が並び、赤や青、黄色に緑など彩りよく、滑らかで平たい丸の形をした料理が最後に置かれた。テーブルの上は、例えるなら絵画のようである。

「これはポフィンだよ、ポケモンが好んで食べるお菓子なんだ！」

ポフィンとは、辛味、渋味、甘味、苦味、酸味の五種類ある”きのみ”の味を上手く使い、作られるお菓子である。

二人は、ガバイトとゴウカザルをボールから繰り出す。二匹は、目の前にあつたポフィンを見つめる。何か見つけたようにゴウカザルは、赤いポフィンを手取る。美味しそうに頬張るゴウカザルを見て、ガバイトは、徐に青いポフィンを手を取った。

「クオンって、ジムバッジをいくつ持っているの？」

『ジムバッジ』

ポケモントレーナーとして、知らぬものなどいない、この言葉。

各地方には、8人のジムリーダーがいて、挑戦し、勝利すると貰える証である。

8人のジムリーダーを打ち倒し、ジムバッジを8つ集めたトレーナーは、その地方のポケモンリーグの挑戦資格が得られる。更に、ジムバッジを8つ以上持つトレーナーは、治安維持を目的とするトレーナーから、その高い実力と信頼性を買われて、その場で捜査協力を頼

まれることがある。多くのトレーナーは、それらに憧れ、挫折する。

2人で試合のことを振り返り、話し合っていた際に、ラクはクオンにそう言った。

一見、他愛もない問いなのだが、クオンの表情は硬くなる。

* * *

ラクはジムバッジを2つも持っているのか、道理で強かったわけか。

——こんなにも美味しい料理がある店に案内されて、熱いバトルの札だと言う彼に、いつもなら、軽く口走っている”この嘘”は、つけないな。

「1つも持っていないんだ」

クオンは、高みを目指すことを諦めたトレーナーである。

バトルをした後に相手から、ジムバッジの数を聞かれることがあったが、5個、4個と適当な数を言っていた。

こうなることを予測するべきだった。

クオンは、後悔していた。

* * *

あの実力で、バッジを持っていない。僕のゴウカザルは、バッジを7つ持っていたトレーナーのエースポケモンに勝ったこともあるんだ。

当然だが、ラクは動揺する。

いくらゴウカザルが連戦で疲れていた、と考えた場合でもだ。

脳裏に焼き付いた試合は、駆け出しのトレーナーを相手に、ジムリーダーが消化試合をやっているようなもの。己の実力が、そんなものだと思えてしまい、彼の感情が高ぶった。

「そんな実力があるのに、ジム巡りの旅をしていないのは、もったいないよー！」

気付けば、怒り任せに言葉を放っていた。

聞いた彼の表情は、ピクリとも動かない。

この瞬間、興味がないとか、強くなくてもいいとか、そういうもの

ではない何かだと、ラクは感じていた。

「——若いうちに、多く失敗していた方がいいものだ、少年！」

2人がいる席に、藍色のスーツを着た中年男性が立つ。

大の大人が盗み聞きをされていて、子供の輪の中に入るのかという状況に、2人の思考は停止した。

「ズイタウンに強そうな、ブイゼル」を連れている、白いニット帽をかぶったトレーナーがいて、君と似たようなこと言う少年だった。ジム巡りに興味がないとか、とりあえず一度会ってみたらどうだ？」

男性は、そのまま彼らの声に、耳を貸すことなく、店から出て行く。酔った拍子で話す内容ではないからこそ、その言動が不気味に感じていた。



2人が店から出るころには、辺りはすっかり暗くなっていた。柔らかな色合いの街並みから、陽光を奪えば、こんなにも不安な気持ちにさせるのか。

街灯を頼りに2人は、208番道路の入り口にやってくる。

「今日は本当にありがとう！ またどこかで会えれば！」

ラクは、今からハクタイシティを目指し、ジムに挑戦するつもりだと、クオンに告げて、歩いていく。クオンには、そんな勇ましい背中と、遠くにあるテンガン山がぼんやりと見えていた。

クオンは、ふと後ろにある案内板を見つめた。

「——とりあえず、か」

ずっと目的のない旅を続けるつもりだった。

『君と似たようなこと言う少年だった』

あの時の言葉、どうしても引っかかる。

——ズイタウンに行くのはこれで何回目だろうか。

ヨスガシティとトバリシティの道中にある小さな町に、自分と似ているか。

そのトレーナーに、期待なんてしていない。自分の気持ちは、きつと変わらないだろう。

第3話 平穩を追い求める 白の主人公

『ズイタウン』

ヨスガシティとトバリシティの道中にある町で、その周辺は放牧地帯で埋め尽くしている。町の西側は、とれたての“きのみ”や搾りたてのモーモーミルクなどが並ぶ市場があり、東側にある森林を抜けると、謎の遺跡がある。

クオンは、ブイゼルを連れたトレーナーに会うために、209番道路を歩いていた。

——この整えられた道、あと少しか。

朝日が昇り、黒色に染まっていた木々や岩肌にも、いつもの色が付き始めた頃、クオンは、ズイタウンに到着した。

ブイゼルを連れた少年を探すために、人通りが多い市場にやってきた。そこはまるで、お祭りの屋台が窮屈に立ち並ぶように、一本道には沢山の店がずらりと、真ん中の道は人で溢れかえっていた。

そんな中、全速力で人と人の間を駆け抜ける少年、店舗の脇で商品である“きのみ”を恥じらいもなく食べる野生ポケモン、誰一人、気にしようとしなない。この町では、ごく普通のことらしい。

「あら、ブイゼル、今日は何を買いに来たの？」

声が出た方向を向くと、店のカウンターに両手でぶら下がるブイゼルがいる。店主がやってきてブイゼルは、カウンターから手を離し、身に着けていた小さい手提げカバンの中から、鉛筆とメモ帳を取り出した。

地面にメモ帳を置き、ブイゼルが鉛筆を持ち、メモ帳に何かを書き始める。手から鉛筆が離れると、何かを書いたであろう頁を破き、店主に渡していた。

「オレンのみ”が3つね！」

その紙には、カタカナ3文字で『オレン』、数字一文字で『3』と、書いてあった。店主がメモ帳を見ている間に、ブイゼルはカバンの中から小さい袋を取り出す。

それに気付いた店主が”オレンのみ”とメモ帳をブイゼルに渡し

て、小さな袋を受け取った。

「毎度ありー」

そんな非日常的な光景を目の当たりにしていたクオンは、ある記憶を、ふと思いつく。子供の頃か、あるいは旅をしてて、どこかで聞いた、ある言葉。

『ある昔、どこかの学者が言っていた。世の中には、人の言葉を話すポケモン、その種族らしくない行動をみせたりするポケモンが確かに存在していて、その分、ポケモンの本能的な部分が失われていくという』
人の道具である、鉛筆とメモ帳を理解し、文字を書くことが出来る
ブイゼル。

ブイゼルが人の言葉を知っているということは、トレーナーは事細かに指示を出せる。そして、ポケモンの言い分もトレーナーは、事細かに知りえるということ。

ポケモンバトルとは、技と技のぶつかり合いが醍醐味であるが、あのブイゼルは正しく例外で、育て方次第では戦略的なバトルが可能である。

『とりあえず一度会ってみたらどうだ？』

クオンは、再びブイゼルに目を向ける。

あの時の中年男性が、にやけながら話していた理由が、分かったような気がした。まずは、あのブイゼルを追いかけよう。

◆ ◆ ◆

ブイゼルは集落を素通りし、東側にある森林に入っていく。

クオンは、ブイゼルを見失わないように、森林の中を進んでいくと、人が住む気配がないような古民家にたどり着いた。ブイゼルは、扉を開けて中に入っていく。

クオンは、足を止める。

——間違いなく、あの家はライフラインが止まっている。例のトレーナーがこの家にいるとは思えないが、ここまで来たからには、確かめる必要がある。

クオンが家の窓から中を覗くと、少年がブイゼルを撫でている様子が伺えた。

本当に彼が、ブイゼルのトレーナーなのだろうか。

「誰？」

少年と目が合って、クオンは咄嗟に窓の下に隠れてしまう。

逃げようか、潔く謝ろうかと悩んでいると、扉が開く音がした。

「見慣れないお客さんみたいだね、ようこそ我が家にお茶でも飲んで行かれませんか？」

四葉のクローバーが描かれた白いニット帽、首元に黄色いスカーフ、暗い森の中でとても明るい服装に身を包んだ少年がクオンの目の前に立っていた。彼の名前は、トロナツ。

彼が放った声や言葉は、耳から入るといふよりは、頭の中に入っていく、不思議と何も言い返せなくなるようなものだった。そして、彼の隣にブイゼルがいた。

——クオンは、家に入り、お茶を飲み、彼に今までの経緯を話した。

「マチエスさんの知り合いか！」

——話を進めていくと、ヨスガシティの飲食店で出会った中年男性は、彼の両親の親族であることが分かった。そして彼と話していくうちに疑問が浮かんでいた。

家の中を見渡していると、日用品が置いてあった。しかし、どれも2人分あるかないかの数だ。何より、幼い子供のように、無警戒な彼に違和感を感じていた。

この家には、彼1人で暮らしているのだろうか。

いや、まずは彼にあの事を話してみよう。

——過去を振り返る。現在から数年前の出来事である。

この家に住む少年、トロナツは、物心ついた時からこの家で自給自足な生活を送っている。月に一度くらいマチエスが様子を見に来てくれている。言わば義親だ。トロナツは、両親のことは何も知らない。

マチエスがトロナツの家にやってきた。いつもならば他愛もない

話を始めるのだが、この日のマチエスは違っていた。

「いつも思うのだが、両親のことで、俺に聞いたくならないのか？」

マチエスは、トロナツの両親の知り合いである。

「ずっと僕のことをほったらかしにしている両親なんて気にならないよ」

そうか、と言うような顔でマチエスは、お茶を口にする。

「トロナツは、旅をしようとは思わんのか？」

「旅をしたいけど、時々この家に怪我をしたポケモンがやってくる時があるんだ。ここを離れるわけにはいかないよ」

2人の真剣な話し合いは、ここで終わった。

実を言えばトロナツは、旅をしたかった。しかし、一昔前に森林で怪我をしたポケモンを見かけたことがあった。トロナツは、ポケモンを家に連れてきて介抱したことがあり、それ以来、怪我をしたポケモンが家にやってくるようになった。怪我をしたポケモンがやってきて、手当てをし、ポケモンが元気になると嬉しそうに外へ駆けていく。

度々トロナツは、その表情を見ると、思い悩む。

旅をしたい、家を離れるわけにはいかない。元気になるポケモンを見るたびに、トロナツの心を締め付けた。

——数日くらいなら、大丈夫かな。

数日分の食料や貴重品などを紺色の手提げカバンに入れて、ブイゼルと一緒にズイタウンを飛び出した。

果てしなく続いた道、待ち構える多くのトレーナー、見るものが新鮮なものばかりで、気付けばトロナツは考えることをやめていた。

「トバリシテイ？」

トロナツは、そう書かれた看板を見つけて、我に返る。

「そろそろ帰らないと」

まだ進んでみたいという気持ちを押し殺し、今までやってきた道を重い足取りで歩いていく。ズイタウンまで2日もかかっていた。

「雲行きが怪しいな」

その日のズイタウンは、上空に大きな積乱雲があり、雷雨に見舞われていた。

森林の野生のポケモンたちは大丈夫だろうか、ズイタウンに着いたトロナツは、ぬかるんだ地面を、雷鳴が鳴り響き渡る森林の中を駆けていく。家に近づくと、トロナツとブイゼルは足を止めていた。

家の玄関先で、眠るように倒れているポケモンの姿があった。

第4話 黒く塗られた過去

「悪いけど、今話した通り、僕はもう旅をしたくないんだ」

クオンは、トロナツと一緒に旅をしないかと持ちかけていたが、その理由を聞いて何も言葉を返せないでいた。

* * *

彼が旅をしない理由か、あまりにも報われない話だ。しかし、この違和感はなんだろう。何か自分は返せる言葉を知っているのか。

クオンは、ぬるくなったお茶を飲み干して、立ち上がる。

「少し森林の中を散歩してくるよ、ガバイトを頼めるかな？」

「分かったー！」

クオンが1人で森林へ向かう理由は、少し頭の中を整理しようと思ったからである。そのまま扉の方に体を向けて、玄関先で振り返る。

ブイゼルとガバイトは、出会ってまだ数分なはずなのに、慣れ親しんだ様子だった。それを見たクオンは、扉を閉めた。

森林の中は、空気が澄んでいて心地よい。読書をしたり、歌いたくなる気持ちになれる。木漏れ日が、自然の美しさを、より加速させている。気を落ち着かせるなら、うってつけの場所である。

クオンは、切り株に座り、目を閉じていると、遠くでポケモンの鳴き声がしていたことに気が付く。音を頼りに進んでいくと、2匹のポケモンが争い、その近くに大きな”きのみ”が落ちていた。

勝負の末、片方のポケモンが力尽きて倒れる。もう片方のポケモンは、雄叫びを上げて”きのみ”に噛り付く。この2匹は、”きのみ”を巡って争っていたのだ。

強い者は得られて、弱い者は得られない。それが野生のポケモンたちの世界である。

「……ここは？」

森林を抜けた先には、大きな岩山があった。

「ズイのいせき」

辺りを見渡すと、いくつもの洞窟があり、近くの看板にはそう書か

れている。

洞窟の中は、奥行きがある空間に、左右に上下の階段、壁には不気味で見たこともない文字が記されている。クオンは、故意に作られた小さな穴を見つけていた。

* * *

『アイツ』と初めて出会ったとき、確かこれくらいの穴の中に潜んでいた。

あの時の出来事は今でも忘れられない。懐かしいな。

無意識のうちにクオンは、小さな穴に頭から潜り込んでいた。ちよつとした興味本位で、足まで中へ入れていく。

胸のあたりで変な音がした。

「!?!」

突然、地面が陥没して、広い空洞にクオンは落とされた。

『——ポケモンリーグで優勝しよう!』

誰の言葉だろう、どこかで聞いたような。

真つ暗な視界の中で、そんな言葉が鮮明に見えていた。

◆ ◆ ◆

誰しも、見たくない過去を思い出すことがあるだろう。楽しい過去ではなく、辛い過去をと。一説によると、現状打破するために過去から何かしらの答えを得ようとする、無意識な行動だと言われている。

——数年前にある噂が流れていた。

シンオウ地方の8人ジムリーダーを1匹のポケモンで打ち負かしたトレーナーがいると。その年のポケモンリーグは噂のトレーナーに期待を寄せていたが、結局誰だったのか、今でも分かっていない。『ハクタイシティ』

歴史を感じる町であるが、所々に高層ビルが立ち並び、その言葉は無くなりつつある。各地方まで繋がって、今やシンオウ地方で有名な公共交通機関である『ちかつうろ』が作られ始めたと言われている。そ

してクオンの出身地である。

ここはハクタイジム、ジムリーダーのアールスは、今日も挑戦者とバトルを行っていた。彼女が使うポケモンは、『くさタイプ』であり、キヤッチコピーは、未来に種まく少女。からめ手から攻める戦術を得意としており、大半のポケモンを変化技のみで下している。

「エルフーン、コットンガード!」

エルフーンの周りから綿毛が現れ、自身の体に纏わせた。

挑戦者のポケモンには『やどりぎのタネ』が植え付けられていて、徐々に力を奪っていく。もう勝負はついていた。

挑戦者のポケモンは抗う術はなく、倒れてしまう。

「相変わらず、ジムリーダーらしくない戦い方をするものですね」

——事が終わって、観客席で試合を見ていた1人の男がアールスに話しかけていた。”くさタイプ”の戦い方だが、ジムリーダーとしては、賛否両論が飛び交うものだ。

「ウチなんて、まだ可愛い方だよ、『アイツ』に比べたらね」

しかし、こういった一方的に勝てる試合は、例年より多くなく、今年のポケモンリーグはレベルが高くなると予想されていた。

——その日の夕方、アールスは、ジム入口にある花壇の花々に水やりをしていた。

「アールスさん今日の挑戦者は、強かった?」

若い少年が彼女に話しかけていた。少年の名はクオン、まだポケモンを持ってない年齢でありながら、一人前のポケモントレーナーを目指し、努力していた。

その姿をアールスは、普段からよく見ていた。

「大した相手じゃなかったよ、それよりクオン、後ろのポケモンはどうしたの?」

クオンの足元にはフカマルが寄り付いていた。

「小さな洞穴にいたんだ」

その日の昼頃、クオンは、ハクタイシティの外れにある岩場で遊んでいると、小さな洞穴の中に、1匹のフカマルが身を潜めていた。ク

オンとフカマルの目が合うと、フカマルは、クオンの後ろをついてきていた。

アールスは、彼の話を聞き、少し頭を抱える。

昔から、野生のフカマルの生息域は、206番道路の”まよいのどろくつ”であり、必ず群れで行動していると言われていた。ハクタイシティの外れにある岩場にいたとは到底考えられるものではない。しかし、アールスは、クオンは嘘をつくような子供ではないと知っていた。

ポケモンの群れで、1匹が追い出されるケースは、大きく分けて2つある。

群れの掟というものを破るような、ならず者であるか、群れから同種族だと思われなかった個性的なポケモンであるかである。

「そのフカマル、触ってもいい?」

もしや、と思ったアールスは、フカマルに手を当てる、ザラザラとした肌触りで確信した。このフカマルの特性は、”すながくれ”ではなく、触れた相手をキズつける『隠れ特性』の”さめはだ”だと。

『隠れ特性』

各種族に存在する、通常とは異なる特性を指しており、何らかの突然変異によるものだと言われている。そのため有している個体は少ない。その割合は今でもはっきりしていない。

「そのフカマルは、群れからはぐれてしまった迷子だと思うんだ、クオン、しっかりと面倒を見れる?」

「——でも、まだ僕は、ポケモンを持つてはいけないんじゃないの?」
「ウチが特別に許すよ、ただし、もし何かフカマルのことで困ったことがあったら、教えてね!」

アールスは、クオンにモンスターボールを1つ渡した。クオンは、モンスターボールを受け取り、フカマルを見る。フカマルは、警戒する素振りを見せずに、クオンが投げたモンスターボールに当たっていた。

「フカマル、僕と一緒にポケモンリーグで優勝しよう!」

クオンから、夢溢れる言葉が零れだしていた。

第5話 孤高のトレーナー ロー

クオンがフカマルを捕まえてから、数か月の時が流れた。

今日もアールスは、ジム戦で挑戦者に快勝を続けていた。ここ最近、手ごたえのある挑戦者とバトルをしていない。

「アールスさん、今日もバトル！」

観客席で試合を見ていたクオンは、アールスにバトルを申し込む。

フカマルなどの『ドラゴンタイプ』は、闘争本能が高く、駆け出しのトレーナーには向いてない。トレーナーの言うことを聞かなくなる事があるからだ。アールスは、クオンにトレーナーとしての知識を教えるのと同時に、フカマルの闘争本能とぶつかり合うことにしていた。

アールスが使うポケモンはエルフーン、手加減をしなければフカマルは何も出来ずに、倒されてしまうだろう。それが分からないのか、諦めきれないのか、いつも全力で向かっていく。

「今日はもう終わり、また明日やろう！」

気付けば外は赤く染まり、アールスは、ジム入口の花壇の花々に水やりをしなくてはいけない。彼女は、少し浮かない表情で花々を見つめる。

「ジムリーダーの方ですか？ ジムに挑戦したいのですが」

長い黒髪で紺色のロングコートを着た、さわやかな笑顔の青少年が話しかける。彼の名前は、ロー。この年のポケモンリーグに出場した1人のトレーナーである。

クオンは、アールスとその青少年がジムの中に入っていくところを、遠くで見ている。今からバトルが始まるんだと分かったクオンは、急いでジムの中に入り、観客席に腰を下ろす。それが、忘れることが出来ない一試合になるとは知らずに。

アールスは、チコリータを繰り出す。対してローの投げたボールから出てきたポケモンは、ラティオス。”普通とは違い”伝説の中で語られる1匹のポケモンであった。

「ラティオス、”りゅうのほう”」

突然、アールスの目の前で爆発が起きた。観客席からは混乱した声が聞こえ、アールスはまさかと考える。煙がなくなると、チコリータは倒れていた。

——技が見えなかった。

この時、アールスは悟った。

アールスは、次にエルフーンを繰り出した。

ロウは、ラテイオスというポケモンを使う余裕からなのか、さわやかな笑顔を崩さずにエルフーンを見つめる。

「マジカルシャイン!」

ラテイオスの頭上に夥しい数の光を敷き詰める。いつも見ているエルフーンのマジカルシャインとは違う、相手を食らいつくす憎悪に満ちた攻撃のようだった。

「ラテイオス、”サイコキネシス”」

向かってきていた無数の光は、時を止めたのかと思わせるほど、ピタッと静止する。ラテイオスが力む様子を見せると、光が同じ場所に集まりだす。大きな光の塊へと変わると、エルフーンに凄まじい速度で襲い掛かい、大きな閃光を生み出した。

光が弱まり、辛うじてエルフーンが立つ姿が見えた。ロウは、迷いなくラテイオスに何か指示をする。

「待つて、降参するよ!」

◆ ◆ ◆
これ以上のバトルは無意味だと判断し、アールスは負けを認めた。

◆ ◆ ◆

ロウはバツジを受け取り、空を見上げていた。

「なんで、そんなに強いのか?」

その背中を見上げるように、見つめていたクオンが話しかける。

「簡単なことさ、ポケモンに必要なものは、飴と鞭だけ」

ジムバツジを服のポケットに入れて、ロウは振り返る。

「自分が良いと思う行動をしていたら褒めて、自分が悪いと思う行動をしていたら然って、自分が当然と思う行動をしていたら何もしない。つまらない愛情は、ポケモンを駄目にさせてしまう不味い飴だ。少年も気をつけなさい」

「どうしようって?」

しかし、ロウはそのまま何も言わずに、町から去っていった。

◆ ◆ ◆

気が付くとクオンは、何も無い真つ暗な空間に立っていた。ここは夢の中なのだろうか、家に帰ってからの記憶が曖昧であった。

『勝てない!』

どこからか、小さい子供の声が聞こえる。

——強い絆を持っていたとしても、強くなることはできない。

バトルにどれだけ情熱を注いだとしても、感情を殺し、相手のポケモンと自分のポケモンを正確に見極めて、指示を与えるトレーナーに。

こんな苦しそうに声を放つ小さい子供は、誰なんだ。

『そんなことないよ!!』

どこかで聞き覚えのある声が聞こえてきた。クオンは目を覚ますと、トロナツとブイゼル、目の前にはガバイトがいた。

「急にガバイトが飛び出していったから、追いかけてきたんだ」

トロナツの話によれば、ガバイトが洞窟の中から、クオンを背負って現れたという。ガバイトは何か感じて、ここへ来たのだろうか。

クオンは、ガバイトと目を合わせた。

「ガバイト、お前に言いたいことがあるんだ。一緒に、ポケモンリーグで優勝を目指さないか?」

ガバイトの瞳が少し光り、クオンの胸にゆっくりと飛び込んでいった。実際そういった気持ちだったかは、分からない。しかし、クオンの目から涙が溢れ出ていた。

この日は、雲ひとつない神々しいくらいの夕焼け色の空であった。クオンはトロナツを見て口を開かせた。

「トロナツ、もう一度言うけど、一緒に旅をしないか?」

今だから言える。人は過去には戻れないし、変えられない。でも過去を乗り越えるチャンスは未来にいくつも置いてある。少なくとも俺はそう思う。

「もし、トロナツがポケモンドクターになれば、もっと多くのポケモン

たちを救えると思う。お互いの夢の為に、俺はトロナツと旅をしたい！」

「——僕も言おうと思っていたんだ、ブイゼルもガバイトと凄く仲良しになっちゃったし、いいよ！」

どこまでも強さを追い求める、『黒の主人公』と、どこまでも平穏を追い求める『白の主人公』が出会い、認め合う。これは、考え方が全く違う2人が染め上げる物語。

黒と白の2色から染め上げ始める、1色のモノクローム。

第2章 ヨスガシテイ テンガン杯編

第6話 テンガン杯

人は成長する。しかし、どんなに努力をしても、成長を実感できない人は存在する。努力が足りないのか、気持ちの問題なのか、そんな簡単なことではないのか。もしかしたら、もっと簡単なところに、答えはあるのかもしれない。

クオンとトロナツは、旅の道中にある、ヨスガシテイにやってきた。2人は、ポケモンセンターの中へ入り、ソファアーに座る。

——改めて言おう、この物語は『ここから』始まる。

◆ ◆ ◆

「この町にジムがあるけど、ハクタイジムを目指すの？」
トロナツがクオンに話しかける。

2人が目指す目的地は、ハクタイシテイである。今いるヨスガシテイを出て、テンガン山の反対側にあるクロガネシテイを経由して、ハクタイシテイへ到着する。ジムバッジを集めるのなら、非効率な順番であったが、クオンは、目的地を変える気はない。

「一番最初のバッジは、ハクタイジムって昔から決めていたから。それに、この町のジムは、バッジを4つ以上持つトレーナーしか受け付けないし」

ジムリーダーは、相手トレーナーの所得バッジ数を確認し、そのトレーナーのレベルにあったポケモンを出さなくてはいけない。定められたルールの中で、他より優れた成績を残している地方の中のジムリーダーは、そういった特別な扱いを受ける。

過去に優れた成績を残していたジムリーダーが、多くの駆け出しのトレーナーを打ち負かし、負けた駆け出しのトレーナーの殆どが、早い段階で挫折する事案が発生した。それ以降、ジムリーダーには、このようなルールが設けられている。

この日のポケモンセンターの中は、いつもより賑やかだった。クオ

ンは、窓を見てポケモンセンターの裏手にあるバトルフィールドでも、多くのトレーナーで溢れていたことに気付いていた。

——何かあるのかと、クオンは考える。

トロナツは、壁の掲示板に大きく貼られていたポスターを見つめる。

大きな文字で『テンガン杯』と書かれてあり、数日後にこの町で大規模な大会があるようだ。使用できるポケモンは1匹のみ、テンガン山から近い5つの町の出身者が参加でき、偶然にもクオンとトロナツは、その条件を満たしている。

「クオン、この大会に参加してみない？」

クオンは、トロナツが見ていた掲示板の前に立つ。

* * *

急いでハクタイジムに向かうつもりはない。トロナツのブイゼルの実力も見てもたし、参加してみよう。

クオンは、実力があると言えど、今までトレーナーからバトルを申し込まれる程度である。こういう大会などでは、ポケモンの実力差より、トレーナーの実力差が影響しやすい。目立ったポケモンが、多くのトレーナーに対策されるからだ。

ポケモンセンターやバトルフィールドに、トレーナーで溢れかえっていた理由は、1匹しか参加できない大会である為。多くのトレーナーたちは、自身のポケモンに、タイプ相性などで有利なポケモンを、使いそうなトレーナーを把握していたのだ。

「お前！ あの時のガバイト使いのトレーナーか！」

赤いパーカを着て、頭に赤い鉢巻を巻いた少し太めの少年が、2人に声をかけていた。彼の名前はカイズ、この間のラクとクオンのバトルを見ていた群衆の1人だと話す。彼もこの大会に参加している1人で、ある悩みがあった。

「迷惑じゃないなら教えて欲しいんだ！ 強くなる秘訣を！」

カイズは、この大会に参加しているトレーナーの中に1人、負けたくないトレーナーがいる。トレーナーの名前はセトント。カイズとセトントはライバルである。しかしカイズは、彼とのバトルで一度も

勝ったことがなかった。

「大会で戦うことになるか、分からないんじゃないのか」

クオンは、そう言葉を返す。

大規模な大会となると、100人以上のトレーナーが集まってくる。大勢の参加者の中でカイズとセトントが対戦相手となる確率は、とても少ない。

「セトントは絶対に予選を通過してくる。だから俺も予選を突破する実力が欲しいんだ！」

クオンは、カイズのあまりに軽率な言動に、顔をしかめる。空気を読むことを知らないのだろうか。本選に出場できるトレーナーは、たった32人である。カイズが予選を通過すれば、セトントと巡り合う確率は、確かに高い。——もしカイズの言葉が本当なら、セトントというトレーナーは相当の実力を持っている。

——2人の会話はそこから続かなかった。

「とりあえず、バトルしてみようよ！」

トロナツは、二人にそう言う。強さを教える教えないの前に、カイズの実力を確かめなくてはいけない。クオンは、頭の中で状況を整理する。

カイズがそんな悩みを打ち明けるといふことは、自身が予選を突破できる実力があるからだとかクオンは解釈していた。

「トロナツも来るのか？」

後からついて来ようとしているトロナツに気付き、クオンが尋ねる。

「2人の試合を観戦しようかなって」

3人は、ポケモンセンターの裏手にあるバトルフィールドに向かっていた。丁度良く、使われていないバトルフィールドが1つあった。

クオンとカイズは、そのバトルフィールドを挟んで向かい合う。トロナツは、外側にある所々に置かれたベンチの中で、バトルフィールドの真ん中の辺りのベンチに座った。

トロナツが紺色の手提げカバンの中からボールを出し、ブイゼルを繰り出した。

「今から、ガバイトがバトルをするんだ！」

トロナツの言葉を理解しているのか、ブイゼルはこくりと頷き、ベンチに座りバトルフィールドを眺める。

ガバイトがバトルフィールドに立つ、カイズのボールからは、レアコイルが現れる。レアコイルのタイプは、『でんき、はがねタイプ』であり、ガバイトのタイプは、『ドラゴン、じめんタイプ』である。タイプ相性では、ガバイトが有利であった。

しかし、それくらいの判断材料で、ガバイトが勝つとは誰も言えない。それがポケモンバトルの面白さでもある。



ガバイトが動いた、レアコイルに目線を向けて、一気に距離を詰めている。

「レアコイル！ ”ラスターカノン” で迎え撃つよ！」

それに気づいたガバイトは、フィールド中央で足を止める。クオンは、ガバイトに”りゅうせいぐん”を指示していて、放たれた”ラスターカノン”をガバイトは、難なく避ける。”ラスターカノン”は地面へと当たり、ガバイトは煙の中に消えた。

ガバイトが煙の中に消える。ラクとの試合で見せていた『この光景』は、カイズの心を震わせていた。

* * *

改めて思い知らされたよ、あのガバイトの素早さ、そしてレアコイルと煙の距離感、横から見ているのと、正面で見えるのでは、全く緊張感が違う。

——焦って、下手な指示を出してしまいそうだ。

「レアコイル、降りてくる”りゅうせいぐん”を避ける！」

レアコイルは落ちてくる隕石を避ける、煙が消えるとガバイトはいない、カイズの高揚感が高まる。”りゅうせいぐん”で凸凹としたフィールドは、ガバイトが隠れられる大きさの窪みはいくつもあつた。ガバイトは、どこからやってくるのか。

——レアコイルの足元にある小石が揺れていた。この時、誰も気づいていない。一番最初に気付いたのは、レアコイルだった。

直ぐ下の地面に何かの気配を察したが、もうその考えは遅く、地面を突き破りガバイトが現れ、レアコイルに渾身の一撃を与えていた。

「勝負ありかな」

ブイゼルと試合を見ていたトロナツが、密かに呟いた。

攻撃を受けたレアコイルは地面へゆっくりと落ち、動く気配がなかった。今のガバイトの技は『あなをほる』でカイズはその指示を放った声を聞いていない。

「どこで、その指示を放っていたんだ？」

カイズは薄々気付いてはいたが、クオンにそう言葉を放つ。

「りゆうせいぐん」がレアコイルに落ちてきた時、その指示をガバイトに言った」

そう、カイズが聞き逃しても、仕方がない。ガバイトが放ったりゆうせいぐん”は、次の指示を相手に聞かせないためだけの技でしかなかった。

カイズは、レアコイルをボールに戻し、頭の鉢巻を取っていた。

「セトントもこれくらいの実力がある、やっぱりこの差は簡単には埋まらないんだな」

言い終えたカイズはその場で自信を無くし、うつけたように立ち尽くしていた。クオンは返せる言葉が見つからなく焦る。

「次は、僕がクオンと戦ってみようかな」

カイズの隣には、トロナツとブイゼルがいた。

第7話 白黒のバトル

カイズがトロナツがいたベンチに座っていて、クオンの向こうにトロナツがいた。トロナツは、自信に満ちた表情で立っていて、少しクオンは考える。

彼のことを知っている中年男性は、『強そうなブイゼル』としか言っていない。果たしてその通りであるのか。それともトレーナーが強いのか。

「俺の仇を取ってくれ！」

ベンチからは、カイズの声が聞こえる。無傷なガバイトにブイゼルが立ちはだかった。

ガバイトという”ドラゴンタイプ”のポケモンは、高い能力を持っている。それに対して、ブイゼルというポケモンは、水辺でよく見かけるような普通のポケモン。

——能力差で、ガバイトが断然有利である。

◆ ◆ ◆
「ガバイト、”きりさく”！」

左手の爪を光らせてガバイトは、ブイゼルへ距離を詰める。

クオンは、ガバイトに地面をたたき割れと指示し、その声はフィールド中央にいたガバイトに届き、目の前の地面を光った爪で切り裂いた。

「ガバイト、”ドラゴンクロー”！」

ガバイトは右手の爪で地面から飛び上がった多くの土の塊を、ブイゼルへ飛ばす。最初に指示から、ここまで数秒の出来事、クオンとガバイトの信頼から成せる戦い方である。クオンは確信する、ブイゼルは避けきれないと。

「ブイゼル、ガバイトの背後に回るよ、”みずでっぼう”で飛び上がって！」

向かってくる土の塊に背を向けて、ブイゼルは真下の地面に”みずでっぼう”を当てる。するとブイゼルは水の勢いで、ゆっくりと宙に浮いていた。とある飛行器具をつけたように空高く舞っていて、襲い

掛かる土の塊はブイゼルの下を通り過ぎていた。

「——ガバイト！ ”ドラゴンクロー” で反撃！」

ガバイトに詰め掛かるブイゼルに気付き、クオンが遅れて指示をする。

「ブイゼル、” でんこうせつか！」

ほぼ同時にトロナツもブイゼルに指示。ブイゼルの素早い攻撃がガバイトへ当たった。ガバイトは体をふらつかせながらも、目でブイゼルを捉えていて、”ドラゴンクロー”を振るった。ガバイトの思わぬ反撃を予測していたようにブイゼルは、その素早さで、既にガバイトの間合いから離れている。

反撃が不発になってか、悔しそうにガバイトは小さく地団駄を踏む。クオンも少し顔が強張る。

* * *

そんな方法で避けるとは思わなかった。技術力で負けたと感じさせられたトレーナーで初めてな気がするな、この試合負けたくはない。

——流れを変えよう、まずは”りゆうせいぐん”で様子を見るか。

クオンは、ガバイトに指示を放つ。

「ガバイト、”りゆうせいぐん！」

それを見ていたトロナツは、ある指示を放った。

「ブイゼル、”さきどり！」

上空から無数の隕石が見える、それはガバイトのもの、ではない。『さきどり』という技は、相手の攻撃技を先に使う技、成功すると相手の攻撃技が無効化され、先取った技の威力が増す。つまり、トリックでリスクある技であって、使い手を選ぶ。

クオンやガバイトが、普段から見慣れている”りゆうせいぐん”だったが、隕石の大きさや、速度が増していることが見るからに分かっていた。

ガバイトは落ちてくる隕石全てを避けきれなかった。

——フィールドの中央には、ガバイトがうつぶせで倒れていた。トロナツの勝ちである。

「——素晴らしいバトルだったよ！」

3人が声のした方向へ顔を向けると、少女と少年の2人がこつちに拍手を送っていた。クオンはその余裕がある対応に、少しいらつく。声をかけた少女の名前はコノミ、少し小柄な体格を誤魔化すように青色なワンピース、大きな白いハットを被る。隣にいる背の高い少年の名前はフウト、青いシャツに伊達メガネをかけて、無駄に長いようなイヤホンを耳に付けていた。

「ああー。前大会優勝者と準優勝者の2人だ！」

——カイズが急に叫んでいた。

つまり、前回テンガン杯優勝者、ラグラージ使いのコノミ。前回準優勝者、グレイシア使いのフウト。列記とした実力者の2人だった。「詳しい話は後で、とりあえずポケモンを回復させてから」

コノミとフウトは、今大会にも参加していて、目立ったトレーナーをマークしていた。素晴らしいバトルというのは、2人がそれだけマークされるような、トレーナーだったと言えるだろう。



ポケモンセンターへ戻り、クオンとカイズはポケモンを回復させる。5人はテーブルを囲み座って、今大会の事で話し合う。ずっと1人旅をしていたクオンにとっては、あまり慣れていない状況であった為、他4人の会話を聞いている。

「はつきり言っただけはレベルが低い、マークするようなトレーナーが少ないからな」

フウトが腕を組み、顔をしかめて話す。

「数日この辺りで見回っていたんだけど、君たちと並ぶようなトレーナーはいなかったんだ」

続くようにコノミが話していた。

この大会に参加する実力者はほんの一握りなのであろう。クオンは、その会話を聞きながら、考え事をする。

これなら、予選を容易に突破できるか、優勝を目指してみるのも、あ

りかもしれない。

「まあ、俺が優勝するけどな！」

カイズが自信満々に言っていた。

「何を、優勝するのは俺だよ」

業を煮やしたようにフウトが語気を強めて言っていた。流石にここで自分もそんなことを言う気はないが、言わないといけないのか。いや、深く考えすぎだ。

——そんな会話の中、ブイゼルがカバンの中から、鉛筆とメモ帳を取り出す。

「そのブイゼルって文字を書くの？」

コノミが興味本位でトロナツに聞く、そして『ポケモン図鑑』を持ちブイゼルに近寄る。

「ちよつと記録させてもらうよ」

『ポケモン図鑑』

全てのポケモンの詳細が載っている便利な機械で、シンオウ地方なら、ヒノキア博士から認められたトレーナーが貰うことが出来る。新発見などを記録する特有のポケモン図鑑も存在する。

「——普通のブイゼルはこういったことはしないけど」

トロナツは、後ろめたさを感じながら言葉を呟いた。

「知ってる、だから珍しいと思って、撮っていたんだ！」

コノミが持つポケモン図鑑には、撮影機能が備わっていて、ブイゼルが鉛筆を走らせている瞬間をパシャパシャと撮っていた。こうやって、新種のポケモンや新発見が証明されていくのだろう。

コノミとフウトの2人はヒノキア博士の助手である。数年前までは、博士からポケモン図鑑を託されたトレーナーであったが、お互い幼いころに憧れた夢を諦め、博士の助手としてシンオウ地方を渡り歩き、珍しいポケモンを記録している。

「確かヒノキア博士って、短気で怖いとか話に聞くけど、大丈夫なのか？」

カイズが言う。シンオウ地方ではその名を知らぬ者などいないと

言われる人物だが、稀に過激な発言をすることでも有名である。

「根はいい人だつて知ってるから、苦になんないよ」

「——本当に実力あるトレーナーはいなかったんですか？」

クオンは、言葉を発した。

「セトントは当日に來るとか言ってたからな、そう思つても仕方がないぜ！」

「ああ、いなかったよ」

フウトが言葉を返す。

「——1人だけ、心当たりがある」

コノミはそう呟いて、気味の悪いアブソルを連れたトレーナーと話した。

第8話 ジムリーダー ユウバ

今から3日前の出来事である。コノミがポケモンセンターを訪れてソファアに座り、窓から外のバトルフィールドで行われる試合を眺めていた。

(今日も、大した試合がないな)

コノミはそう思う、前回に行われたテンガン杯で燃え上がるような数ある試合を勝ち進み、優勝した瞬間を思い返す。今大会もそうあつて欲しいなど、ここへ来るといつも思っていた。だが、それはとても遠いような願望であると、コノミは嫌でも感じる。

前大会と今大会のトレーナーの質は明らかに違う。そう認めざるを得ない。

——窓の外の風景に見飽きて、センター内の様子を見るコノミ。

「——アブソルをお願いします」

水色なコートで身をまとわせ、金色のショートヘアな髪型の少女が1つのボールを渡していた。コノミは元々勘が鋭く、少女の些細なしぐさで、ある事に気付いていた。

(この人、かなり強い。大勢のトレーナーが轟めく中で、凜とした姿を崩さない)

その少女は、ボールを受け取り、隅でポケモンを出していた。中のポケモンこそ、アブソル。汚れのない真っ白な体毛に黒い爪と尻尾。

——ここまでだと他と変わりないアブソルだったが、頭にある黒い角の先端部分だけは、真っ赤で垂れるように色分けされている。血とかではなく、そういった特徴があった。



「——結論から言つて、あの少女は相当強いと見ているよ」

コノミはそう話したが、実際にそのアブソルの試合を見していないので、誰もが何も言えない。勿論その少女が今大会に参加しているか分

からない。

「——コノミ、そろそろあの店に行かないか？」

「あ、もうそんな時間か！」

2人はこの後、どこかで昼食をとるつもりのもりのようで、3人に当日にまた会えればと言い残し、ポケモンセンターから出て行った。

クオンを含めて3人になり、話題はそれぞれの目標について話し合いになる。

「クオンは、ポケモンリーグで優勝することを目指しているのか！」

カイズの目標は、四天王やチャンピオンと出会うことであった。珍しい目標などと、クオンは思う。四天王やチャンピオンは、昔は誰しもが、その名その姿を知るジムリーダーと同じく憧れの存在であったらしい。しかし、その頃から幾度となく大規模な犯罪組織などを相手に、素性を隠して行動することが多かつたという。今では目立つことなく行動する為、どんな人物なのか公にされてない。

「トロナツは、どんな目標があるんだ？」

「えっ！」

トロナツは、まだ目標というものの決めていない。答えられなかった自分が恥ずかしくなり、旅をしているのだから、目標を決めないとなと、トロナツは思った。

「まだ、決めていないや」



テンガン杯までの数日、3人でポケモンバトルを繰り返した。それが大会で成果を挙げられる唯一の特訓方法だと結論に至った。試合数は100回を軽く超えていて、カイズも強さに自信を持つようになった頃、大会当日を迎えていた。

「やってきたぞ！ テンガン杯!!」

早朝にポケモンセンターを出た3人は、テンガン杯の会場となる場所にたどり着く。大きなドーナツ型の建物、その中心は広々していて、最大で4つの試合が同時に行われる。建物の外壁に貼りついたよ

うに、多くの屋台が隙間なく並んでいて、これからやってくる多くの人たちを、今か今かと待ち受けるようだ。

「先に中に入ってくれよ」

カイズは、クオンたちにそう言う。カイズは屋台を見回るようだった、まだ開会式まで1時間もありません、クオンも屋台に惹かれていた。

「俺も屋台を見回ろうと思う、トロナツはどうする？」

「僕はいいや、先の中で待ってるよ」

トロナツは、そのまま中へ入っていった。朝からずっと元気がないトロナツにクオンは少し気になっていた。

「クオン！ オクタン焼き食うか？」

カイズは3箱のオクタン焼きを手に持っていた。いつの間に来たきたんだと、カイズの行動力にクオンは少し呆れた。しかし、大会でもあり、お祭りでもあるんだと改めて実感する。

「——開会式までの気分転換と思えばいいか」

クオンは考えることをやめて、ずらりと建ち並ぶ屋台を見て回った。

生地の中に好みの材料を使用し鉄板で焼き上げ、調味料で味付けされた『ゴンベの満腹焼き』や、専用の機械から糸状に出てくるものを1本の棒で絡めとり、大きな綿になるまで集めた『ペロツパフの綿菓子』に、テッポウオを模した玩具の銃で、向こうにある景品に当てて落とせば、その景品を取ることが出来る『テッポウオの射的ゲーム』など、ありとあらゆる屋台が並んでいた。

大体、半半周したくらいに、クオンと共に屋台を見ていたカイズが急に足を止める。

「——セトントー！」

青無地の帽子を被り、黄色のスカジャンを着た小柄な少年がカイズの目の前に立つ。

「まさか、お前も参加しているとは思わなかったよ」

セトントは、少し嫌悪感を示しているようだった。本当にライバル同士なのかとクオンは思う。

「君は僕に勝ちたいみたいだけど、僕も勝ちたい相手がいるんだ、いい

加減鬱陶しいから追いかけてこないでくれ」

彼は前回のテンガン杯に参加していた。結果は準決勝敗退、負けた相手はコノミ、つまり彼は、今大会でコノミにリベンジを果たすために参加している。カイズの相手などしている余裕はなかった。

「そうだ、オクタン焼き一箱いるか？ 買い過ぎて困っていたんだ」「いらないよー！」

強い口調でそう言葉を返し、セトントは会場の中へと入っていった。

——開会式まで残り30分を切っていて、人の数が多くなり、外からは賑わう声が聞こえる。クオンとカイズは会場の中に入っていた。トロナツと合流する。

少し遠くの窓際の大きなソファアールにコノミが座り、うつろな表情で窓の外にある屋台を眺めていた。反対側の窓際から少し離れたテーブルにフウトが、天井から吊り下がっている大きな電光掲示板を見ている。入り口近くのカウンター席には、セトントがいた。

「クオン、あのポケモンって」

クオンはトロナツが指さした方向を見ると、受付近くに金髪の少女と、黒い角の先端部分だけが赤色のアブソルがいた。彼女がコノミが話していた少女なのか、名前を聞こうとクオンは席を立つと、場内にアナウンスが流れた。

『テンガン杯に参加する選手の皆様、中央の試合場までお越しください』

クオンとトロナツを含めた大会に参加するトレーナーたちは、試合場へ案内される。そこは大きく見えるバトルフィールドが4つ、向こうに小さく見える観客席があり、人で溢れかえっているように見えていた。

『総勢128人の勇氣あるトレーナーたち！』

4つのバトルフィールドの中心辺りに、長く真っ黒なスカーフを入り乱れたように全体に巻いて、灰色で地味な服装を目立たせないようにし、無精ひげを生やした男がマイクを持って立つ。彼の名前は、ユウバ。アンチ・プロタゴニストのユウバと聞けば、知らぬ者はいない。

プロタゴニストの意味は主人公、アンチとは嫌う者。彼はヨスガシ
テイのジムリーダーであり、最も多くの挑戦者を敗北へ誘った偉業を
持っているジムリーダーという噂があった。

『いいか、お前たちは、ここで互いに戦い合い、勝ち残った奴一人が優
勝だ』

ユウバは、衆目に晒させる中でも、あつけらかなとした表情をしな
がら、雑な口調でだらだら話していた。

第9話 下剋上

開会式が終わり、本選出場をかけた予選が始まった。カイズを含め3人に緊張はなかった。何事もなく予選を勝ち進み3人は本選へ切符を手にしていった。

「楽勝だったな！」

「これも特訓したおかげだな」

クオンはそう返す。

これなら余程のことがない限り、本選でも負けないだろう。そろそろ電光掲示板にトーナメント表が表示されるはずだ。セトントに、あの2人やアブソルを連れた少女が勝ち進んでいるはずだ。

クオンの予測は当たり、電光掲示板にトーナメント表が映し出された。準決勝から下の方をAブロック、Bブロック、Cブロック、Dブロックで分けてみよう。Aブロックには、コノミ、Bブロックには、カイズ、トロナツ、セトント、Cブロックには、クオン、Dブロックには、フウトがいた。

「セトントさんと2回戦で当たる」

トロナツは呟く。

もし、トロナツが負ければ、3回戦で2人がぶつかり合う。

「勝てよ、トロナツ！ アイツに負けんなよ」

そうカイズが言っていた。

◆ ◆ ◆

「コノミさん、ココアさん、こちらへ来てください」

ようやくかとコノミは、立ち上がり戦う相手を見て少し驚く。相手のトレーナーは、アブソルを連れていた例の少女だ。2人はバトルフィールドにやってきて、コノミはラグラージを、ココアはアブソルを繰り出す。コノミは、アブソルの赤く垂れている角を見た。

「どうしてアブソルの角はそんな色なの？」

挑発とも見て取れるコノミの発言に、ココアはこう言葉を返していた。

「実はこのアブソルは、色違いになれなかった特殊個体みたいなもの」

この試合の後に分かることだが、色違いのアブソルは通常、黒い部分
が赤色になる、何らかの理由でこのアブソルは、角の先端だけが色
違いになっていたらしい。

「この大会で注目されそうなアブソルだったけど、残念ながら相手が
悪かったね！」

いくら、珍しい姿をしていても、実力がなければ勝ち上がることが
出来ない。——強さが勝敗を左右する。2人は試合場にやってきて、
ポケモンを繰り出した。

『——試合開始!!』

開始早々、お互いのポケモンはトレーナーの指示を待つようにして
いて、動こうとしない。アブソルはラグラージをじっと見つめ、ピク
リとも動くことがない。コノミは顔を曇らせる、何が狙いなのかと。
——痺れを切らしたのか、ラグラージが、のそのそとアブソルに距離
を詰める。コノミは”アームハンマー”を繰り出すように指示。微
動だにしないアブソルにラグラージは、大きく右腕を振り上げた。

——越えられない壁と出会う時。その瞬間はいつも突然やって
くる。あまりに理不尽で屈辱な出会い、その時は思ってしまう。

「——アブソル、”つじぎり”」

アブソルは頭の角を光らせて、構えた。ラグラージが間合いに入っ
てきて、”アームハンマー”を振り下ろしていた。その攻撃をアブソ
ルは至近距離で避け、一瞬でラグラージの真横に入り、”つじぎり”
をぶつける。そのままラグラージは倒れこんだ。

審判員が2匹のもとへ近づいた。

『ラグラージ、戦闘不能!』

頭の光っていた角は、血のような赤色と黒色に戻っていた。会場は
静まり返る。ココアは、アブソルをボールへ戻し、スタスタとバトル
フィールドを去っていった。

◆ ◆ ◆

1回戦の試合が全て終わり、歓喜を上げるトレーナー、静かに会場
を後にするトレーナーが半々いた。恐らく、この会場内にいる闘志を
燃やしたトレーナーの数は、たった16人。

「クオンもトロナツも勝ったよな！」

カイズは無事に勝ち上がり、トロナツやクオンも楽々勝利を手にしていた。クオンたちは、電光掲示板を確認した。他のライバルたちも順調に勝ち上がっていたが、コノミが負けている事に、ここで初めて気付く。コノミを負かした相手の名前はココア。

「コノミ！ 負けたのか!?!」

フウトの声が聞こえて、クオンたちは声がした方へ人波をかき分けて進んでいく。コノミとフウトが、通路の壁際で話し合っていた。

「負けたちゃったよ」

悔しいとはまた違う、苦い表情でコノミは話す。コノミは、アブソル使用のトレーナーに完敗したと打ち明けた。その途端、納得がないような顔でフウトは叫んだ。

「負けたのは偶然だよ！」

しかし、コノミは何も言葉を返さない。何か確信しているようで、コノミの勘の鋭さを知るフウトも、それ以上言わなかった。

——トレーナーたちの歓喜悲哀をかき消すように2回戦が始まろうとしていた。クオンたち3人は、元の場所に戻ってくる。

クオンは、電光掲示板を見つめた。

ギリギリ勝ち抜いてきているカイズが戦う相手はそこまで強くない、カイズも勝利の雄たけびを早くもしている。問題はトロナツとセトントの試合だ。セトントが勝てば、翌日に行われる3回戦で念願だったカイズ、セトントの試合が実現する。トロナツが勝てば、試合は実現されなくなる。

——俺だったら、そんなことは考えない。只々、バトルに集中するだろう。

「トロナツ、クオン、”チョコナナ” 食べないか？」

どこかに行っていたカイズが2本の”チョコナナ”を持っていた。1つの”ナナのみ”を4つに分け、その1つを串で止めて、チョコを垂らした屋台で見かける食べ物だ。

「頂くよ、ありがとう」

クオンとトロナツは、”チョコナナ”を受け取り、口に入れた。”

「ナナのみ」が持つ甘味、苦味がチョコの味を際立たせ、風味良く高級感がある味わいだ。

「美味しかったよー!」

トロナツがそう言い、カイズがそうだろうと同調していた。いくら勝てそうな相手だからって、屋台を見て回るほどの緊張感のなさは、カイズにしか出来ないな。

クオンが辺りを見渡していると、勝ち残っているトレーナーの2人が試合場へ向かう様子が見えた。2回戦が始まるようだ。少し経ちカイズが呼ばれ、次はトロナツとセトントが呼ばれるはずだ。トロナツの両手は固く閉ざっていて、どういった気持ちだったのか、クオンには、分からなかった。

「トロナツさん、セトントさん、こちらへ来てください!」

2人が試合場へと向かう時、クオンは観客席へ急ぎ足で向かう。

◆ ◆ ◆

トロナツはブイゼルを、セトントはワカシヤモを繰り出した。

タイプ相性ではブイゼルが有利で、総合的な強さではワカシヤモの方が上だ。しかし、素早さではワカシヤモの方が劣っていて、ブイゼルがやや優勢といったところだろうか。

「ワカシヤモ、”ほのおのパンチ”」

試合開始と同時にセトントが指示を出す。出された技は、ブイゼルには”こうかはいまひとつ”の技であった。トロナツは警戒しながらワカシヤモの様子を伺う。一直線に攻めてくるワカシヤモを見て、トロナツがブイゼルに”みずでっぼう”を指示。

「ワカシヤモ、まもる」

ワカシヤモは、燃えていた片方の拳を消して両手を前に出す。ワカシヤモを囲うように球体型の透明な壁が現れた。瞬時に技を切り替える速度は、”みずでっぼう”を遥かに超えていた。

「——速い」

観客席で試合を眺めていたクオンは、思わず言葉を漏らす。

技を出す速さというのは、ポケモンの種族や強さなどに関係しない。単純にその技を使い慣れてるか、どうかで決まる。簡潔に言うところ

ワカシヤモは、”まもる”という技をよく使っているというだ。

「ワカシヤモ、ほのおのパンチ」

片方の拳を燃やし、同じようにワカシヤモが一直線に攻めていて、トロナツの表情が曇る、また同じ行動なのかと。トロナツがブイゼルに指示を出そうとした瞬間、トロナツが、あることに気付いた。

——ブイゼルの目の前には、既にワカシヤモがいた。

第10話 それぞれの意思

ブイゼルの目の前に、ワカシャモが現れていた。避ける暇もなくブイゼルは、真正面から攻撃を受けてしまう。ワカシャモの異常な素早さの変動にトロナツは、あることを疑った。

「――隠れ特性か」

セトントのワカシャモの特性は『かそく』で、時間が進むほど自身の素早さが上がっていく。急にブイゼルの目の前に現れたのは、単に素早さが上がっていたからだ。

「もう素早さ勝負では勝ち目はないよー！」

自信満々でセトントは、トロナツに言葉をぶつける。やってみなくては分からない。心の中でトロナツは思った。

ブイゼルは辛うじて体勢を立て直していて、トロナツは”でんこうせっか”を指示。それを見ていたセトントがワカシャモに”カウンター”を指示。それにブイゼルは気付き、咄嗟にワカシャモの間合いから遠ざかる。

『カウンター』という技は、相手の物理技を受け、受けたダメージを2倍にして反撃する技。もしブイゼルが攻撃を受けていたら、決着がついていたかもしれない。トロナツは冷や汗をかく。

* * *

これではつきりしたことがある。ワカシャモが単調な攻め方だったのは、持久戦の構えだからか、分が悪いかな。

「ブイゼル、どうする？」

一呼吸置き、トロナツはブイゼルに問いかける。ブイゼルはその場で足ふみをしていた。分かった、というような顔でトロナツは前を向いた。

「ブイゼル、”あまごい”」

ブイゼルが両手を空へ挙げた。すると会場の空には、黒い雲が広がる。

『あまごい』という技は、戦う場の天候を雨にする技であり、”みずたイプ”の技の威力が上がって、”ほのおタイプ”の技の威力が下がる。

る。そして、この天候により特定のポケモンが強くなれる。

セトントが空を見上げていると、何か光った多くのものが地面へと向かっていった。会場は土砂降りになり、足元の地面は既に、少し柔らかい。

——セトントは気付く、ブイゼルの姿がない。

”すいすい”かー!

ブイゼルの特性、『すいすい』は、天候が雨の時に素早さが倍になる。『かそく』で素早くなっていたワカシヤモと、”あまごい”の影響で素早さが増したブイゼル、視界が悪い雨の中で、バトルは短期決戦に導かれるだろう。

セトントがブイゼルを探していると、足元に何かの違和感を感じる。そこにはブイゼルがちよこんと立っていた。

「ワカシヤモ！ 後ろだ！」

セトントは、ワカシヤモにブイゼルが後ろにいると伝えた。その瞬間、ブイゼルは何を思ったのか、ワカシヤモの背後にさっと回ると、悪戯をするように、振り返るワカシヤモの顔に”みずでつぼう”を浴びせる。

——2匹は同時に間合いを取り、必死に息を整えようとしている。次の一手が勝負所、トロナツは、そう見極める。

「ワカシヤモ、”きあいだま”！」

両腕を広く構え、その間からは、自身の体と同じくらいの大きさの”きあいだま”を見せる。まるで太陽のように、この雨天を消し去るようにと。

それをワカシヤモは、ブイゼルへ放り投げる。迫りくる”きあいだま”をブイゼルが、しばし見つめる。何を思ったのか、ブイゼルは横方向に走りだそうとしたが、足の力が抜けて、その場に倒れてしまった。

『ブイゼル、戦闘不能!』



トロナツが負けて、セトントが勝ち、3回戦進出が決定した。カイズ、クオンは無事に勝ち上がり、負けて落ち込んでいるトロナツを見て、この時2人は、励ますことが出来なかった。

明日、カイズはセトントと戦うことになる。明日、この大会の優勝者が決まってしまう。しみりとした空気の中、3人はポケモンセンターに向かうため、夜道を歩く。

「——遅いぞ、どこ歩き回っていたんだよ！」

ポケモンセンターの入口には、コノミとフウトが3人を待っていたようだった。

「良ければ、一緒に反省会しない？」

断る理由もなくクオンたちは頷く、中に入り5人は1つのテーブルに囲んで座る。まず最初に、勝っていたカイズがあれこれとダメ出しをされていた。

「そういうえば、気になることがあるんだけど、トロナツの試合、話していいか？」

間を置いてフウトが話し出す。内容は試合最後の一手、何故トロナツがワカシヤモの”きあいだま”を”さきどり”しなかったかだ。

「俺だったら、”さきどり”一択だけどな」

フウトは頭を傾げて話す。他3人も否定はしなかった。

「——あまりバトルとか慣れてなくて指示が遅れてしまったんだ」

現時点で言うならば、その試合が今大会中で最もハイレベルな試合だ。トロナツが状況に追いつけなくなり、指示が遅れるのも無理もない事だった。

「——まあ、いいけどさ、それより一番言いたかったのはコノミ！」

「だから、反省する箇所なんてないよ！ 完全に格上だったから」

前回優勝者を下し、次の試合も快勝し、3回戦に進出した『ココア』のトレーナーの話になる。

「フウトも優勝は諦めなって、私だってあのトレーナーに勝ちたいけど、もう一度戦っても勝てる気がしないんだからさ」

「単純に力が強いんだったら、テクニクだよテクニク！」

「それでも勝てる気がしないんだって」

「なら、皆でそのトレーナーの試合を見てみようぜ」

ポケモンセンターには複数のパソコンが置かれている。主にポケモンを預けたり引き取ったり、己や相手のトレーナーの実績を調べたりすることが出来る。そして、テンガン杯が開催されている期間中だけだが、大会全ての試合の映像を見ることが出来るのだ。5人は早速、彼女の試合を探す。コノミとココアの試合を見つけた。

「——派手にやられてんな」

フウトが苦言する。

2回戦の試合も同じようなものだ。相手トレーナーのピジヨットが“ブレイブバード”でアブソルに接近し、それを避けたアブソルが横から反撃。

「——これって、狙ってやってるんじゃないかな？」

映像を見ていたトロナツが密かに声を上げていた。

「どういうこと?」

コノミがそう話す。

「ラグラージやピジヨットも技を出し終えて、”最も力が入っていない瞬間”を狙らわれていて、もしかしたらアブソルは無駄のない動きで相手の虚を突く攻撃を行っているだけじゃないかな？」

トロナツの話を聞いて、クオンは少し考える。——もしそれが本当だったら、虚を突いた攻撃以外はどうするのか、クオンも然り全員が考え始めていた。

「その通りだよ」

少し離れたところから声がしていた。声がした方向には、ココアがいた。

「このアブソルは大人しい性格で持久戦が苦手だけど、相手の動きを読むことは、とても優れているから、そういった戦い方になっている」
言い終わるとココアは、テーブルの上に置かれたコーヒーマグであろうものを口にしていた。

「どうして、そんな面倒な戦い方にするんだ？」

——誰しもが口を閉ざす中でカイズが声を上げた。

「トレーナーが考える理想の勝ち方より、ポケモンが考える理想の勝

ち方を描くことが、ポケモンを最大限に活かす方法だと、私は思っているから」

ココアはそう言うと、席を立ちどこかへ去っていった。

第11話 先へと進む決意

旅するトレーナーには欠かせないポケモンセンター、手持ちのポケモンを回復できる他に、トレーナーが寝泊まりできる施設でもある。その部屋数は——言わないでおこう。

明日に備えてクオンたち5人は、ポケモンセンターに宿泊していた。偶然にもクオンとトロナツは同じ部屋になる。部屋の中は、左右には2段ベッド、向かい側は大きな窓と、こじんまりとした部屋であったが、一度に多くのトレーナーが泊まることを踏まえると十分な大きさだ。本来4人であろう部屋を2人で使うのだから、少しだけ広く感じる。

「今日は疲れたし、早めに寝るよ、おやすみ」

荷物を2段ベッドの下へ置き、トロナツは下段のベッドに入る。クオンも電気を消し、床に入った。

『ラグラージやピジョットも技を出し終えて、”最も力が入っていない瞬間”——』

——あの言葉、どうしても引つかかる。トロナツは、確信していて言ったのだろうか。もしそうなら、本人に確かめてみるか。

「——トロナツ、あの試合わざと負けたのか？」

クオンは、気になっていたことをぶつけていた。

「わざと負けたんじゃないよ、本当に勝てなかったんだ」

「嘘はつかないでくれ、お前ならあの状況で”さきどり”くらい指示できるだろ」

そんなクオンの一言に、トロナツはしばらく黙り込んだ。

「——あの時、余計なことを考えていたんだ、嘘はついていないよ」

実はトロナツは、優勝に執着していなかった。必死に勝とうとするトレーナーをあざ笑うかのように勝ち進む、そんな自分が嫌になりながら、予選を突破してしまい深く悩んでいたとクオンに打ち明ける。

「——今でも、思うよ、もっと早く負けていたらなって」

「実力があるんだから、勝っていいだろ」

「僕の話は、気にしなくていいよ、負けたんだからね。大人しく観客

席で試合を眺めているよ」

トロナツは、それ以降のクオンの問いに答えることがなかった。クオンは少し苛立ちながら、別のことを考えることにしていた。

* * *

ココア、迫がある言葉は、ロウに似ている。旅をしている以上、いつかどこかで出会うだろう。そして俺はロウに勝ちたい、ここで躓いてるようでは、一生勝てないな。

——勝とう、優勝しようこの大会で。

クオンから決意の言葉が零れた。

◆ ◆ ◆

——鳥ポケモンだろうか、羽ばたく音が部屋に聞こえてきていた。クオンは、目を覚まし、カーテンを開けると、心地の良い日差しが肌に刺さった。

太陽のように自分の沈んでいた気持ちを浮き上がらせてくれる、元気が湧いてくる。

まぶしい朝日に照らされて、目を覚ましたのか、クオンの後ろからガバイトがよろよろと歩いてきた。

「おはよう、ガバイト」

——支度を整えてクオンは、ふと窓からぼんやりと映った会場を見ていた。今日で優勝者が決まってしまうのかと考えて、隣にいるガバイトを見ると、目が合う。

「絶対に優勝しよう」

クオンは、そう言いたくなった。

「おはよう！ クオン」

ポケモンセンターの入口でトロナツとカイズが待っていた。

「俺、優勝目指そうかな」

会場に向かっていている途中、クオンが呟く。

「俺は優勝しか、眼中になかったから、ライバルだな」

その呟きを聞いて直ぐにカイズが突つかかっていた。

「そうだな！」

「そういえば、昨日買い過ぎて”ゴンベの満腹焼き”が2箱開けてないんだけど、良ければ2人食うか？」

「——買い過ぎだよ」

そんなツツコミを入れつつ賑やかな会話をして3人は会場へと向かっていた。

『——いよいよ3回戦が始まるぞ、この日まで勝ち残った8人は持てる力を発揮してくれよ！』

この日もジムリーダーのユウバは、観客席から冷ややかな視線を向けられながら、堂々とマイクに向かって声を出す。

「じゃあ、言ってくるよ」

クオンが試合場へ向かっていた。それを見送ったカイズが”チョココナナ”を食べながらセトントを睨む。セトントはというと、準決勝の相手になると思われるココアを見ていて、カイズを見ようとしていない。

「このやろう」

カイズの口から火の粉が飛ぶ。

「セトントさん、カイズさん、こちらに来てください」

カイズは手に持っていた数本の”チョココナナ”を一気に平らげ、絶対に勝つと心に誓い、試合場へと向かう。セトントはワカシヤモを、カイズはレアコイルをボールから出した。

『——試合開始!!』

「レアコイル！」エレキフィールド”だ!!」

レアコイルがいる地面から微量の電流がフィールドを駆け巡っていた。エレキフィールドとは『でんきタイプ』の技の威力を上げる効果を持つ。カイズは火力戦を狙っているのかと、セトントは警戒する。

「ワカシヤモ、”きあいだま”！」

「レアコイル、”でんじほう”!!」

互いに巨大な塊を目の前に出し、それを放つ。大きさは互角であったが、『でんきタイプ』であったレアコイルの”でんじほう”はワカ

「シャモの”きあいだま”を容易く消し去る。

「ワカシャモ、”まもる”」

攻撃を防ぎ、ワカシャモは攻め立てる。

「レアコイル、”ほうでん!”」

レアコイルの周りに電流が走り、ワカシャモは少し掠った。明らかにカイズは持久戦を狙っていた。この試合、快勝することしか考えていなかったセトントは、予期しない苦戦を強いられて、少し腹を立てていた。

「ワカシャモ! 再び攻め込め」

ワカシャモの特性、『かそく』の素早さを踏まえて、セトントは速めに指示を放つ。

「レアコイル、”ほうでん!”」

しかし、ワカシャモは高く飛び上がる。”ほうでん”の範囲から外れていて、セトントが”ほのおのパンチ”を指示する。

「レアコイル、”でんじほう!”」

空中で身動きの取れないワカシャモに”でんじほう”を放つが、ワカシャモの少し隣を通り過ぎる。地面へ足をつけると同時にワカシャモは、レアコイルに燃える拳を振り下ろした。

「手間を取らせやがって!」

セトントは、倒れこんだレアコイルを見て勝利を確信する。気を落ち着かせるために目を閉じ、深呼吸をした。セトントが目を開けると、ワカシャモが倒れている。

『ワカシャモ、戦闘不能!』

彼には何が起きたのか分からなかったが、冷静に物事を整理し、1つの可能性が浮かび上がる。

「——”でんじほう”」

そう、ワカシャモを通り越して、上空へ飛んで行った”でんじほう”の勢いが弱まり、落下してきた位置が偶然にもワカシャモの頭上だったのだ。

——試合が終わって、2人が会場内に戻った。

「——今回は、引き分けにしよう!」”でんじほう”がたまたま当

たつて勝つただけだし」

落ち込むセトントに、戸惑う様子を見せながらカイズが声をかけた。

「何が引き分けだ！ あの時に攻撃していれば僕の勝ち、負けは負けだ！」

セトントは、そんな言葉を言い残し、会場の外へ走り去っていった。

第12話 決勝進出者

3回戦が終わって会場内に、安堵した様子のカイズ。クオンは、電光掲示板で勝ち上がったトレーナーの名前を確認した。

「ココア、カイズ、フウト、こうなるか」

続くは準決勝戦、クオンの相手は前回準優勝者の『グレイシア』使いのフウト。

グレイシアはイーブイの進化系であり、ガバイトとは相性が悪い『こおりタイプ』を持つポケモン。おまけに防御力、攻撃力もあり、常識的に考えるとガバイトに勝ち目はない。

だからと言って、負けてやるつもりはない。

クオンは、勝利への道しるべを、今尚探していた。

「——ココアさん、カイズさん、こちらへ来てください」

2人が試合場へと向かっていった。そこから広がっている観客席には、いつもより人が溢れかえっていることが分かった。激しい高揚感と重圧に吞まれそうになりつつも、誰もいない4つのバトルフィールドの中の1つで向かい合う。

『——試合開始!!』

試合が始まると、両者のポケモンは全く動こうとはしない。カイズは、アブソルに攻撃を振らせて、出来るだけ自分から攻めないつもりだった。そうでもしないと勝つことが出来ないと考えたのだろう。

「アブソル、”つるぎのまい”」

アブソルの周辺にいくつもの光る剣が現れて、剣と剣がぶつかり合う。この技は自身の攻撃力を上げる技。一筋の汗を垂らしながら、それでもカイズは指示を出さなかった。

——するとアブソルは、ゆっくりとレアコイルに歩み寄っている。警戒し怯えている野生のポケモンに優しい表情で近づく、それと似たように。気付けば、アブソルはレアコイルの間合いに入っている。

「レアコイル! ”ほうでん!”」

この時、アブソルは下がらなかつた。どんなに素早く反応していた

としても攻撃は受けると判断したのか、見ていたココアは、アブソルに“つじぎり”を指示する。眩い電撃を受けながら、アブソルはその角で鈍い音を鳴り響かせた。

『——レアコイル、戦闘不能！』

微かに残る微量な電気を体に纏わせながら、アブソルは凜とした姿勢を崩さない。カイズは絶句するしかなかった。

◆ ◆ ◆

「飲み物を持ってきた！」

観客席には、コノミとトロナツ、そこにカイズが飲み物を持ってやってきていた。——間もなく、フウトとクオンの試合が始まる。

「クオンとフウトさん、どっちが勝つだろう」

「正直に言っちゃうと、フウト一択かな」

「やってみないと分からないだろう」

「——いくらクオンが、グレイシアの対策をしていたとしても、フウトのグレイシアとは、分が悪過ぎる」

どちらが勝っても、問題ないはずだったのだが、3人は重苦しい空気に包まれていた。

「——俺はクオン一択だな！」

どこからか聞き覚えがある男性の声が3人には聞こえていた。

「あれ、ジュースあったのかよ、買わなければよかったな」

3人の直ぐ近くの席で座っていた男性こそ、ジムリーダーのユウバだった。唐突な出来事に3人は言葉を飲み込む。

「大会、盛り上げてくれてお疲れ、暇してた所に見たことあるトレーナーだったから、声をかけたただだよ」

「じゃあ、なんで飲み物を3つ持ってたんだよ！」

カイズがユウバに食ってかかっていた。

「急に声を掛けたら、変に思われるだろう。お近づきの印みたいなものだよ、嫌だったら俺は別のところへ行くよ」

——めんどくさい奴だ、そう考えて3人は、ユウバを無視して試合を眺めることを選んでいった。バトルフィールドに、ガバイトとグレイシアが繰り出された。

『——試合開始!!』

開始早々、ガバイトがグレイシアに攻め立てていた。

「グレイシア、”バリアー!”」

グレイシアの目の前に、分厚く透明な壁が現れると、少しずつ消えていく。クオンはガバイトに”ドラゴンクロ”を指示、グレイシアの間合いに入って、右手を大きく振るった。

『カンッ!』

そんな音が響く、ガバイトの”ドラゴンクロ”は、”バリアー”の効果で防御力が上がっていたグレイシアの体を弾いていた。

「グレイシア、”ふぶき!”」

——グレイシアは涼しい顔をして、ガバイトへ夥しい数の雪粒を向かわせる。クオンがガバイトに”あなをほる”の指示し、間一髪ガバイトは攻撃をかわす。

「——その一手は読んでる」

ガバイトは、そのまま地中からグレイシアに近づく、だがグレイシアも、先を読んでいた。残っていた雪粒を再度操り、自身周辺の地面を固く凍らせた。——ガバイトは、グレイシアから離れた地面から顔を出す。

早くもクオンは、窮地に追い込まれていた。

打つ手がない、勝てる気がしない、”バリアー”は自身の防御力を高める技だと知っていたけど、あそこまでダメージを軽減できるのか。”りゅうせいぐん”という有効打は残っているけど、連発すれば威力が下がり、持久戦になれば負けだ。

しかし、”りゅうせいぐん”に縋るしかない。

「ガバイト、”りゅうせいぐん!”」

「グレイシア、”ミラーコート!”」

——降りてきた1つの隕石をグレイシアは受けた。

『ミラーコート』という技は、相手の特殊技を受け、受けたダメージを2倍にして反撃する技。1つの隕石を受けきったダメージ量は2倍になって、グレイシアから放たれる。回避不能の攻撃がガバイトに襲い掛かった。

——”ミラーコート”を耐えるが、ガバイトは足をふらつかせる、あと一回大技を受けてしまったら倒されてしまうだろう。クオンは、グレイシアを見る。

「グレイシア、”みずのはどう!”」

——あらゆる葛藤からか、クオンは、自分の思考回路が鮮明に見えたような気がしていた。

* * *

グレイシアの技は、”ふぶき”、”ミラーコート”、”みずのはどう”、”バリアー”。ガバイトの技は、”きりさく”、”ドラゴンクロー”、”りゅうせいぐん”、”あなをほる”。互いにダメージを受けているが、ガバイトの方が多く、その他色々。

——クオンの頭の中で、勝ち筋が見えた。

「ガバイト、避ける！」

”みずのはどう”をガバイトは避ける。クオンは”あなをほる”を指示し、ガバイトは地中へ身を隠した。グレイシアは地中にいるガバイトには攻撃できない。

「ガバイト、グレイシア目掛けて、”りゅうせいぐん!”」

穴の奥へと届かせたクオンの指示は、グレイシアは動いていないことが、ガバイトに伝わる。勿論その間、グレイシアが動くことはない。ガバイトは、いつもと違う”りゅうせいぐん”を放つ。

「——そこから打てるのか」

空から、無数の隕石が降りてくる。先ほどの”りゅうせいぐん”とは違って、全ての隕石が規則正しい動きをしている。まさかとフウトは思った。

「全て同じ位置へ落ちてくるのか?」

グレイシアは、落ちてきた隕石を避けるも、全ては避けきれない。何とか持ち堪えたグレイシアに周囲を囲むように”ふぶき”を指示する。フウトは、ガバイトの追撃を警戒する。

「ガバイト、あの”ふぶき”の中心付近を狙って、”りゅうせいぐん”!」

——声を聞き、フウトは悟った。クオンの目の前にガバイトがいた

のだから。

「グレイシア、避ける！」

しかし、フウトの声は“ふぶき”を放っていたグレイシアには届かなかった。グレイシアは目の前に集中していて、空の様子を知ることには出来ない。“りゅうせいぐん”は、グレイシア目掛けて勢いを増して落ちてきていた。

この勝負、フウトの負けである。

『グレイシア、戦闘不能！』

テンガン杯の準決勝が終わり、勝ち上がるトレーナーの名前は、コア、クオンだ。

第13話 アブソル

——テンガン杯決勝戦、勝ち上がった2人のトレーナーが優勝という栄誉を巡って争い、最後の勝ち負けを決める。外の屋台には人の気配はなく、闘気を高めさせるような夕日が差し込む会場内には、たった2人だけがその時を待つ。——脇役は観客席に集まった。

「——聞きたいことがあるんだけど、そのアブソル、なんというか、得体の知れないオーラを感じるんだ。何なのか知らないか？」

この静けさ、2人だけの空間となり、改めて感じるアブソルの不気味さ、迫力。クオンは、どうしても確かめたかった。

「私は、カンナギタウン出身なんだけど、このアブソルは有名だったの」

「有名？」

「——死ぬ瞬間が分かるって言ったら、貴方は信じる？」

「——！」

その言葉にクオンは凍り付く、これ以上聞かない方がいいと肌で感じていた。

「ココアさん、クオンさん、こちらへ来てください」

——いよいよよだ、この試合、絶対に勝ってみせる。

◆ ◆ ◆

——決勝戦、あと1回勝てば優勝だ、なんて思っているトレーナーは、たどり着けない。例えるならそこは、神聖な領域。あと1勝ではなく、絶対に勝つ。負けという言葉が存在しない空間。結局は、どちらかが負けるのではあるが。

そんな空間の外側は、例えるなら準決勝とか、それ以下の空間だろう。

——2人、2匹からは、”音が聞こえない空間”、それだけ集中してるとは、また違う。この試合場に、この決勝戦にすることを忘れているのかもしれない。そう、いつものバトルをするように。——そんな中、1つの音が響く。

『——試合開始!!』

——ガバイトが攻めかかる。クオンは”きりさく”を指示し、ガバイトの両方の爪は、白く光る。それに対してアブソルは待つ、暗黒なオーラを放って。

* * *

負ける。その言葉を言ったら、本当にそうなるような気がする。ガバイトを、アブソルを、秒速の思考は、絶やささない。

——ガバイトがアブソルの間合いに入る。ここが最初の分かれ道。その攻撃は、アブソルの顔面を掠れる。

「アブソル、”つじぎり”」

ガバイトは反応する、片方の爪にアブソルの角が当たる。しかし、ガバイトはそのまま吹き飛ばされた。空中で体の向きを変え、受け身を取る。

アブソルは、その場を全く動いていない。その行動にクオンの顔が強張る。追撃をあえてしないのかと。

「アブソル、”つるぎのまい”」

攻撃力が増し、アブソルは少しずつガバイトに近寄っている。攻めてくる相手に隙あれば反撃する動きだった。

「ガバイト、”りゅうせいぐん”」

「アブソル、”ストーンエッジ”」

アブソルは足を止め、空を見て構えた。——自身へ向かってくる隕石が当たる、その一歩手前でアブソルは技を出す。地中から刃のように尖った多くの岩が現れて、無数の隕石を容易く砕く。

「アブソル、”サイコカッター！”」

アブソルは、目の前に白紫の刃のようなものを出し、放つ。尖った岩を貫通させ、ガバイトへ向かわせた。辛うじてガバイトは避ける。まともに受けていければ、大きなダメージでは済まされまいだろう。

——クオンは、アブソルを見つめた。

本当に攻めてこないのが唯一の救いだ、技の威力と気迫は、今までバトルした相手の中でも、群を抜いて強い。俺はこの怪物に勝てるのか。

「——いや、俺じゃないな、”俺たち”か」

クオンは、ガバイトに”ドラゴンクロー”を指示する。臆することなくガバイトは、一気にアブソルへと近づき、渾身の力で両腕を振り下ろす。——ガバイトの攻撃は、地面へと刺さる。ここが狩り時、そう言わんばかりにアブソルが、”つじぎり”を構えていた。

「まだ負けていない！」

ガバイトは、爪が地面へ刺さっていながらも、両腕の勢いは止めていなかった。

爪が地面から抜け、ガバイトは空中で宙返りをしていて、アブソルの角は空を切る。ガバイトの視点では、地面が上にあり、アブソルの背中が目の前に見えていた。ガバイトは、”ドラゴンクロー”をアブソルに食らわせた。

——今大会、初めてアブソルが倒れた。この時、本当に試合場は静かになる。アブソルが攻撃を受けることは、誰も予想していなかったのだろう。

急いでアブソルから距離を取っていたガバイトは、様子を伺う。

——試合場が静かになっていたのは、もう1つ理由があった。

そこまで大きなダメージではないはずなのに、アブソルは状態異常になったかのように、酷くふらついていて、肩で息をしていた。

「アブソル、とりあえず目を瞑って！」 ”つじぎり”を構えていて！」

焦った様子でココアは指示を出す。バトルはまだ続いている。

「ガバイト、攻め立てろ！」

”きりさく”を構え、アブソルへ近づく。間合いに入りガバイトは、光る爪で攻撃する。クオンからは、ガバイトがアブソルに攻撃を当ててるように見えていた。

——攻撃を終えたガバイトは、アブソルから一気に距離を取る。ガバイトの表情は、どこか違っていて、あの攻撃が当たっていなかったのかとクオンは考えていた時。アブソルが角を大きく振りかぶって、低い衝撃音を会場に響かせていた。

「——技の威力、回避力が上がってるのか」

クオンは、一回見ただけで分かっていた。今まで力を抑えていたことに恐怖さえ感じた。しかし、それは勝敗には関係ない。

クオンは、ある言葉を思い出ししていた。

『このアブソルは大人しい性格で持久戦が苦手だけど、相手の動きを読むことは、とても優れているから——』

——この言葉が本当なら、勝機がある。

「攻め続ける！ ガバイト！」

クオンの声を聞き取り、ガバイトの動きは鋭くなる。逆にアブソルは、閉じていた目を開き、歯を食いしばりながら攻撃を受け流し始めていた。

「ガバイト、”ドラゴンクロー”!!」

ガバイト渾身の”ドラゴンクロー”は、アブソルの体を吹き飛ばした。

『——アブソル、戦闘不能!!』

優勝者が今、決まる。

「——勝ったのか？」

会場の空に、大きな花火が打ち上げられて、クオンは目を覚ます。花火の音と同じくらいに観客席からは、盛大な拍手喝采が聞こえていた。優勝したという実感が湧いてくる。この喜びを隠しきれない。クオンはしばらく、試合場で立ち尽くしていた。

「優勝、おめでとう」

ココアがそう告げた。

朝から分かった、感じていた、アブソルに勝てる気がしないと。

——それは嘘じゃないか。

面白くない夢を見ていたんだなど、クオンは思っていた。

第14話 次なる目的地へ

表彰式も終わり、長い戦いはようやく終わりを迎えていた。辺りは暗くなり、いつもの5人は、ポケモンセンターの中のテーブルを囲み座っていた。まず最初に、優勝おめでとうと、皆からクオンに声がかけられた。あれほど息が詰まる、ハイレベルな試合は他にはない。

「これから、皆はどこへ行くの？」

カイズがそんな質問を投げかける。まず最初にフウトが口を開く。「俺たちは、博士に頼まれていた調査のために、テンガン山へ向かうつもりだ」

——明日の朝、コノミとフウトは、テンガン山の奥深くへ入り、ポケモンの調査をするようだ。

「俺たち2人は、元々ハクタイシティへ向かっている途中なんだ」

クオンが言い、4人の行く先を知ったカイズは、しんみりとした表情になる。

「俺は、トバリシティにあって、ジム戦をするつもりだ」

4人とはまた違う方角だ。大会が終われば、個々の旅の為、離れ離れになることは全員分かっていたのだが、微妙な空気がしばらく続いていた。

「——おいおい、俺抜きでそんなに楽しむなよ」

テーブルの上に大皿がドンと置かれる。不敵な笑みを浮かべながらユウバが割り込んできていた。皿の上には「チョコナナ」が7つある。

「ユウバさん、俺たちを追いかけ回してるわけではないですよね！」

フウトが苛立って少し声を荒げて言う。ユウバは決勝戦でもトロナツたちと、凶々しく試合を観戦していて、何が理由で近づいてくるのか、全員は気になっていた。

「——悪い悪い、これは大会を盛り上げてくれたお礼のつもりだよ！」

「なんで、7つもあるだよ！」

カイズがユウバに食ってかかる。

「——俺の分と、残り1つはスペシャルゲスト用だ」

ユウバの後ろから、ココアが現れていた。

「楽しくいこうぜー」

弾んだ声で話すユウバを見て、全員は「チョコナナ」を手に取り始めていた。多分、嘘ではないなど、皆は思っている。

◆ ◆ ◆

「ええ！ ココア、バツジーも持っていないの!?!」

激情しながらコノミの声が裏返る。テーブルの上にアルコール類は置かれていない。それを見てトロナツとフウトはドン引きする。そういう性格だっけと。

「——でも、この大会でトレーナとしての実力も必要だって事が分かったから、これからジム巡りをするつもり」

ココアがコノミに言葉を返していた。一方でクオンとカイズは、別の会話をしていた。

「——ハクタイシティに行く前に、クロガネシティの化石博物館に行ってみろよ！」

ハクタイシティに向かうならとカイズが、クオンに話し始めた。

クロガネシティの大きな観光名所であり、世界中の化石マニアたちが集まっている場所。化石から分かった太古の歴史や、あらゆる時代の化石が展示されていて、その中でも最も珍しいと言われた化石『赤いひみつのコハク』が、そこにはある。

クオンたちは、ハクタイシティへ向かうために、一度クロガネシティのポケモンセンターに寄るつもりだった。少し化石博物館の中を見て回るのもいいなど、クオンは思っていた。

——賑やかな会話は、日付が変わって尚、続いた。

◆ ◆ ◆

——気が付くとクオンは、ベットから起きている。急いで窓を開け、遠くの会場を眺める。会場には、屋台がなかった。昨日のあれは夢じゃないなど。

「いつの間にか寝ていたのか」

そうクオンが呟く。

「——起きたの？ クオン」

ベッドの上で荷物を整えるトロナツの姿があった。

「他の4人はもうヨスガシティから出て行ったみたい、僕たちも行く」

少し状況についていけなくなるクオンであったが、直ぐに理解した。

「ああー！」

旅は、まだ始まったばかり。この旅の行き先には、どんなことがあるのか。2人はまだ知らない。



——シンオウ地方のどこか。薄暗い建物の中で、同じ灰色の服装をした多くの男女が、せかせかと歩き回る。その部屋の外側の通路で、とある男3人が何かを話している。

「——ずいぶんと、大胆な”依頼”ですね」

3人のうちの灰色の服装の小さな少年が話す。

「この依頼を俺とヒューマがか」

同じく灰色の服装の男性が話す。彼の名前は、クウノトリ。

「”赤いひみつのコハク”をここまで持つてくる、簡単な依頼のように見えるが」

他2人と同じ服装の青少年が話す。彼の名前は、ヒューマ。

「いやヒューマ、これは簡単じゃないな、24時間監視がされている博物館にまず侵入することさえ、難しい。おそらくこれは、見つかる前提で動かなくてはいけない」

クウノトリが言葉を返していた。

「僕も手伝った方がいいですか？」

「ワバ、君の力は確かに欲しいが、”俺たちが何もできなくなる”、この依頼は2人でやりたい」

クウノトリは言葉を返し、ワバがため息を吐いていた。

「正直羨ましいよ、それって、”クロ様”からの依頼なんですよ」
「まあな」

クウノトリが言葉を返した。

「それじゃあ、頑張つて」

ワバは、少し乾いた口調で言い、どこかへ去っていった。2人は作戦を決めるべく、1つの部屋に向かっていた。

——数十年前、シンオウ地方では有名だった研究施設があった。その施設の名前は『グレイ研究施設』、主にポケモンの道具の為の研究が日夜行われていたが、絶対に知られてはいけない、とある情報を外部に漏らしてしまい。今ではその全ての研究所は使われていないと言われている。

ちなみに外部に漏らした情報というのは、『グレイボール』という開発途中であった1つのボールである。

——このボールに捕獲されたポケモンは、トレーナーの指示を聞くようになる。悪く言うと、どんな指示にも逆らえない。そんなボールの存在が明るみとなり、国際社会から批判を浴び、”国際警察”をも動かす大事件となった。——もう一度言うが、今ではその全ての研究所は使われていないと言われている。

「——決行は深夜、だが現地に着いてから、しばらく様子を伺いたい。あと正面衝突を踏まえて”戦力”が欲しいから、アレを大量に持っていくつもりだ。そこらへんは頼めるか？ ヒューマ」

「野生のポケモンを大量に捕まえることか？ あと”いい人材”を見つけるつもりだが」

「——そこらへんは任せるよ」

2人は、クログネシテイへと向かっていた。

第3章 クロガネシテイ 化石博物館編

第15話 クロガネシテイの小説家

『クロガネシテイ』

ここは昔は緑が少なかったという。街中は白いコンクリートが貼られ、両脇には大きな木々が並ぶ。町の北東側には観光名所である化石博物館、その反対側は人々が安らげる人工芝の庭園がある。南側に、昔は栄えていた炭鉱の跡地が今もしっかりと残されている。

この町のポケモンセンターの中、休憩所にある1つのテーブルの上には、真っ白な原稿が置かれていた。その原稿を見つめるダブルと、ベレー帽をかぶり、茶色のポンチョを着ている少女が、鉛筆を咥え、頭を掻いていた。

「……ここから1文字も、書くことができないよー!」

少女は、シンオウ地方を渡り歩く小説家である。ポケモンの視点になって描かれる彼女の小説は、とても独創的であったが、その小説を手にとってくれる人は少なかった。それをいつしか怖いと感じるようになり、鉛筆を震えて持つようになる。字が汚い、次にそう感じる。彼女は小説を書けなくなっていった。

全く書けないわけではなく、ほぼ真っ白な原稿には、微かに文字があった。

『ある場所に、一つの卵があった。卵からひびが入って、ポケモンが生まれてきた。生まれたポケモンが目を開けると、いろんなポケモンがこちらを見ていた』

この物語は、とある太古の時代に生まれた1匹のポケモンの話。
「ようやく、ついたー!」

——ポケモンセンターの入口から2人の少年がやってくる。2人の名前は、クオンとトロナツ。この間に行われたヨスガシテイの大会、テンガン杯を終え、ハクタイシテイへ向かうべく、その途中にあるクロガネシテイにやってきていた。

「意外とあつという間だったな、軽く休んだら向かおうとしていたけ

ど、この町をしばらく観光するのもありかもな」

黒いリュックを背負った少年は、もう1人の白いニット帽を被る少年に、話しかけていた。

「それも、いいねー」

白いニット帽を被った少年の後ろから、よたよたとブイゼルがメモ帳と鉛筆をそれぞれ片方の手で持ち、何かを書いている。彼女はその光景に目を疑い、じっと見つめる。

ブイゼルは、2人にメモ帳を見せていた。

『おなかへた』

「お腹下手？ これってどう意味だ、トロナツ」

「——多分、おなかが減ったってことかな」

そのまま2人は、休憩所のテーブルで食事を取っていた。

彼女は、ふと口に啜えていた鉛筆を手に取ると、怖くなかった。――

あのブイゼルを見ると、不思議と小説が書けそうな気がする。そんな考えが浮かんだ。

「ね、ねえ、そのブイゼルって人の言葉を知っているの？」

2人が食事していると1人の“少女”が現れていた。クオンは一瞬驚いたが、我に返る。

* * *

いきなり、変なタイミングで話しかけられて、少し驚いたけど、文字を書くブイゼルなんて、珍しがられるよな。

いつもガバイトとも仲良くしているブイゼルは、そこらでは見ることの出来ない、文字を書くブイゼルだと、クオンは改めて感じていた。「簡単な単語を少しだけね」

トロナツのブイゼルは、日常的に使われるような言葉は大体把握していて、ポケモンが話していることを片言ながら、メモ帳に翻訳できる。――早口のポケモンは、察してほしい。

クオンたちは、ベレー帽を被る少女と、しばらく話をした。

彼女の名前は、アトリエ。ミオシテイ出身の小説家であり、相棒のドーブルと共に、小説のアイディアを考えながら気ままな旅をしていた。

「——唐突かもしれないけど、2人の旅に私もついて行っちゃ、ダメかな？」

いきなりと言えるアトリエの言動に、2人は彼女を疑った。それも仕方がない。2人は、ブイゼルがいると小説が書ける、なんていうアトリエの考えを知らないのだから。

「少し考えてみるよ」

クオンがそう答えていて、トロナツとポケモンセンターの入口へ向かっていった。

「私は明後日の夜まで、ここで小説を書いているから、いつでも来てよ！」

アトリエは、入口にいる2人にそう言い放っていた。冷静になってアトリエは思う、何故ブイゼルに拘るのだろうか。あの2人と旅をしたいと強く思うのだろうか。——もしかしたら彼女は、“数時間後”に起こる、ポケモンの強い思いが多く交差する”とある出来事”を予知していたのかもしれない。



ポケモンセンターを出て北側へ向かおうとすると、緩やかな上り坂が目に入る。クオンとトロナツは、その上り坂を歩いていると、とても大きな建物が見えてくる。

大きな大理石の建物があり、その周りには多くの木々や低木が、その真っ白な建物をひと際目立たせていた。ここがクロガネ化石博物館。

クオンたちは、建物を眺めていると入口近くの低木から、2つのポケモンらしき影が見えていて、その2つ影は、博物館の中へと消えていった。

「ポケモンの姿、見えたか？」

「全然、小さな影だったけど」

博物館の入口は、出入り自由であり、ポケモンらしき影が中に入っていく前に、先駆けて入っていったトレーナーなどは、いない。野生

ポケモンが中に入っていたのかとクオンは考える。

2人は、博物館の中へ入る。まず目に入ったのが植物で、太古の時代を思わせるようにあらゆる植物が不規則に、これでもかと置かれていた。点々と縦長のガラスケースが置いてあり、中には大小様々な化石があった。天井にはいくつものシャンデリア、奥の方には横に広い緩やかな階段。見慣れない風景が2人の思考を奪う。

「——ようこそクロガネ化石博物館へ、わたくし副館長のコールマと申します」

広々とした入口には、黒めスーツを着て、灰色の髪した紳士的な男性老人が立っていた。

「すみませんが、先程ここに野生のポケモンが入ってきましたでしたか？」

クオンが言葉を投げかける。

「そのようなポケモンは見受けられなかったです。ここに野生のポケモンがやってくることは、殆どないですので、是非ゆくりとご観覧ください」

確かに博物館の中へ入っていくポケモンの影を見ていた2人ではあったが、そこまで気にすることではなかった為、展示物を見て回ることにした。

博物館内は1階と2階があり、今2人がいる場所が中央ホール。そこから東側と西側があり、1階片側の展示物を軽く見るだけで数十分かかる。2階の東側は、化石に関する本が色々と置かれた図書室があるようで、2人はそこへ行くことにした。

その部屋へ向かう為の通路にも、不規則に置かれた植物、化石が入ったガラスケースが点々と置かれている。

「——こんな博物館、初めて見たよ」

トロナツが静かに呟く。歩きやすいように置かれているものの、規則正しくなく置かれた展示物や植物は、独創的なアートとも言えるものだった。しかし、2人は不思議と不快にはならない。ガラスケースの中の化石が生き生きとしているように見えていたからだ。

2人は、沢山の本が置かれた図書室にたどり着く。入口からここま

で10分以上が経っていた。どうしてポケモンは化石になったのかという本から、あらゆる化石に関する資料本までの本があった。多くの本棚が並ぶ、その室内の中心には1つのガラスケースが置かれていた。中には、花のような形をした化石である。

「君たち、化石に興味があるのかい？」

奥の方で本を読んでいた男性が、クオンたちに気付き、やってきていた。

第16話 ロコンとゴジョフー

クオンたちの目の前に現れた男性は、小さい羽根飾りがある茶色のハットを被り、明るめなベージュのスーツを着た背が高く若い男であった。彼の名前は、ノネト。考古学者であり、今はこの博物館の”館長代理”として勤めていた。

「この化石は、太古の時代で断崖にしか生えなかった、”きのみ”の一種で、一部のポケモンだけが食べていた珍しい”きのみ”だよ！」

1つのガラスケースの中にある化石を見ていた2人を見て、ノネトは、はきはきとした口調で語りだしていた。

「一部のポケモン？」

トロナツは、声を出す。

「プテラき、彼らは空を飛び回っている際に、この”きのみ”を見つけるとは食べていたと言われているんだ」

プテラとは太古の時代に生きていたポケモンで、平和とは決して言えない激しい時代の中、他とは違い空を飛び回ることによって勝ち抜いてきた頂点捕食者としてのポケモンであると言われている。

「今暇してて、もし良ければ案内しようか？」

真剣な眼差しで化石を見ている2人を見て、何を思ったのかノネトがそういった提案を持ち掛けていた。今の時間帯はお昼ごろであり、博物館の中は、人がいるとは言えなかった。2人がその言葉に甘える。図書室から出て、ノネトは2人の前を歩き始めていた。

「これは、何かのポケモンの骨の化石。これは、とある植物の葉っぱの化石」

多くの展示物を指差してノネトは、すらすらと話し続ける。もっと詳しく説明しながら進んでいくのかと2人は思っていた。それよりも、何の化石なのか直ぐに分かるノネトの言葉に只々2人は耳を傾けていた。

「——急に難しいことを言うけども、2人は、どうして太古の時代に生きていたポケモンが絶滅したと思っっている？」

太古の時代に生きていたポケモンなどは、何らかの理由によって殆

ど絶滅したことが分かっていた。有力な仮説として、地球外から大きな隕石が地に降りてきて、その衝撃による地球規模の大災害によるものだとされている。

「私はね、太古の時代に生きていたポケモンが強すぎたからだと思っている」

強き者は弱き者を助けなくてはいけない。悪役は必ず正義の味方に負ける。そんな言葉がある。強さを追い求め続けた昔のポケモンたちは、天災によって負けたのだとノネットは語った。

「人は太古の時代に生きていたポケモンに見習う箇所が多くあると私は、思っている。考古学者になったのも、それが原動力さ！」

3人は長い廊下を抜けて、2階西側のある大部屋にやってくる。大きな展示物の近くで、入口で会っていた副館長のコールマと、灰色のダウンベストを着て、大きめの黒いニット帽をかぶった背の高い男が何か話し合っていた。

「——簡潔に言おうと、あの”赤いひみつのコハク”はこの博物館にふさわしくないような代物だと言っているんですよ」

ニット帽を被る男がそう話していた。

「それを決めるのは貴方でも、わたくしでも、ここの館長でもありません。ここへやってくる1人1人だとわたくしは思いますよ」

「私たち、グレイ団の技術があれば、この”赤いひみつのコハク”を復元しなくとも、どのようなプラテラになり得るのか、少し時間を頂ければ素晴らしい結果を保証しますよ」

「博物館の全ての展示物は、いくらのお額を出そうとも売買に出すつもりはありません」

言い争っているのを見ていたノネットは、急いでコールマの元へ駆け寄った。クオンやトロナツもその背中を追いかけた。

「——それほど大事なものでしたら、盗まれないように気を付けてください」

男は捨て台詞を吐き博物館から去っていった。先程の男はヒューマと名乗り、”赤いひみつのコハク”をいくらかで譲ってほしいと、無理やりの交渉をしていたとコールマは話した。



「——これが”赤いひみつのコハク”」

クオンとトロナツは目の前にある展示物を眺めていた。

本来”琥珀”とは樹木の樹脂が土砂などに埋もれ、長い年月を経て化石化したものである。当初は只でさえ大きな生物が入った琥珀でさえ珍しく、赤色の琥珀などあり得ないと言われるが、1つの仮説によつて学者たちは黙り込んだ。

この赤色は、樹脂と血が混ざった色ではないかと。

つまりだ、これだけ小さなプテラが化石になつていて、その樹脂に血が混ざっているということは、その血を流したものは、小さなプテラを捕食しなかった者ということ。小さなプテラの生みの親という結論に至っていた。

——これが”赤いひみつのコハク”の真実である。

「そういえばコールマ、あの2匹は？」

「いつもの河原で遊んでいますよ」

コールマとノネットが大部屋にあつた非常口の扉を開けて外へ出ていく。2匹という言葉が気になり、クオンたちも後を追いかける。扉の直ぐ向こうには緩やかな下り坂があり、その先に、大きな川石が沢山ある小川が見えていた。そして、ずぶ濡れになりながら水遊びをしているロコンと、1つの川石の上で瞑想をするコジョフーの2匹がいた。

「風邪をひきますよ、ロコン」

心配そうな顔をしてコールマがロコンに呼びかける。コールマと目が合っていたロコンは、急に振り返り小川の真ん中へ向かい、”みずタイプ”と思わせるような泳ぎを見せつける。すると瞑想をしていたコジョフーが立ち上がりロコンへ叱咤していた。

「あの2匹は？」

トロナツは、ノネットに問いかけた。

2匹は博物館へよく遊びに来ている野生のポケモンで、前の館長と親しい関係であつたらしい。それだけ昔からここへ遊びに来ているポケモンだとノネットは言う。

小川からロコンが渋々と上がっていて、小川の中にある川石の上
いたコジヨフーは、一飛びでコールマの元へやってくる。

「それにしても、水を嫌がらないロコンって珍しいですね」

クオンは思ったことを話していた。

「前までは、水を見ても喜ぶような奴じゃなかったんだけどな」

いつの間にか泳ぐのが好きになっていたとノネトは話す。昔は水
を嫌がる素振りはなかったが泳ぐほどではなかったらしい。どう
いった理由で泳ぐことが好きになったのかもノネトは分からないと
話していた。

「——そういえば明日、2匹と207番道路へ行って、化石掘りしに行
こうと思っていたけど、専用の道具が3つほど余っているんだ！ 2
人とも良ければ友達1人誘って、一緒に来てみないか？」

ノネトが2人にそう話していて、2人も断る理由はなかった。



夕方になり、博物館内は電気が付き始めていた。ロコンとコジヨ
フーはどうやら帰るようだった。

「あの2匹ってクロガネゲートが住処？」

西の方角へ帰っていく2匹を見てクオンは呟く。ロコンとコジヨ
フーは207番道路にしかないポケモンだと昔、アールスに聞いた
記憶がある。——記憶違いか、あるいは生息地が少し変わったのかと
思い、クオンは、それ以上考えることはなかった。

——2人はポケモンセンターへ戻ってくる。1つテーブルにはア
トリエがいて、おそらくずっとその席で鉛筆を走らせていたと言わん
ばかりに、テーブルの上の原稿は、びっしりと文字が敷き詰められて
いた。しかし、左端だけは、何度も書き直したような跡があり、黒ず
んでいて文字が書かれていなかった。

「久しぶりにすらすらと書いてたけど、大事な場面で頭が真っ白に
なってしまったよ」

アトリエが書いていた小説の物語。

太古の時代に生きるポケモンたちの群れは、1つの洞穴に住んでい
て、その中で1匹のポケモンが生まれる。生まれたばかりのポケモン

は、外へ出たがるが、ある程度の強さがないと外へ出られない決まりがあり、生まれたばかりのポケモンは、強くなるため、日々鍛錬に励む。しかし、ある日に空が赤く染まり、他のポケモンたちは外へ出て様子を見に行くが、生まれたばかりのポケモンは、まだ外へ出ることは出来ない。空は暗くなっていて、生まれたばかりのポケモンは眠る。起きると誰もいなく、光が差している場所を掘っていくと、広大な大地が広がっていた、そんな物語である。

第17話 小説家アトリエ

少し時間を遡る。クオンとトロナツが小川で2匹と出会った時あたりまでだ。

その川の上流は207番道路。

クロガネシティからサイクリングロードまで続く、緩やかな上り坂がある道路だが、右へと逸れると荒々しい地形に変わり、テンガン山が直ぐに見えてくる。テンガン山までの一本道以外の凸凹とした地形は、人が寄り付かず、主に”かくとうタイプ”の野生ポケモンの修行の場である。また、シンオウ地方では数少ない地熱地域である為、”ほのおタイプ”の野生ポケモンもちらほら見かけられる。

「おい！ ニット帽の兄ちゃん、俺らの縄張りに何か用か？」

素行が悪そうな男がニット帽を被る青少年を睨む。

「ちよつと、1人になりたくて、人が居なそうな場所を歩いていたんですが、”皆さん”はここで何を？」

人が寄り付かないの地形にやってくるのは必ずしも野生ポケモンだけではない。ここは、ならず者たちが集まっている場所でもあったのだ。

「いけ、ルカリオ」

ニット帽を被る青少年は、灰色のボールをポケットから出し、その中から活発で陽気そうなルカリオを繰り出していった。

「——用があつたのはお互い様です」

◆ ◆ ◆

少し離れた場所で、ならず者たちが慌ただしく集まっていた。全員の見線の先には、黒色のシャツを着て、黒いタオルを頭に巻き、赤い手袋を身に着ける大柄な男がいて、周りからはボスと呼ばれている。彼の名前は、サメ。

「たった1人に何人やられているんだ！」

「それが、ボス！ 奴はとんでもなく強いんすよ」

「そうそう、勝ち目がまるで見つからねえ！ 仲間が逃げ腰になるのも仕方がないっす！」

青少年とルカリオは、次々と向かってくる下っ端のポケモンを数秒
かからずに打ち負かし、進んでいた。

「下っ端がよく言っていたボスとは、貴方のことですかね？」

大きめの黒いニット帽をかぶった背の高い青少年、大衆を見て丁寧
にお辞儀をするルカリオがサメがいる場所へたどり着いていた。

「——待て、俺が出る。これ以上部下が負ける様を見たくないからな
！」

サメが青少年の元へ歩み寄る。

「俺はサメって言うんだ、おめえの名前はなんだ？」

「グレイ団のヒューマと申します」

「そうか」

サメは無言でポケットから1つのボールを目の前に投げ入れる。
ボールからはクリムガンが現れていた。これ以上語ることはないと
いう意思表示のような行為であろう。

「クリムガン、”ほのおのパンチ”！」

「ルカリオ、”コメットパンチ”」

2匹の拳がぶつかり合った。しばらくすると、ルカリオが徐に拳を
緩めていて、クリムガンは拳を抱えて倒れこんでいた。クリムガン
は、そのまま立ち上がるうとしない。

「ルカリオ、何をしている？ 早く決着をつけろ」

ヒューマの声を聞き、ルカリオは倒れるクリムガンへ寄って、拳を
振り上げる。

「もう決着はついてる。俺の負けだ！」

急いでクリムガンをボールへ戻し、ヒューマの顔を睨んだ。

「一体、何が目的でここへ来たんだ？」

単なる八つ当たりだけが目的ではないとサメは感じ、ヒューマに問
いただし。

「——今から2つの選択肢を言う。お前たちはどっちがいいか選んで
くれ。1つ目は、お前たちのポケモンを全て頂く、2つ目は、俺たち
と”あること”を協力するかのどちらかだ」

「——あることってのは？」

「野生のポケモンを大量に捕まえて、クロガネシティの化石博物館を派手に荒らしてくれればいいだけさ」

「——そう言っつて、俺たちを警察の的にさせるつもりじゃないんだろうな」

「疑うのなら好きな時に逃げればいい、俺は野生ポケモンを大量に捕まえてくれるだけの人材としか見ていないから安心してくれ」



更に時間を大きく遡る。クオンとトロナツがまだ出会っていない頃、クロガネシティのポケモンセンターで1人の少女が鉛筆を咥え、目の前のテーブルの上には真つ白な原稿が置かれていた。そう、彼女の名前は、アトリエ。小説のネタを考えるためにクロガネシティに滞在していた。

「ドーブル、いくら私が書こうとしないからって、その紙にお絵描きしちゃ駄目だからね」

ドーブルは真つ白な原稿を見つめていた。

(絶対に、このテーマで小説を書いてやるんだから！)

アトリエが決めていた小説のテーマは、『太古の時代のポケモン』であり、それら関連の小説を作ると心に決めていた。しかし、物事はそう上手くはいかなかった。

アトリエは、近くにあった雑誌を手を取った。そこにはヨスガシティで行われるテンガン杯という大会のことが詳しく記載されていた。

「向こうのヨスガシティでは、一か月後にテンガン杯が始まるのか。——そっちに行っつて白熱する試合を眺めれば、何か小説が書けるかなっつて、駄目だ」

どうしても小説に熱が入らない自分があることが嫌いで、克服する為に、この町に留まっているのが理由の1つである。もう1つは、些細な理由であった。

「朝早くなら書けるかな思っただけど、やっぱり変わらないな。博物館に

行こう」

アトリエは、毎朝化石博物館へ向かい、展示物を眺めることが日課になっている。軽い運動と、小説のテーマである”太古の時代のポケモン”への意識を高める為にであった。時折、何の為にと思いながらも、博物館の全ての展示物を眺める。——最後に眺める展示物はいつも決まっている。

長い廊下を抜け、広い大部屋に1つ大きな展示物が置いてある。彼女が最後に見る展示物は”赤いひみつのコハク”であった。

* * *

いつも思う。この展示物だけ、毎日見ても新鮮な気持ちになれる。毎日のようにアトリエは、生きているはずもない展示物の化石たちに語りかける。時折、人に見られて恥ずかしくなりながらも、よく考えれば無意味な行動だと思いつつも、アトリエは、口を閉ざすことはない。

「——ドープルだ！ 珍しい！」

その声にアトリエは振り返ると、少年少女の2人がいた。彼らの名前は、コノミとフウト。

(そういえば、ドープルってシンオウ地方に、いないポケモンだったか)

——シンオウ地方に生息しているポケモンの種類は、約100年前より遥かに多い。主な理由としては、各地方まで広がった『ちかつろ』が原因だとされている。

『ちかつろ』

昔はシンオウ地方全土の地下に広がる場所とされていたが、今は各地方まで広がっていて、その殆どが野生ポケモンの住処になっている。一部の通路が開拓され、大規模な地下鉄となっている。

「——もしかして、貴方、小説家のアトリエさんですか？」

コノミの一言にアトリエは驚く。いくら小説を出版しているとはいえ、無名である自分の名を呼ばれるとは思いがけないことであった。

「——そうだけど」

「やっぱり、何処かで見た顔だっと思っていたからさ」

2人はヒノキア博士の助手で、博士に進められてアトリエの小説を読んだことがあると話す。

「博士はポケモンの性格の違いについて研究しているからな、ポケモンの心境を書く小説に関心があっただらうな」

ヒノキア博士はポケモンの性格の違いを、アトリエはポケモンの心境を、2人は似通うところがある。

「博士に一度に会ってみたらどうだ？」

現在ヒノキア博士は、ハクタイシティで“ちかつうる”に住む野生ポケモンの調査をしているとフウトは話していた。

第18話 たてのカセキ

「博士に一度に会ってみたらどうだ？」

そんなフウトが投げかける言葉にアトリエは頷く。

「会ってみるよ！」

そう言葉を返した。

◆ ◆ ◆

その日の夜、アトリエは荷物を整えていた。思ったら行動、それが彼女のポリシーだった。次の日になり、朝日が昇る頃、アトリエはポケモンセンターを出る。日が真上にやってきた時にハクタイシティへ到着する。

「——確かこの家だったかな」

とある一軒家の前にアトリエは立つ。2人が言うには、この家にヒノキア博士がいるらしい。アトリエが一言の声を放ち扉を開けると、大勢の研究者らしき人物がわたわたとしていている。

「——今は忙しいんだ、また後日にしてくれ！」

白い衣服を身にまとい、頭に赤いバンダナを巻いた高身長の若い男性が言葉を返していた。彼がヒノキア博士である。

「そこを何とか！」

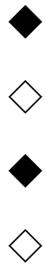
忙しい様子だったのは分かっていたが、アトリエは、どうしても博士と話し合いたいと思っていた。それを見た博士は苦い顔をした。

「そこを何とか、周りの様子を見てから言ってくれ！ こっちは1分の暇もないんだよ！ 小説の事で話し合いたいなら、今の俺の為に小説を持ってこい！」

博士は大声を放ちアトリエを追い出した。一軒家の扉の前でアトリエは佇む。

——確かに、博士からしたら今小説のことで話し合うことは、全く意味のない事、博士の為にならない。私にとっての小説は、自分の為だけに書いていたんだ。努力が足りない。

——今から書く小説、いくら時間が掛かってもいい、全て本気で書いてみよう。



「——それからクロガネシティに戻ってきた私は、小説を書けずにいたんだけど、どうしてか貴方のブイゼルを見て何か掴んだような気がするんだ！」

時間は元に戻り、つい先程日が沈んだ夜のポケモンセンター、その中にアトリエ、クオン、トロナツの3人がいる。化石博物館から戻ってきたクオンとトロナツは、アトリエの今までの話を静かに聞いていた。

「別に深い理由があるわけでもない、2人の旅についていきたいんだ！」

クオンとトロナツは言葉を呑む。

「いいよー！」

トロナツはそう答える。断る理由もなく、クオンも頷く。

「——明日、博物館の館長さんに誘われて、化石掘りに向かうけど、アトリエさんも一緒に来ますか？」

「さん付けしなくていいよ、アトリエでいいからー！」

——新たな仲間、小説家のアトリエ。仲間が増えるということ、色がどんどんカラフルに染まっていく。つまり、仲間が色が増えれば、この物語は更に加速する。



窓の近くの木から鳥ポケモンの羽ばたく音が聞こえて、目が覚める。

「——もう朝か」

ポケモンセンターの小さな部屋で、アトリエは机に鉛筆を置き、座っていた椅子から立ち上がる。アトリエは今日、クオンたちと207番道路へ向かい、化石掘りをする予定であった。ウキウキと支度を整えて、部屋を出る。

1階へやってくると、2人が待っていた。

「ごめん！遅くなった？」

そう声をかけるアトリエに2人は何も返さない。アトリエは、何故だろうと考えていると、誰かから服の裾を引っ張られる感覚があり、後ろを振り返る。そこにはドーブルがいて、両手でベレー帽を持っていた。

アトリエは自分の頭を触つてみると、いつものふつくらとした感触がなかった。

「——まだまだだな、私は」

静かにそう呟きアトリエは、ドーブルからベレー帽を受け取る。ベレー帽をかぶり、いつものふつくらとした感触を手で確かめた。

「おまたせ！」

クオンたち3人はポケモンセンターを出る。博物館へ近づくと、入口付近にでノネトとロコン、ゴジョフーがいて、その流れで207番道路へと向かった。



——博物館の裏側にあつた小川を上つた場所であろう河原、その隣り合わせにあつた自然豊かな風景際立つ砂利道をクオンたちは歩いていた。ロコンは河原を見かけると、そこへ走り出し、水へ飛び込む。ゴジョフーは呆れた様子でそれを見ていた。

「まあ、仕方がないか！」

苦笑いをしノネトは話す。河原を泳ぐロコンを見ながらクオンたちは歩いた。

風景が一変し、河原の向こう側にとても大きな地層の壁がある。

「ここにしよう！」

浅い河原を渡つて、向こう側にたどり着く。ノネトは大きな荷物の中から人数分のハンマーとタガネを出していた。

この2種類の道具を使い分けて、化石掘りが行われる。そして、こういう地層に化石が眠っているとノネトは言った。

「私はいらない、ロコンたちを見ているよ！」

アトリエは河原で遊ぶ2匹を見ていてしていると答えていた。楽しそうに河原で遊ぶ2匹を見て、クオンとトロナツは、ガバイトとブイゼルをボールから出した。

——しばらくした頃、クオンが道具を使い地層を削つてるところを、ガバイトがじつと見つめていた。そこへノネットが現れて、2種類の道具をガバイトへ渡す。2つの道具の違いが分からないのか、ガバイトは2つの道具を両手で持ち、同時に何度も地層を削るというよりは叩いているようだった。少し離れた場所で化石掘りをしていたトロナツはクスリと笑った。

トロナツが反対方向を向くと、コジョフーが2つの道具を器用に使つて、黙々と化石掘りをしていた。

「コジョフー上手いですね！」

トロナツは近くで化石掘りをしていたノネットにそう話した。

「2匹は前の館長さんとよく化石掘りをしていたからね！」

「前の館長さんって、どんな人だったんですか？」

「——本当に尊敬できる人だったよ」

間を置いてノネットは答えていた。

前の館長は、化石の復元装置の研究に携わっていた1人であり、あらゆる地方に行つては化石を掘り続けていた。化石は生きている、という口癖を常に言っていたとノネットは話す。

「——あの2匹には、まだ話してないんだけど、前の館長さんは数か月前、亡くなったんだ」

——とある早朝、博物館から前の館長が207番道路に向かつていたところがノネットが見た最後の姿だった。雪崩に巻き込まれて亡くなつたらしい。

「ロコンとコジョフーは、そのことに薄々気が付いていると思う、どうか優しくしてくれないか」

トロナツはゆつくりと頷いた。

「——これ、ポケモンの化石かな？」

「これは！」 たてのカセキ」

クオンが地層から何かを見つけていて、ノネットが急ぎ足で駆け寄り、そう言う。ノネットは荷物の中からカメラと手帳を取り出して、色々な角度からその化石を数枚撮り、手帳に何か書き記す。どうやらこの場所でポケモンの化石が見つかることは相当珍しい事だったよ

うだ。

第19話 動き出す闇

”たてのカセキ”という大きな収穫を得たクオンたちは、化石博物館へ戻ってきていた。入口では副館長のコールマが待っていたように、真つ先に2匹に駆け寄っていた。

「——ロコン、また泥だらけになって、こっちにおいで」

コールマは水道ホースを持ち、蛇口を捻る。したり顔をする泥まみれのロコンの頭に水をかけていた。その間にノネットが”たてのカセキ”を博物館の中になる復元装置に入れた。

クオンとトロナツは嬉しそうに水浴びするロコンを眺めていた。

「本当にロコンは水が好きなんだな」

「そうだね」

どこかぼんやりとしているトロナツは、静かに言葉を返した。

「明日くらいまでには、化石からポケモンが復元されていると思うから！」

復元には時間が掛かる。クオンたち3人はポケモンセンターへ戻ることにしていた。ロコンとコジョフーも帰るようで、トロナツとブイゼルが見送っていた。

クオンはあることに気付いた。片手を振るブイゼルのもう片方の手には手提げカバンの中にある手帳を持っていて、開いている。うっすらと見開いた頁を見てみると『しらないよ』という文字が書かれていた。

(トロナツ、あの2匹と何か会話をしていたのか)

——3人はポケモンセンターへ戻ってきた。

「今日は疲れたし、早めに寝るよ」

戻ってきた早々トロナツが2人にそう話し、部屋へと1人向かっていった。

「珍しいの？ そんな浮かない表情をして」

トロナツが部屋へと向かう様子を見ていたクオンが、考え込んでいるのを見て、アトリエは声をかけていた。

「なんか、いつもと違って、元気がないんだよな」

「——悩み事とかかな、考えても仕方ないよ」

「俺たちで解決できないのかな？」

「悩みたいときって誰だっと思う、トロナツは今その時なんじゃないかな」

アトリエは手元のコーヒーを口にする。

「今日も書くぞー！」

何処か嫌々した表情でアトリエは鉛筆を持って、原稿を睨んでいた。クオンは静かに席を立ち、トロナツと同じ部屋へ向かった。扉を開けると部屋は暗く、トロナツがベットで寝ているようだった。クオンも他にやることもなかったので、迷わず床に就いた。

「——起きてる？ クオン」

クオンがしばらく眠れずにしているとトロナツの声が聞こえてきた。

「起きてる」

「話したいことがあるんだけどいいかな」

「いいよ」

トロナツは化石掘りでノネトと話したこと、『前の館長は亡くなっている』ことを話し、あの時の2匹との会話のことを話し始めた。

「——あの時、2匹に話したことは、前の館長さんを知っているかどうかだったんだ」

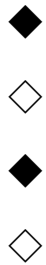
「それで、”しらない”って答えられたってことか」

「——見ていたんだ、なら簡潔に言うよ。僕の推測だけでも、あの2匹はどういうわけか知らないけど、まるで自分たちが前の館長さんを殺したって思ってるかもしれないんだ」

「自分を責め続けてるってことか」

「僕はもう2匹を見ているだけで辛くなる。——何とか出来ないかなクオン？」

徐々に泣きながら話す声がクオンには聞こえていた。これは嘘ではないとクオンは確信する。トロナツは共感力の高い人間なんだとクオンには伝わっていた。そして、トロナツの問いに答えられずにいた。



——この日の夕方、クログネシティから西の方角にある洞窟、クログネゲートでは、多くのならず者たちが見たこともないボールで野生ポケモンを大量に捕獲する姿が目撃された。

「ボス！ こっちの方では、20匹程捕まえたつす！」

「20匹は少なえな！ アイツの言った数には全然足りねえ！」

「了解つす！ ボス」

クログネゲートにはズバットやゴルバットなど夜行性のポケモンが住み着いていて、見つけ次第にボールを投げていた。

「にしても、このボールの性能を聞いたときは震えたな。世の中には本当にこういったボールが存在するんだな」

「どんな性能なんすか？」

「アイツが言うには”明日”が決行日だ、早くポケモンを捕まえろ！」

「——ボス！ 洞窟の入口から2匹のポケモンが！」

「ああ！ 野生ポケモンだったら捕まえろ！」

入口に現れた2匹のポケモンは、ロコンとコジョフー。

「待て！ やっぱ俺が確かめる！」

ボスと言われる男はポケットからボールを出し、中からクリムガンが現れた。ロコンを押しつけて、コジョフーが前になる。コジョフーは勢いよく駆け出し、クリムガンの体を掴むと手から衝撃波を放っていた。だがクリムガンはびくともしない。

「クリムガン、”ばかぢから”！」

咄嗟にコジョフーはクリムガンの背後に回り込む、尻尾を掴み投げ飛ばそうとしていたが、なかなか持ち上がらない。コジョフーはクリムガンの足元を見て気付く。クリムガンは、片足を地面へ突き刺していた。

「振り払えー！」

クリムガンは掴まれている尻尾を勢いよく振る。振り払われたコジョフーは壁にぶつかって倒れる。

「後は任せただぞ」

灰色のボールを構えていた一人が倒れているコジョフーに近づくが、真横から炎が飛んできて、ボールを持った男は驚いて尻餅をついた。炎が消えて、倒れたコジョフーの前には牙を向けるロコンの姿があった。

そして、洞窟の中が急に明るくなる。

「コイツ、隠れ特性か！」

ロコンの隠れ特性、『ひでり』は、場に出ると日差しが強い晴れの天候にすることが出来る特性。この天候で、”ほのおタイプ”の技の威力が上がり、”みずタイプ”の技の威力が下がる。そして、特定のポケモンが強くなれる。

「俺のクリムガンは、どこぞの野生ポケモンに負けるほど、弱くねえ！」

日が沈み、洞窟内だけが明るい夜。火花が散るような激しいバトルが行われていた。

「クリムガン、ドラゴンクロー！」

背中に倒れたコジョフーを気にしてか、ロコンはクリムガンの攻撃をまともに受けてしまう。体勢を上手く立て直せないロコんに無慈悲にもクリムガンは攻め立てる。向かってくるクリムガンに、ロコンは口から渾身の炎を吐き出した。しかし、それはクリムガンの横を通り過ぎ、洞窟の天井に当たっていた。

「――後は任せただぞー」

そう言つて、男は振り返り、ふと天井を見上げる。炎が当たった場所であろう天井部分に大きな亀裂が出来ていた。

「まさかな」

もしかしたら、あのロコンは初めから勝ち目がないと考え、洞窟を崩落させて、その隙にコジョフーを連れて逃げるつもりだったのではと考える。

（考えすぎか、だが、もしそうなら、見た目に反してかなりの無鉄砲さだな）

「――どうだ、順調に進んでいるか？ サメ」

「ようやくあと少しつてところだ、ヒューマさんよ」

ボスと言われていた男、サメは、ヒューマに山積みになっている捕獲済みボールを見せる。

「——今回の作戦を教える、相手にはジムリーダーもいるから、気を付けてくれよ」

ヒューマから聞かされた作戦の全容はこうだった。明日の深夜、化石博物館にサメたちが捕まえたポケモンを使い、正面から突入する。その隙にヒューマは、2階西側に忍び込み、”赤いひみつのコハク”を奪い取る。そして、火災を起こし、混乱に乗じて逃げるといったものだった。

第20話 始まる争い

想像以上に危険だった内容にならず者たちは慄く。博物館に火をつけるなどテロ行為と変わらない。

「もう一度確認したい。本当に俺たちに罪を押し付けたりしないんだな？」

「――疑うのなら好きな時に逃げればいい、それでも俺は困らない」

「――そうか、それは良かった」

作戦を理解して尚、サメは逃げることを選ばなかった。

――そして運命の日の朝が、今迎える。

ポケモンセンターから、3人が化石博物館に向かっていった。

「――眠たそうだね、アトリエ」

大きく欠伸をしていたアトリエを見てトロナツは声を出す。

「そりゃあねー！　これで2回目の徹夜だから」

夜な夜な小説を書き進めているとはいえ、何度も大きな欠伸をしながら街中を歩くアトリエ、ある意味、見習いたいなど2人は思う。化石博物館で復元されたポケモンが待っている。3人は、それらを楽しみに向かっている最中だった。アトリエは再び大きな欠伸をした。

「2匹は来ているかなー？」

「まだ来ていないんじゃないか？」

クオンはそう答えていたが、3人は知らない。2匹が”日中には”来ないことを。

「――来たね！　復元したポケモンは、あっちの部屋にいるよ」

低木の手入れをしていたノネットが指を差す方の部屋へと向かい、扉を開けるとコールマとタテトプスの姿があった。

タテトプスはこちらへやってきて、顔を摺り寄せる。おそらくそうやって物を見分けているのだろう。その瞳は眩しく、好奇心で満たされているようだった。廊下に出ても展示物に近づいては、1つ1つ顔を摺り寄せている。大して変わらないのにも思いながらタテトプスの後ろをクオンたちは歩く。

薄暗い博物館内を歩いていると、大広間へやってくる。その奥の方

からまぶしい光がさしていた。

「——タテトプス、そっちに行つてはいけないよ」

コールマは突然叫ぶ。タテトプスが向かおうとしていた先は、博物館の出入り口だった。

「——そうだ、コールマ、2匹見かけたか？」

「そういうえば、見かけていませんね」

そろそろ来ていいはずの時間になっても2匹は現れない。

「自分たちで探してきてみましょうか？」

「——いや、いいよ、時々だけ夜にやってくることもあるんだ」

「それじゃあ、夕方頃にまた来ようか！」

アトリエの意見に賛成し、トロナツとクオンは、一旦博物館を出て行くことにした。

◆ ◆ ◆

時刻は夕方頃、207番道路のならず者の集まりの場所にとある男がやってくる。灰色のダウンベストを着て、白色と黒の中折れハットをかぶった男性がならず者の前に立っていた。彼の名前はクウノトリ。

「彼が今回の指揮官さ、主に博物館内や外の状況を知らせてくれる」

「どうも、初めまして、クウノトリと申します。博物館内とその近くにある監視カメラにハッキングするのは少し手間がかかりました」

そして、クウノトリは作戦の内容を話す。

深夜0時、その時刻に作戦が実行される。まずはサメたちが捕獲したポケモンを使い、博物館入口から堂々と入り暴れまわる。これはあくまでも陽動で、相手側にはそう悟らせてはいけない。

サメたちが暴れまわっている最中に、ヒューマが裏口から侵入し、”赤いひみつのコハク”を奪う。そして博物館に火をつけて、その隙に逃げるという作戦だ。

「それにしても思ったが、お前たちが”赤いひみつのコハク”に拘る理由が分からないな」

サメはそう言葉を呟かせる。はつきり言ってしまったえば、”赤いひみつのコハク”は親プテラの血が樹脂と混ざり、その中に子プテラが

入っているだけのもの。サメはグレイ団という組織自体が、そこまで欲する理由が思い浮かべられなかった。

「もしそれを知りたいのならグレイ団に入るんだな」

上口調でクウノトリが答えていた。

——既に日が暮れて寝静まり始める時刻のクロガネシティ、化石博物館前に3人がやってきていた。館内へ入ると副館長のコールマが待っていたようで、3人は1つの部屋に案内された。その部屋ではタテトプスが気を休めていた。

「ノネットさんは、どこにいらっしやるのですか？」

クオンがコールマに尋ねていて、1人違う部屋で資料を見ながらゆっくりしていますと言葉を返していた。そしてコールマは、まだ2匹はやって来ていないとも言った。

「今日は遅いですので、ここに泊まっていつててください」

気付けば時計の針はどちらも一番上を指していて、その言葉に甘え、クオンたちは博物館に泊まることにしていた。せかせかとコールマは3人を泊める部屋へと案内しようとしていると、入口の方から騒々しい音が聞こえてきていた。それは数人程度が喚いたような音ではなく、例えるなら機動隊が突入したような音であった。

コールマと3人は急いで入口へと向かった。そこでは数えきれないほどの目を光らせたポケモンたちと目つきの悪い人たちが複数人立っていた。その後ろから大柄の男、サメがポケモンと人をかき分けて、前へ立つ。

「ここにはジムリーダーがいるって聞いてよお、ちよつと暇なら遊んでくれよ！」

サメはそう言い終えると、目を光らせたポケモンたちは、暴れ動き始める。3人は迷わず自身のポケモンを繰り出す。

「——アーケオス、頼みました！」

いつの間にか、コールマはアーケオスを繰り出していた。

「ガバイトー！」ドラゴンクロー！」

暴れ動く1匹のポケモンに技が当たる。しばらくしてクオンはあることに気付いていた。

* * *

少し交戦をして分かったことがある。数は多いけど、1匹1匹は大して強くない。時間をかければ全滅できる。

そんなクオンの策略は、サメの一手で白紙に戻される。

「出てこい！ クリムガン、”ダストシユート”だ」

投げ入れられたボールから、クリムガンが現れ、不気味な色の塊を飛ばしていた。

その攻撃は交戦していたアトリエのダブルに当たる。

「ブイゼル！ ドーブルの助けに行つて！」

ドーブルが倒れた瞬間、目を光らせたポケモンの多くが、ダブルへ向かう様子を見せていて、トロナツの咄嗟の判断でダブルは軽傷で済んでいた。

（薄々気付いていたが、このポケモンたち獰猛な割に、団結しているのか）

単体で動くのと、複数体で動くのでは、全く脅威が違う。こちらのポケモンはたった4匹、そして今やられた1匹に敵ポケモンたちが集中している。つまり他3匹はダブルを守りながら敵ポケモンたちを倒さなくてはいけない。そして他にも不安要素はあった。それは強さが分からないクリムガンである。クオンとガバイトはサメの前に立つ。

「トロナツ、そこを頼めるか！ 俺はクリムガンの相手をする！」

しかし、トロナツは集中しているのか返事はしなかった。少し気になりクオンは、トロナツの方を向いた。

——トロナツの近くには、ロコンとコジョフーがいた。

◆ ◆ ◆

「——なんだろうな、この集中できない気持ちは」

博物館の入口から遠く離れたとある資料室にノネットがいた。肩の荷を下ろして椅子に腰掛けたノネットの目先のテーブルの上には資料本が積み重なっている。今日は何か違う気がする。ノネットはそう考えていた。テーブルの上に置いてあるカバンの中にあつたボールが動く音がノネットには聞こえた。

「何かを感じたのか、相棒」

急いでボールが入るカバンを持ち、ノネットは部屋を出て、ある場所に向かっていた。

第21話 止まらぬ惨劇

ノネトはある大部屋にやってくる。月の光が差している薄暗い大部屋の中央には大きな展示物、見覚えのある男が立っていた。その人物は前にここで副館長のコールマと口論をしていた男。

「——それほど大事なものでしたら、盗まれないように気を付けてください。まさか、その言葉が宣戦布告を意味していたとは流石に思わなかったよ、ヒューマさん」

「——それでは、私から返す言葉は要らないですね」

そう言ってヒューマは、灰色のボールからルカリオを繰り出す。ノネトは、カバンの中からボールを取り出し、投げ入れる。その中からプテラが現れていた。

「クロガネシティ、”いわタイプ”のジムリーダーとしての強さ、とくと眺めよ！」

「——ルカリオ！ ”はどうだん”！」

飛び回るプテラに対して、ルカリオは構えに入った。

「——先手で”はどうだん”か」

ノネトは”はどうだん”の汎用性の高さをよく知っている。普通に打ち放つたり、放つ軌道に変化をつけて攪乱したり、目の前で破裂させて、近距離の攻撃にもなり得る技だ。

——しかし、ヒューマのルカリオはどれにも当てはまらない。”

はどうだん”の大きさはルカリオの体を大きく超えている。ノネトは、言葉を失う。

——世界的に有名だった技の研究者が放った一言に過ぎないが、その一言は数十年、覆ることがなく、常識になりつつあった。

『”はどうだん”の大きさには上限がある。自身の体より大きくはならない』

これにより大きな”はどうだん”を作ることとは不可能だと今まで言われてきたが、ノネトの目の前には、その一言の例外に入っているポケモンが立っているのだ。

「何故だ！」

1つ言葉を放ち、ノネットはプテラに距離をとるように指示した。ルカリオはしっかりと狙ったような目でプテラに”はどうだん”を当てる。

「ルカリオ、コメットパンチ！」

地に落ちて立ち上がれないままだったプテラに、ルカリオは近づき拳を振り下ろす。

「こんな簡単に勝てるとは、正直思っていなかったよ！」

倒れたプテラ、ヒューマは薄笑いで話す。

「プテラはチャレンジャーと戦ったから、疲れていたんだよ」

ノネットはそう答える。

「——無駄な勝負だったよ、ありがたく”赤いひみつのコハク”は貰っていくよ」

捨て台詞を残し、ヒューマが大きな展示物の前に立つ。ガラスケースの中にあっただのは、ごく普通の”ひみつのコハク”であった。ヒューマは動揺し、後ろを向く。

「——本当にとんだ茶番だったよ、さっきの勝負は！」

「——何をした？」



——数分前、化石博物館入口では、クオンたちとならず者たちが交戦していた。サメのクリムガン、クオンのガバイトの”ドラゴンクロー”がぶつかり合う、そして両者距離を取る。牙を向け威嚇するクリムガンに対して、ガバイトは両腕をピクリとも動かさず構えていて、相手をしかと見つめてる。

このガバイトは何か違うと、サメは感じていた。

——コジョフーとロコンは、トロナツへゆつくりと近づき、いや正確にはドーブルへ近づいていたのだ。異変に気付いたトロナツは2匹を見つめる。

「どうして」

トロナツはそう呟く。コールマもアーケオスに指示を出しつつ、遠

くから2匹の異変を感じ取っていた。

敵ポケモンの数が多くなり、避けることに必死になったブイゼルは、天井へ向けて”みずでっぽう”を放つ。大きなシャンデリアが平らな場所に落ちてくる。その周辺にいたズバットとゴルバットはその眩しい光に驚き、多くのポケモンを巻き込み大混乱になっていた。

戦いの最中、サメはそのブイゼルの行動をよく見ていた。

(あのブイゼル、あの状況でよく天井からシャンデリアを落とすつていう発想が出てくるもんだな)

サメはブイゼルの行動に感心していた。

ここにいる大半のポケモンは、この出来事に混乱していて、ここが攻め時と言わんばかりにコールマのアーケオスは次々とポケモンを倒していく。コールマの姿を見て、トロナツは何もしていない自分が嫌になっていた。

「敵ポケモンが混乱した今、攻め時です！」

「——分かってる。辛いけど今は2匹を倒すしか方法がないんだ！」

前を向き、トロナツはブイゼルに”さきどり”を指示する。

向かってきて技を出そうとするゴジョフーのであろう先取った技をブイゼルは、使った。

ブイゼルはゴジョフーを掴み、手から衝撃波を放つ。ゴジョフーは吹き飛ばされ、後ろにいたロコンと勢いよくぶつかった。2匹は倒れたままで動かなかった。トロナツが2匹へ急いで駆け寄ると、見たことがない傷があった。戦う前から既に弱っていたんだとトロナツはこの時に気付いた。

「——そろそろ決着をつけようか！」

サメがクオンに対してそう叫ぶ。クオンは何も言わなかった。

「クリムガン、”ダストシユート”！」

「ガバイト、”ドラゴンクロー”！」

ガバイトは最短でクリムガンへ向かっていく、そう最短で。クリムガンの”ダストシユート”を正面から受け、クリムガンの間合いに入っていた。

「なんだと!!」

油断していたクリムガンにガバイトは渾身のドラゴンクロウをぶつけた。倒れたクリムガンをサメはボールに戻していた。

「ガバイト、いくら耐性があるからって無茶し過ぎだ！」

クオンはガバイトに少し叱る。あの一手はクオンも予想出来ていなかった。

——そんな中央ホールに1つ、電話の音が鳴る。コールマが子機電話のようなものを服のポケットから取り出す。電話の相手には、何度も相槌を打ち、電話切る。

「ヒューマはノネットと2階西側の大部屋にいます。もう争う必要はありません！」

コールマは突然大声で言った。

——2階西側、”赤いひみつのコハク”が展示される大部屋で、誰かと電話をしているノネットがいた。

「——コールマ！ やはりここへ来ていたよ！」

ヒューマからは、携帯電話で誰かと話をするノネットが見えている。電話を切りノネットは少し笑いながらヒューマを見る。

「どうして知っているのか、教えてあげるよ。あんたのお仲間が教えてくれたのさ！」



——夕方頃、化石博物館に大柄の男がやってきていた。そしてノネットとコールマに深夜起こることを全て話してくれたという。中央ホールで、あえての交戦、全てはヒューマをここに誘い出すノネットの作戦だったのだ。ヒューマは片方の固くした拳をゆっくりと開かせる。

「——じゃあ、この作戦も知っているんだな」

ヒューマは近くにあった植物を指差して、ルカリオに”ブレイズキック”と指示をした。炎を纏ったルカリオの片足が1つの植物に当たると、植物は勢いよく燃えた。瞬く間に近くの植物に火が移る。博物館内には所狭しと植物が置かれている、勿論全て火に弱い。

このままでは博物館は燃えてしまう、ノネットにはそれが分かっていた。だが、ノネットはプレミアの他にポケモンを持っていなく、ヒューマを止める手立てがない。

「——疑うのなら好きな時に逃げればいい、この約束を破っていないくて安心したよ、サメ」

ゆつくりとヒューマがそう呟く。ノネットは少しの間、呆然とする。遠くから聞こえてくるヒューマの指示を出す声を只々何度か聞いていた。

「——とりあえず、火を止めないとな！」

ノネットは火が回ってない非常口の扉を開けて外へ出る。足を止めずに暗い街中へと消えていく。

第22話 結末

中央ホールにて、ならず者たちが1匹ずつボールに戻している姿が見かけられた。それにつられてるようにコールマと3人はポケモンを戻していた。

「本当に申し訳ない」

コールマが3人に誤った。後々に分かったことだが、アーケオスはジムリーダーのノネットのポケモンだったらしい。まともな指示を出さずとも戦っていたことに、不思議と思っていたクオンは納得していた。

「それより操られているロコンとコジョフー、元に戻してよ！」

トロナツはサメに2匹のことを話していた。しかし、サメの表情は強張る。

「本当に申し訳ねえ、それは出来ねえ！」

サメは灰色のボールを手に取り、トロナツたちに見せていた。

『グレイボール』

下半分が白色、上半分は灰色で真ん中には『G』というイニシャルがついているボール。簡単に言えば絶対服従のボールで、投げたトレーナーの指示には逆らえず、そのポケモンの意思を抑え込む。長年の研究により”マスターボール”並みの捕獲率を持ち、トレーナーのポケモンをボールから奪うことも可能。欠点はポケモンをその場で逃がすことが出来ない。

「——そんな！」

トロナツは気の滅入る声を出し、その場へ座り込んでいた。

——その頃ブイゼルは、転がっていたグレイボールを見つめる。中にはポケモンが入っている。ブイゼルはゆっくりと転がしつつグレイボールの外面を見ていた。

全てのポケモンをボールへと戻し、静かであった中央ホールにイシツブテが現れていた。

「誰だよ、ポケモンを出したのは！」

「俺じゃねえぞ！」

「おい！ 開いたままのボールが落ちてるぞ！」

「——開いたままのボール!？」

クオンたちがそこへ向かうと、開いたままのボールとブイゼルが、また違ったボールに手を置いていた。急にボールからか、小さく変な音が鳴り、光りだす。光り終わると、同じく開いたままのボールとズバットがいた。

ブイゼルは手提げカバンから、鉛筆とメモ帳を取り出し、何かを書き始めた。

『まかせて』

その4文字を皆に見せていた。1匹1匹ボールから放たれるポケモンたちが外へ出ていく姿を皆は眺める。何故ブイゼルがという考えはあつたが、任せてという言葉と、実際ボールから活き活きとしたポケモンを見てしまえば、何も言えなくなる。

「——確か、ボールの説明にポケモンの意思を抑え込むとありましたよね？ もしかしたらそれが原因ではないでしょうか？」

コールマはそう呟いた。

例えば、ポケモンの意思を抑え込むという部分が機能しなくなった場合、ポケモンは意思を持つことになり、絶対服従のボールとは矛盾する。つまり、そうなった場合の解決策がなくてはならない。——仮説に過ぎないが、中にいるポケモンが意思を持った場合、強制的にボールから弾かれるといった機能なら辻褄が合うが、ブイゼルが中のポケモンに意思を吹きかけたのか、それ以外の何かかは分からない。

更に不思議なのは、クオンのガバイトにもボールを弄らせてみたが全く変化が起きなかった事。短時間で調べてみたところ、この芸当はブイゼルにしか出来ないようだった。

——ブイゼルは最後に2つのボールを残していた。ロコンとコジヨフーが入るボールだ。ブイゼルは、2匹をボールから出した。うつろな表情で現れた2匹はふらふらとした足取りでコールマへ向かう。正確にはコールマの足元にいたタテトプスに。

「——やっと会えましたね」

コールマからは大粒の涙が零れていたことにアトリエは、さり気な

く気付いていた。

「——ここにいたのか」

1階西側の廊下からヒューマが現れていた。片足に炎を纏ったルカリオが近くの植物に火をつける。

「すまない、”赤いひみつのコハク”を盗めなかった！ 作戦の通りに博物館の半分だが火を付け終えた所だ、さあ逃げようか、サメ！」

「——好きな時に逃げればいいよヒューマ。丁度いい機会だ、またこの大人数で天狗になったお前を捻りつぶしてやるよ！」

サメとヒューマが睨み合う。

「——作戦終了だ、ヒューマ、大人しく帰るぞ！」

いつからそこにいたのか、出入り口でクウノトリが立っていた。

「それじゃあ、消火活動、頑張つて」

1つ捨て台詞を残し、2人は夜の街並みに同化していった。



時計の長い針はもうすぐ一番下に差し掛かっていた。

「消防には電話はしたのか？」

「——しましたけど、この火の勢いは」

博物館の西側は焼け焦がすような火の海となっていた。ポケモンの技を使い火の巡りを遅らせようとしたが無理があることに気が付いた。コールマは覚悟をし指揮をとった。

「——西側にある展示物を1つでも多く外へ運んでください！」

苦渋の選択だったが、命を別として、これより優先なことはない。この声に、クオンたち、ならず者たち、ポケモンたちは一致団結した。バケツリレーのように展示物を運び、この時、皆は火事場の馬鹿力だったのか、燃えていない西側の展示物をあつという間に運び終えていた。コールマの覚悟から、ここまでの時間はたった数分くらいである。

「皆！ 無事か！」

大きく一息ついている時、ノネットがやってきた。その背後には警察

関係者であろう人々や消防隊が駆けつけていた。その時だった、これから起きる出来事は、アトリエは今でも忘れないという。どうしてと聞かれると、アトリエはいつもこう答える。

『運命だった』

——嫌な音が聞こえた、それは何故か誰もがそう思う不快な音、後ろを振り返り博物館の西側が崩れていることに気が付いた。それと同時に聞こえる声。

「タテトプス？」

それはコールマの声だった。



朝になり、アトリエは博物館に歩いていく。焦げた色が所々に目立つ半壊した化石博物館、その前に立ち入り禁止と書かれたロープ。

ならず者たちは、主犯格に脅されてなど些細な命令に従っていたなど、あまり法に触れることはしていないという判断をされて、罪はかなり軽くなると警察関係者から聞かされた。

博物館から運び出した展示物は今は、ジムの倉庫に眠っている。コールマも今はジムの中で暮らしている。

「クオン、トロナツ？　なんでそんなところにいるの？」

アトリエは、博物館近くの小川を歩いていると、クオンとトロナツ、ノネットがいた。

「——私も一緒にいたいから待って」

アトリエは3人の元へ走り、流れて遠くにいくものに別れを告げた。

第23話 旅立ち

ノネットはジムへと戻っていった。これから挑戦者とバトルをする準備をする。こうしている間にも少しずつ時は進んでいる。戻らない時間、取り返せないという感覚、少しクオンたちの胸を締め付けていた。

「2人はハクタイシティのジムへ行くんだったよね？」

アトリエは話した。クオンはそのつもりだと答えるが、トロナツは少し悩んでいた。

——3人は化石博物館に戻ってきていた。その近くでコールマがこちらを向いて立っていた。

「どうしたの？ コールマさん」

どこか不思議に思ったアトリエは声をかける。

「——単刀直入に言いますと、もし出会ったのならばですが、2匹を連れて行ってくれませんか？」

「——それは、またどういった意味で」

クオンが言葉を放つ。コールマは少しの間、黙っていた。

「——1つ、ありもしないことを言います。もしこの2匹が前館長を死に追いやったとすれば、どう思いますか？」

どうも思わない、そんな言葉が3人の頭の中で浮かぶ。

「実は、この2匹は、前館長が言うには、207番道路で暮らしていたと言うのです。そして前館長は雪崩で亡くなる当日の朝、”化石掘りに行く”と私に伝えておりました」

——突然関係ないような事を言うが、雪崩が起こる原因は、重力により落下しようとする力、地面との摩擦力、雪粒同士の結合力、これらが強く弱くなり起こる。例えば、急激な気温上昇が起これば、地面との摩擦力、雪粒同士の結合力が弱くなり、雪崩が起きやすくなる。

ロコンの特性は”ひでり”であり、207番道路はテンガン山に近い。察しがいい者はここで分かるだろう。テンガン山まで化石掘りをしに来ていた前館長と2匹、ロコンの特性で辺りの日差しが強くなる。それにより雪崩は起きてしまったのだ。

「今、2匹がどこにいるのか、わたくしにも分かりません。ですが、もし見かけたら、広い世界へ連れて行つてくれませんか？」

それがコールマの2匹への想いだとかオンとアトリエは考えていた。

「分かったー！」

コールマと別れた3人はポケモンセンターへやってくる。部屋に入り、いつでもハクタイシティへ向かえるように支度を整えた。最中、ちらりと窓を見て街中に2匹が歩いていないか眺める。

コールマ、ノネト、3人は、あの日以降2匹と会っていない。

「どこで、何をしているのかな」

トロナツはそう言葉を漏らす。

「2匹の事か？」

同じ部屋にいたクオンが声をかけていた。続けてクオンは口を開く。

「もしかしたら、このまま会えないかもしれないな」

「——そうだね」

ため息が出そうな落ち込んでいる声でトロナツは話していた。

——遠くにある化石博物館を見て、クオンがあの出來事を思い出している、ポケモンセンター入口からノネトが現れる。

「ここにいたのかー！」

◆ ◆ ◆

ノネトと3人はジムへと向かっていた。ジムの倉庫にある展示物を、全て博物館の東側に運ぶ為、人手が必要だったとノネトは話していた。

「しばらく開けてなかったからな！」

ジムの中へ入り、ノネトは1つの扉の前に立つ。扉を開けると少し焦げ臭い匂いが広がった。皆は少し不快になる。

「さて、運ぶかー！」

どんよりとした空気の中、ノネトの活のある声が響いた。ジムの関係者と思われる人々も来ていた為、昼過ぎになって最後の1つがジムの倉庫から運び出されていた。

「終わったー!!」

ノネットは3人に礼を言うと、試合場の方へと走っていった。——そのまま3人はポケモンセンターへ戻ってくる。この日、この時間帯では珍しく、ポケモンセンターの中にいるトレーナーの数がクオンたちを含めないで2人しかいなかった。どちらもクオンたちと離れた窓近くのテーブルで気を休めている。

「——クオン、覚えてる？ テンガン杯が始まる前、僕だけ旅の目標というものを決めていなかったこと」

窓をぼんやりと見ていたトロナツがこちらを向き、話していた。

「覚えているけど」

「クロガネシティに来て、色々な人たちやポケモンたちを見て、もっとポケモンのことを知りたいって思ったんだ。クオンとはまた違った道を歩むことになると思うけども、僕は、ポケモン博士になってみたい」

「なれるよ、トロナツなら」

クオンとアトリエがそう言葉を放っていた。

「——トロナツ、アトリエ、そろそろ向かわないか？」

——207番道路、3人は今この道路を歩く。目指す場所はハクタイシティ。トロナツとアトリエは、ヒノキア博士に会う為に、クオンはジムリーダーのアールズとバトルをする為に、下がり始める太陽は待つてはくれない。今夜は野宿だろう。

——そんな3人が知らぬところ、草陰では、じっと見つめる2匹がいた。ポケモントレーナーとして経験する1つ、草むらから野生のポケモンが現れる、今それが起ころうとしていた。

草陰から現れた野生のポケモンはロコンとコジヨフィー。野生のポケモンはどうしてポケモントレーナーに襲い掛かるのか、いや構ってほしいのか、それは謎である。

——そして、この日、クオンとトロナツは新しい仲間を加えていた。



——シンオウ地方のどこか。薄暗い建物の中にクウノトリとヒューマが戻ってきていた。

「——そう落ち込むな、ヒューマ！　これは失敗しても大丈夫だった依頼だったんだから」

1つの部屋にはクウノトリとヒューマと、ある男がいた。

「失敗したのに続けて依頼が来るなんて、それほど大切にされているんだな、お前とルカリオは」

手元の資料を見ながら男がヒューマに向かって呟いた。彼の名前は、シラ。彼もまた何かの依頼を頼まれていた。

「最初は、逃げ出した団員を連れ戻すのに、ここまで人員を割くのかよって思ったが、この団員を調べてみたら、元幹部だったらしいな」
「そいつはよく知ってる、恐ろしく強い奴だ、念を入れた方がいい」

クウノトリがそう話す。続けてヒューマを見て口を開かせていた。「確かヒューマ、ワバと一緒に依頼へ向かうんだろ、ある意味、良かったじゃないか」

グレイ団であるワバ。年齢不明、子供のような容姿ながらにバトルのセンスは幹部のポケモンを赤子のように扱うくらいの強さを誇る。その実力を持ちながら幹部に上がれないのは依頼の成功率の低さが要因だった。ワバという人物はグレイ団の中では珍しく、実力だけで高い評価を得ている団員の1人だった。

次の依頼で再び失敗しても、ヒューマの評価が大幅に下がることはないだろうとクウノトリは断言する。

「——神様からまだ子供だから悪事に働くなって止められている、なんて団員内で変な噂が流れるほどだ、アイツの強さには今でも恐ろしくなるよ。俺でもアイツが悪事に働く姿は絶対に見たくないな」

第4章 ハクタイシティ 終わりの始まり編

第24話 藍色のスーツの男

——自転車を降りて、光が差す方へ歩く。薄暗い建物の中を抜け出すと、目の前には高い建物がいくつも立ち並ぶ。2つの建物の間はやや広く、都会だとは言いにくくい。古風な家もあちこちに残り、どこか中途半端のように見えていた。

クオンたち3人は、ハクタイシティにやってきていた。

『ハクタイシティ』

歴史を感じる町であるが、所々に高層ビルが立ち並び、その言葉は無くなりつつある。各地方まで繋がって、今やシンオウ地方で有名な公共交通機関である『ちかつうろ』が作られ始めたとされている。そしてクオンの出身地である。

クオンたちがハクタイシティに来た目的は2つ。クオンがジムリーダーとバトルをする為、アトリエがヒノキア博士に会う為だ。クオンたちは、先にヒノキア博士に会いに行くことになる。

ヒノキア博士がいるとされる家は、アトリエしか知らない。クオンたちは、アトリエの後を追う。とある一軒家にやってきて、アトリエが扉を開けて中へと入る。外へと戻ってきたアトリエは、曇らせた表情で2人にこう言った。

「この家にもういないみたい！」

中で行われていた研究は既に終わっていて、ヒノキア博士はハクタイシティを観光しているらしかった。彼らの話によれば、ヒノキア博士は数日後にハクタイシティを離れると話していたという。その話は2日前の出来事であった。つまり、今のハクタイシティに博士がいるかどうかは微妙な所である。

「どうしよう、先にジムに行く？」

「いや、別に急いでいるわけじゃないから、観光ついでに博士を探そうよ」

既に諦めかけていたアトリエは納得して、クオンたち3人は街中を

歩き始めていた。

「あれ、あの人」

クオンが声を上げた。視線の先に立っていた人物は、藍色のスーツを着た中年男性。

「マチエス叔父さん！」

トロナツも気付いき、その名を呼んでいた。マチエスは、声に気付いたようで3人の方を向く。その近くで、董色のスーツを着た少女らしき人物も3人を見ていた。

◆ ◆ ◆

トロナツの話によれば、マチエスは“国際警察”という秩序を守るために日夜捜査をする組織に属しているらしい。隣にいる少女はエルフィー、彼女はマチエスの部下のようだ。彼らは表向きにはフリージャーナリストとして活躍していて“国際警察”という素性を隠していた。この町にやってきたのも理由があった。

「——どうしても人員不足で、この町にいるトレーナーたちにも手伝ってもらっているのだが、君たちも手伝ってくれないか？」

そう言いマチエスは、服のポケットから1枚の写真を出していた。

——クオンは写真を見て凍り付く。

「グレイ団という悪い組織があつてな、そこから抜け出した幹部がこの町に潜んでいるという情報があつて探しているんだ」

——その写真の人物はかつてハクタイシティのジムリーダーを、たった1匹のポケモンで倒しつくした男、ロウだった。

* * *

どうして彼が、いや、そんなことは会ってから確かめれば分かることだが、そんなに悪い奴だったのかと思ってしまう。

クオンは、ポケモンリーグに出場していた人物が、まさか悪い組織に所属していたとは考えすらしなかつたのだ。そしてグレイ団という組織が、とても脅威で大きなものだと思改めて感じさせていた。

「僕たちも手伝うよー」

トロナツが、マチエスにそう言う。元々ヒノキア博士を探すために街中を歩き回るつもりでいたので、ついでに例の人物も探せる。助か

るとマチエスは、写真と通信機をそれぞれ3人に渡していた。

この通信機は、写真の人物を見つけた時に、マチエスに知らせるといふ役割として他のトレーナーにそれぞれ渡している。そして、写真の人物を捕えた場合、この通信機から特徴的な音が鳴るようだ。これでマチエスは、数多くのトレーナーと情報共有をしていたのだ。しかし、写真の人物は、まだ見つからない。

「念のために言うが、他のトレーナーたちには私が」国際警察 だつてことは言っていないから、言わないでほしい」
「分かったよー！」

マチエスたちと別れて、3人は街中を歩き始めていた。ポケモンセンターにやってくる例の写真を持っていた少女が壁に寄りかかって立っていた。少女の名前は、ソノルナ。

「——アイツ、”キツサキの一族” だろ、先越されないように手を組んで写真の男を探そうぜ」
「そうだな」

同じくクオンたちの近くで少女を見ていたトレーナーたちが小聲でそう話していた。

「——ある意味、可哀そうだね。」キツサキの一族”と”ナギサの一族”のトレーナーは」

アトリエは静かにそう呟いた。

『キツサキの一族、ナギサの一族』

シンオウ地方が誇る二大ジムリーダーの町で育ったトレーナーのことを言い、その出身のトレーナーは他と比べて圧倒的に強い、近年になり2つの出身者与其他の出身者のトレーナーの差が広がり過ぎて、その町出身のトレーナーが、他のトレーナーを差別したり、他のトレーナーが、その町出身のトレーナーを差別化したりで、問題視されていたりする。

「正直、関わるのはやめた方がいいよ、クオン」

アトリエからそう言われたが、クオンは少し迷いつつも少女へと向かい、声をかける。



「二手に別れて、例の男を探さない？」

トロナツが皆に向かって話した。そして、4人で話し合つて、トロナツとアトリエ、クオンとソノルナで別れることになる。トロナツ組は博士を探しつつ、クオン組はいつでもジム戦へ行けるようにという理由で決めていた。

ソノルナも本来の目的はハクタイジム。彼女は、ジムバッジを3つ保持していた。彼女曰く、同期と比べて遅い方だと自信がないように話す。

「じゃあ、私たちは東側の方で探しているねー！」

トロナツとアトリエは、クオンたちから見て、遠くにいてそのまま走り去っていた。

「――俺らは南側の方を探すか」

南側にはジムがある。マチエスから貫っている通信機からは、もし捕えた場合に音が鳴る。そうなれば、2人は一息つきジム戦に臨めるだろう。だがクオンは違う気持ちであった。

先日捕まえたコジョフーとのバトルの練習もしなくてはいけなかったが、そういう気持ちではない。幼いころに見た、異端な試合。それはまだ記憶の中から少しも離れていない。クオンは口ウとバトルをする覚悟でいた。

そして、クオンにはもう一つ、離れない気持ちがあった。

(この建物完成していたのか)

クオンは、1つの高層ビルから目が離れなかった。ハクタイテイの所々では大規模な工事などが順調に進んでいる。田舎から都会へと変わる街中というものは意外と実感できない。例えるなら自然が少なくなる。そんなイメージだ。町の人々も日頃、空の上から見ているわけでないのです、いつの間にか建物の工事が行われていて、気付けば終わっているという繰り返しだ。

都会とは、自然が少ないということを目指すのだろうか。田舎とは、自然が多いということを目指すのだろうか。では今の都会でも田舎でもないハクタイテイはどう言うのだろうか、はつきり言って自然の多さ少なさは、関係ないのである。

「——貴方って、” 金剛石の集い”、” 白真珠の集い”、という2つのグループを知っていたりする？」

「なにそれ、知らないけど」

ソノルナが急にそんなことを言った。しかし、クオンは何処かで聞いたことがある言葉であった。それは昔にバトルをしたトレーナーが放っていた言葉だった。その前後の言葉もあつたのだが、覚えていない。

——2人はジム前にやってくる。クオンは通信機が鳴っていないか少し気にした。顔を上げるとジムの入口には見覚えのあるトレーナーが立っていた。

青無地の帽子を被り、黄色のスカジャンを着た小柄な少年、そのトレーナーの名前はセトントだ。

第25話 ハクタイシテイを歩く

クオンとソノルナがロウを探し回り、ジムの方へ歩いてみると、入口にテングガン杯でワカシヤモを使っていたトレーナー、セトントが立っていた。

「なぜ勝てない!」

セトントは、苛立った様子で声を上げる。

セトントは幾度となくジムに挑戦していた、タイプ相性では有利なはずのワカシヤモを持っていたとしても、繰り返し敗れていた。本来ならば、タイプでの不利有利は勝敗に大きく左右されるもの、セトントが苛立つのも無理はない。

「セトント?」

クオンがセトントに声をかけた。

「ああ、カイズと一緒にいたトレーナーか、何か用?」

「いや、用はないけど、この町にいたんだって」

「そんなことか、そうだよ、この町で3つ目のジムバッジを手に入れるつもりさ」

「——そうなのか」

「ジム戦は1日1回までっていう決まりだからな、僕は今負けてしまったよ、君も今日の分の挑戦を早めにしてたらどうだ?」

「いや、俺たちは別な用事があるから、後にしておくよ」

セトントと別れてクオンたちは南東側でロウを探す。こちら辺は高層建物が密集していて、人が多く、とても狭い路地もいくつもあり、見る箇所が多い。この町で最も、人が隠れるにはうってつけの場所ではあるが、同時に最も、人が溢れかえっている場所でもあった。

——少し経ち、探し疲れたクオンとソノルナは1つのベンチで休息を取っていた。すると強い風が吹き、ソノルナのマフラーが飛ぶ。

クオンは会った時から思っていた事があった。白いパーカーに今飛ばされた灰色の厚手のマフラーを彼女は身に着けている。暑くないのかと思ってしまう。しかし、クオンはそれを口に出すことはなかった。

そして、こういった厚着のトレーナーを、クオンは昔にも見たことがあった。

記憶の中、アブソルのトレーナー以外で、今までバトルした中で一番強かったトレーナーはと尋ねれば、浮かび上がってくる『デンリュウ使いのトレーナー』であった。

* * *

確か、”リツシこのほとり”で出会ったつけ、その前に勝負を仕掛けられた何人かのトレーナーたちを束ねるリーダー的な存在で、1匹だけのバトルだったけど、強かった。

「——そろそろ、写真の男を探さない？」

ソノルナがクオンに声をかけていた。

「——ああ、分かった」

狭い路地を少し眺めながら、大通りを2人は歩く。懸命に探すも口ウの姿はなかった。

——2人は更に東へと向かう。建物もなくなり、ちよつとした岩場が見えてきていた。すると、クオンが持つボールが動き出し、ガバイトが出てきた。

クオンは、周りを見渡してようやくその理由に気が付く。ここは、クオンとガバイトが初めて出会った場所であった。

「——ガバイト」

ボールから出てきたガバイトを見てソノルナは、そう口走る。彼女はガバイトを使うトレーナーを見ると、あることを思い出す。

——ソノルナは、元々強い兄に惹かれてポケモントレーナーになった。その兄は、同期の仲間よりも倍の速さでジムバッジを集めていて、シンオウ地方では有名なトレーナーグループ、”金剛石の集い”、”白真珠の集い”の2グループから目をつけられていた。

『金剛石の集い、白真珠の集い』

シンオウ地方でその名が知られているトレーナーグループである。2つとも同じく、強いトレーナーたち集まりであり、2つの勢力は拮抗している。その大人数のグループを仕切っているトレーナーの多くは、ジムバッジを8個以上持ったトレーナーで、その者から認めら

れて、グループに入れるようになっていた。

しかし、ソノルナの兄は2つのグループに入ろうとはしなかった。その理由は分からないが、彼はおそらくジムバッジを8個集めることよりも、大きな目標を抱いていたのだろう。

それは、ソノルナも知ることなかった。そして確かめることも出来なくなっていた。今の兄はポケモントレーナーではない。

『ガバイトのトレーナーに負けて、気が楽になった』

突然、兄がポケモントレーナーをやめると言いだして、次に放った言葉である。現在の兄はポケモンの預かり屋を目指し、本を読みながら独学で勉強している。ソノルナが信じられなかったのは兄がトレーナーをやめたことよりも、兄がバトルに負けたことある。

聞こえはいいが、無敗のトレーナー、ソノルナは兄の負けた姿を今まで見たこともなく、少しも感じたこともなかった。だが、そうまで思っていた兄の口からその言葉が急に現れたのだ。兄の背中を追いかけることが出来なくなったソノルナは、憧れと余裕を失い、ガバイトのトレーナーという言葉に固執するようになる。

——彼女にとって、ガバイトを使うトレーナーは、無視できないものである。

しかし、今ここでクオンにバトルを申し込むことは出来るわけがないと、分かつてはいるが。

「——ここにはいないだろうし、南西側を探してみようか」

ガバイトをボールに戻っていたクオンがソノルナに声をかけた。

「そうだね」

ソノルナはそう一言返し、来た道に戻った。

◆ ◆ ◆

——ハクタイシティの東側では、トロナツとアトリエがロウを探す。しかし、彼らは写真の男の名前がロウだとは知らない。あくまでもグレイ団を抜け出した幹部の男という認識だ。

「——本当にいるのかねえ、この町に写真の男は」

アトリエが呟く。かれこれ東側をくまなく探し終え、北側へ向かうとしているところであった。その最中に例の写真を持ったトレー

ナーを数えるほど見てきたが、写真の男は見つかる気配すらなかった。

アトリエは、これだけ街中を探しても見つからないのに、それでも続けているマチエスの判断に疑念を抱く。だがトロナツは、そうは思っていないようだった。

「あの人なりの思惑があるんだと思う」

東側を探している間に、トロナツとマチエスの関係を聞いていたアトリエは、少し口を閉じた。期待もあり不安もある考えの中、とりあえずもう少し探してみるかという結論についた。

「――アトリエ、隠れて！」

急に小声でトロナツがアトリエに呼びかける。2人は民家の壁に身を寄せる。アトリエが向こうの大通りを見てみると、灰色のダウンベストを着た男が立っている。

「――あの服、間違いなくグレイ団だよ」

今までトロナツたちが出会ってきたグレイ団の人物は、灰色のダウンベストを着ている。

そんな共通点にトロナツは気が付き、咄嗟に隠れる行動に移していたのだ。更にここでグレイ団に出会ったということは、トロナツたちにとつては大きな情報になり得る。こんな街中にグレイ団であろう人物が堂々と歩いてるとなると、元グレイ団の男を追ってきた可能性が高かった。

――クログネシテイの化石博物館で起こった騒動は公にされていない。そのため、グレイ団の男は街中を悠々と歩けるのだ。

グレイ団の男がどこかへ去っていき、2人は身を隠すことやめる。アトリエが一息つき、近くにあった時計の時刻を見ると、長針短針が一番上に差し掛かろうとしていた。

「どこかで昼食を取らない？」

トロナツも時計を確認し、2人はとある喫茶店に足を踏み入れた。未だ解決しない諸問題を気にして、2人は軽食で済ましていた。ドールとブイゼルはそんな2人の顔を気にすることなく、“きのみ”を食べ続けていた。

「ロコンも好きに食べていいよ!」

2匹と距離を開けて”きのみ”を見続けるロコンにトロナツは声をかける。それを聞いたロコンは、ゆっくりと2匹に近づき、”きのみ”に噛り付いていた。

「意外とロコンって人見知りなのかな」

オドオドしたロコンを見て、アトリエはそう話していた。

——そんな時だった。

「——2人はポケモントレーナーですか?」

隣の席にいた1人の男がこちらを見ていて、話しかけていた。その人物は赤の他人ではない。長い黒髪で紺色のロングコートを着た男、写真の人物と全く同じ顔だった。

第26話 もりのようかん

——写真の男に話しかけられた2人は、直ぐには言葉を出せなかった。むしろ、あまりにも唐突な出来事で、男を見つつ体が静止する。恐怖、どうしようかという判断に迫られる。

そんな中で例の男は、その違和感を感じ取らないのか、再び口を開かせる。

「自分は昔、フローゼルを持っていたから、懐かしいなブイゼルは」「そうなんですか」

意を決して、アトリエは口を開かせる。

「失敬、名が遅れましたね、自分はロウ言います。以後お見知りおきを」

言い終えたロウは、それぞれ2人に名刺を渡すように、トレーナーカードをさっと渡す。

「強そうなトレーナーを見ると、声をかけてしまうのが自分の癖でして、またどこかで会えたら」

そう言葉を残し、ロウは喫茶店から出て行った。

2人は顔を合わせ、急いでテーブル上にあるボールを取り、ポケモンたちを戻し、逃すまいと立ち上がる。喫茶店を出て、205番道路へ歩いていくロウを見つけ、密かに追いかけた。

ロウは”ハクタイのもり”への入口で立ち止まっていた。2人は木々に隠れながら、その様子を伺っていた。もしや尾行していることに気付かれたのか、将又その先にある何かを見つめているのか、彼の行動は今だ理解しにくい。

ようやくロウは、中へと入っていく。恐る恐る隠れていた木々から飛び出し、2人も”ハクタイのもり”に向かう。森の中へ入ると一直線にある道と、怪しく佇む、古びた洋館が視線の先にあった。この古びた洋館は、知る人ぞ知るホラースポットで、危険を顧みない一部のマニアしか足を踏み入れることがない場所であると言われていた。

森の奥の方に人影は見えず、おそらくロウは、この古びた洋館の中に入ったのだろう。

——幸いにもお互い嫌々せずに、古びた洋館の方を向き、ギシギシと鳴る扉を開かせる。まず目に入ったのが奥の方に置かれた何らかのポケモンの石像、その石像のポケモンは2人とも、名も姿も記憶にはなかった。

「知ってる？ あのポケモン」

「正直、知らない」

2人が交わした言葉はそれだけだった。ふらりと石像近くの扉を開けると、そこは食堂だった。

「——なんか動く影が見えなかった？」

急に震えた声でアトリエが言った。しかし同じ方向を見ていたトロナツにはそんな影は見えてない。建物内に明かりがなく、窓から入ってくる小さな光だけであり、洋館の中はとても薄暗い。

「——気のせいじゃない、ここ気味が悪いから、幻覚でも見えてたとか」

「確かに見えたような気がするんだけどな」

2人は食堂を出る。再び扉を開けるとポケモンの石像が直ぐ近くにあり、少し2人は驚いた。動くはずのない石像はこちらを見ているようでなんとも気味が悪い。2人は階段を静かに上る。

足を置いたたびに不快な音を鳴らす階段に、心臓が鑢で削られているような気になった。

もうこの洋館に写真の男がいるからと決めつけて、通信機を使ってしまうかとアトリエは考える。しかし、そもそも喫茶店で同じく昼食を取っていた彼が、何故こんな不気味な場所にと考えてしまうし、実は尾行に気付き、森の中で撒こうという考えだったかもしれない。もしそうであつたら、森に入り、奥の方に彼の人影がなかった説明がつく。

——私なら尾行を撒こうとするのなら、道から外れ木々の中を走り去る。

「——トロナツ、一応通信機で知らせてた方がいいと思う、もしかしたら待ち構えているかもしれないし」

もし2人を撒こうとする考えならば、道から外れて木々の中を走り

去る方が妥当だ。写真の男がグレイ団の幹部であることは分かっている、この古びた洋館に”逃げ込んだ”とは考えにくい。

つまり、もし誘い込まれている状況ならば、今の2人は例えるなら鳥かごの中に入ったのと同じである。洋館から出れば怪しまれ、洋館の中を探し回れば、いずれ男と出会うからだ。

トロナツは、通信機を手に取り、ボタンを押す。

「——ラティオス、”サイコキネシス”」

その声を聞いた途端、体の自由が利かなくなった。足が地面から離れていることに気付く、そして2人の通信機が宙を舞い、どこかへ吸い寄せられる。石像の隣に、ロウが立っていて、2つの通信機はロウへと奪い取られていた。

「やはり、”君たちも”か、侮れないものだな」

ロウは2つの通信機を服のポケットへと入れた。

「おそらく、”国際警察”の差金かな、相変わらず回りくどい」

そうゆったりとロウが話していたが、突然彼は、玄関の方を向いた。

「ラティオス、”りゅうのはどう”」

ラティオスは、玄関先に技を放つ。

「オドシシー！ ”まもる”！」

玄関の壁がほとんど吹き飛ぶ。そこに立っていたのはオドシシーと、ハクタイシテイにいた、灰色のダウンベストを着たグレイ団の男であった。彼の名前はシラ。

「どうやら余裕もなくなっているようだな、無理もない、こんな古ぼけた洋館に多くのグレイ団が身を潜めていたとは思わないだろうしな！」

シラはグレイ団の元幹部を捕えるためにある作戦を考えていた。

◆ ◆ ◆

——数日前の出来事である。シラは薄暗い建物の中で過去の口ウに関する情報を集めていた。

「——えげつない成果だな、これで幹部止まりか」

当時の実力を書き記している資料を見てシラは驚く。

グレイ団時代のロウは、下っ端だった頃、依頼の成功率、実力とも

トップの成績で、異例の速さで幹部に昇進。幹部になって尚、その的確な判断力で部下を巧みに動かし任務を遂行。しかし、ある日突然、姿を消したと書いてあった。

シラは今の依頼、ロウを捕えるということの難しさを知り、頭を悩ましていた。1つでもよくない評価があればと思ったが、そんなものがある気がしない。この高評価だらけの資料はなんなんだとシラは言いたくなかった。

「こんな奴を多人数でだが、相手にしろってか」

ロウを捕えるという依頼で、指揮する役割を担うのがシラであり、隙がまるで見えないロウを知り、焦っていた。

しかし、ある情報を聞き、その考えは一変する。

ロウが姿を消した時期を調べてみると、それはもう数年前の事であった。何故今になって連れ戻すという依頼を出したのかと、上層部に尋ねてみると、少し前にグレイ団の幹部にしか知り得ない場所にて、怪しげな痕跡を見つけたのが始まりだった。それはグレイ団としての重要な情報が漏れている可能性があるという示唆するものであり、元幹部であったロウが疑わしい人物として挙げられたのだ。

つまり、ハクタイシティの近く、グレイ団が関与している場所に、ロウが現れる可能性は大いに高い。その周辺に仲間を見張らせて置き、見つけ次第全員で取り囲む作戦を、シラは作り上げた。

——そしてその作戦は当たりだった。ハクタイシティで探している最中に仲間からロウの姿が見えたという連絡が入り、シラは”ハクタイのもり”へ向かった。

この作戦は完璧だった。これで間もなく頭を悩まし続けた依頼も終わるだろう。

◆ ◆ ◆

「——ああ、お仲間ですか」

勝ち誇って作戦を全て話し終えたシラに、ロウはそう言葉を返す。

ロウの表情はどこか、にやっていた。

「お仲間は全員、ここにいる幽霊に驚いていましたよ」

第27話 明かされる過去

「――幽霊？」

ロウの言葉を聞き、少し後ろへと下がっていたシラがそう呟く。

「――正確にはこの屋敷に住まう”ゴーストタイプ”のポケモンたちです」

「そいつらを使ったのか」

”サイコキネシス”という技でポケモンたちを全員を操り、捕えたまでです」

つまり、ロウはこの古びた洋館に、多くのグレイ団が潜んでいると気づき、ラティオスの”サイコキネシス”でポケモンを操り、シラの仲間を1人と残らず捕えたのだ。これをトロナツたちがやつてくるまでの間にだ。

――グレイ団下つ端時代、ロウは主に”エスパータイプ”のポケモンを使い、躊躇いもなく人やポケモンに向かって技を放ち、思うがままに操る技術を持っていた。その技術は、依頼の成功のためだけに費やした。シラが見た資料には、情のかけらもないやり方が、細かく書き記されていた。

「ラティオス、”れいとうビーム」

一瞬にてオドシシに攻撃が届く。オドシシを瞬時に凍らせ、壊された玄関は、分厚い氷の壁で塞がれた。

「お仲間の所へ行こうか」

ロウはシラを連れて、2階の奥の方へと消えていく。トロナツたちは、まだラティオスの”サイコキネシス”で身動きが取れていない。2人の目の前にあるのは、こちらを静かに睨むラティオス、当然2人は伝説で語られるポケモンだと分かっている。分かっている故、どんなでもない敵を相手にしていたんだと思うしかなかった。

――ロウが2人の元へ戻ってくる。

「――念のために言っておくが、この古びた洋館に立て籠るつもりはない、君らを抑えたのは確かめたいことがあるからだ」

「確かめたいこと？」

「——喫茶店でブイゼルを持っていることに気付いてから、気になつていた。もしかして君たちは、クロガネシティでもグレイ団に会っているのか？」

「そんなこと、どうでもいいでしょー！」

アトリエの返しに、ロウは表情を曇らせる。

グレイ団を抜け、密かにグレイ団の重要な情報を手に入れ、元仲間であつた追ってくるグレイ団員を捕えるロウの目的は、2つある。その1つはグレイ団を壊滅させることであつた。

今しがた捕えたグレイ団員は身動きが取れなく、ここへ”国際警察”の者を呼び込めば、後は自身が逃げれば、”国際警察”の者がグレイ団を捕えてくれる。しかし、それとはまた別の理由でロウの心は揺らいでいる。

ロウの作戦がここまで上手くいくのは、追っ手に気付いたのではなく、最初から把握していたからだ。ロウは、とある手段を使いグレイ団の情報を知り得ていた。

——ある時、『グレイボールの機能を停止させるブイゼルがいる』という情報が流れてきた。

ロウが考えるに、グレイ団を壊滅させるには、グレイボールを何とかしなくていけなかつた。このグレイボールこそグレイ団の最大の脅威だ。このボールがある限り、あらゆる勢力が無に等しい。どんなに強いトレーナーであっても、グレイボール1つで形勢が逆転しかねない。

当然グレイ団も認知している。つまり、ブイゼルは最優先で処理される可能性が高い。ロウはこの状況で2人に伝えようか否かで頭を悩ます。

流れてきた情報は『グレイボールの機能を停止させるブイゼルがいる』のみ、ブイゼルを持つトレーナーをロウは、今初めて見たのだが、唯一知るこの情報を何としても伝えなくてはいけないという気であった。

「——グレイボールの機能を停止させるブイゼルがいる」

ロウはそんな言葉を放つ。

「これは、グレイ団から聞いた言葉だ。そこからそのポケモンはクロガネシティにいるトレーナーのポケモンだと突き止めた、——自分は敵でも味方でもないと言った念のために言っておく、君たちからの疑いを晴らすために、グレイ団に入った理由、抜けて敵側に入った理由を教える」



これはロウが少年だった頃、そしてラティオスというポケモンを持つ前の出来事である。

彼には幼馴染でライバルであったトレーナーがいた。いやライバルと思っていたのかは定かではないが、ロウはそのライバルに勝ち続けていた。

「——クロ、力が入り過ぎじゃない」

灰色のコートを纏い、黒いカチューシャをつけた少女が倒れるパチリスをボールへ戻す。少女の名前はクロ、ロウと幼馴染であり、日々ポケモンバトルで競い合っていた。

2人が住んでいる町はコトブキシテイ、シンオウ地方一と言われる大都市であった。ポケモントレーナーとしては欠かせない、ポケモンの基礎知識を学ぶことが出来るトレーナーズスクールがこの町にあり、2人はこの生徒であった。旅立つ前にトレーナーズスクールでポケモンの知識を学ぼうとするトレーナーは数多い。2人もその一部のトレーナーであった。

とても高い志を持つ2人は、山ほどあった学問では物足りず、他が疲れて真つすぐ家へと帰る中、毎日のように校庭のバトルフィールドに赴き、残っている力を吐き出すように、バトルをする。

だが、勝ち負けはいつも決まっていた。全試合、ロウのブイゼルの快勝である。学園の秀才とも言われ、ポケモントレーナーとして全く隙のない完璧人間だった2人には1つだけ違う箇所があった。それはポケモンに対する育て方の違いである。

「やっぱり、ロウに勝つには、もっとポケモンを強くしないと」

バトルを終えた後、疲れ切っているクロはそんな独り言をぼやく。負けず嫌いな性格の彼女は、ポケモンの育て方にも抜かりはなかった。しかし、どれだけそこに力を割いてもロウとの実力の差は埋まらなかった。時折クロは、どんな育て方しているのかとロウに尋ねることはあったが、自身の育て方をロウは口にするとはなかったのだ。

しかし、ロウの育て方はとても意外なものだったのだ。

ポケモンが鍛錬しているところを見て、何となく気持ちで指摘をする。ロウは、とある教材に書かれていた言葉、『ポケモントレーナーとは、ポケモンに的確に指示を放たなくてはいけない』という教えに、惹かれていた。しっかりと指示を放てるトレーナーになろうとする故に、その時に思った事だけをポケモンに伝えるだけの育成法を貫いていた。

しかし、心の内ではクロの育て方への熱意にどこか負けているのではと思っていた。数年後したら自分はクロに負けてしまうのかという考えがあった。

「——自分はまだ一度も負けていない」

気付けばロウはトレーナーズスクールで期待の星とも言われるトレーナーとして注目されていた。人生、壁に当たってからが本番だというロウの思考は、いつしか敗北が壁、という誤解を生んでいた。

——この日もロウのブイゼルが勝利を手にかけていた。

「——次のバトル、それで最後にしよう」

2人は卒業まであと数日といったところであり、それぞれ旅をする心意気を持たなくてはいけない頃であった。そして、クロが話す次のバトルというのは、近くコトブキシテイで開催される大会の決勝戦。そこで会おうという約束だった。

この時、肝の据わったクロを見て、ロウは今までの勝負に初めて罪悪感を抱いていた。自分はバトルに負けないようにしか考えていなかったが、クロは、自分に勝つことを必死に考えていたのだ。そして、この覚悟の違いでロウは初めて敗北を感じた。それと同時に大会の決勝戦という大舞台でクロとどうバトルをしたらいいのかと、自分を

見失っていた。

——決勝戦まで行って、クロに負けよう。そんな考えが浮かぶ。しかし、勝つという気持ちがある今のロウにはなかった。悩み続けたロウは、大会当日までポケモンと鍛錬をすることがなかった。

——そして結果は最悪だった。

『——コトブキ大会！ 優勝者ロウ!!』

最悪なコンディションの中、それでもロウは決勝戦でさえ、快勝で優勝していた。

第28話 青と赤

コトブキシテイで行われた大会の表彰式、会場内の一番中心にロウが立つ。隣には大粒の涙を流すクロが目に入る。お互い表彰台に立っているので、俯き泣くクロの表情は見えないが、その声が肌に刺さる感じがした。

『何故勝ったんだ?』

そんな声がロウにだけ聞こえてくる。目を覚ますと、周りからは称賛する声、大きな拍手、隣では泣く少女。

『——自分はこのことのために勝ち続けていたのか?』

再び声が聞こえる。

ロウは思う、こんなコンディションの中、ここまでの実力を出せるとは考えすらしなかった。しかし、思い返してみても1つ心当たりがあった。

ポケモンに放った指示は的確だったのだ。

大会を振り返った映像を見てロウは確信する。試合中のロウが、ポケモンへ放つ指示は不気味なほどに正確で、どの指示も勝利へと繋いでいた。その映像を見ていたロウは、自分自身がまるで冷酷非道な勝負師のように見えてきて怖くなった。

しかし、それが自分の唯一の長所でもあった。この長所を肯定、否定することは、ロウには出来なかった。だが、こんな自分にはなりたくないという強い想いがロウにはあった。

——そして、コトブキシテイから旅立つ前日、ロウは不思議な夢を見た。

どこかの澄んだ大空、飛行機から見えるような景色、どこからか声が聞こえた。

『正しき野望を持つ者よ、その想い、我に預けてみよ』

そんな声が聞こえた途端、ロウは目が覚めた。

「——夢か」

時計を見ると深夜3時を過ぎていて、ロウは無意識に支度を整える。再び床に就くより、朝まで起きていた方が気持ち的に良かったの

だ。

『会場へ行け』

突然そんな言葉が頭に刺さる。夢で見たのと同じ声。

「一体誰なんだ」

しかし、言葉は返ってこない。会場とはおそらく、大会が行われた会場の事だと思い、ロウは夜道を走った。

会場へとやってきたロウは、不自然に開いたままの関係者用の扉を見つける。ここから入れと言っているようなものだった。中へ入り、試合が行われたバトルフィールドの場に足を踏み入れた。そこで待っていたのは、『むげんポケモン』のラティオス。

ロウはそのポケモンを知っていた。

『ラティオス』

争いを好まぬ優しい性格、優しい心を持った人間にしか懐かない。高い知能を持ち、人の言葉を理解することが出来たとされる伝説で語られるポケモン。また、見たものや考えたイメージを映像化して相手に見せる能力をも持つポケモンである。

ロウは事の大きさを悟る。

「まだ自分は、旅立っていないトレーナーだ、——なのに」

ラティオスはロウを見ても、逃げようとも威嚇しようともしない、捕まえてくれるのを静かに待っているようだった。

「——自分は、そこらにいる普通のトレーナーで終わらないと思っていたが、これでは、普通のトレーナーでは終われない」

ロウは、覚悟を決めボールを投げる。

◆ ◆ ◆

ラティオスというポケモンを手に入れたロウと互角に渡り合うトレーナーはいなかった。ロウは、ジムバッジを4つ集めた頃、全くボールから出すことがなくなったブイゼルを思い出す。

「——これから自分はトレーナーの高みを目指す。すまないがここでお別れだ」

ロウは、ブイゼルをコトブキシテイの大会で出したのが最後だった。このまま使うことがないのなら野生に返した方がいいというロ

ウナりの考えだった。

——ジムバッジを8つ集め終えて、ロウはポケモンリーグへの参加資格を得た。そして今まで快勝という言葉しか知らなかったロウは始めて大きな壁と出会っていた。ロウの結果は1回戦敗退、ロウを下した相手はそのまま優勝した。

その相手は例えるなら、得体の知れない怪物。しかし、その相手のバトルスタイルは一言でいうならば自由。ポケモンの潜在能力を全て引き出したような戦い方であった。

その相手とロウの実力には、差はほとんどなかったが、1つだけ大きな違いがあった。それは、一言で表すのなら、ポケモンへ指示する力加減である。均衡した状況時には緊張感を持って、勝負所ではより強き気な声で、ロウを下した彼は、そう指示を放っていたのだ。

これは何を意味するのかというと、ポケモンのパフォーマンスを最大限に発揮するためだ。

正の感情、負の感情が影響で試合を動かすというのは、ありえなくはない。

試合中に耳にする自身に向けられる応援歌と相手に向けられる応援歌、例えば声量が相手に向けられる応援歌の方が大きく聞こえた場合、知らずのうちに自身の実力が発揮できないことがある。

これを言葉で表すなら、アウエー感、場所や雰囲気が自分にとって居づらいという意味。

誰しも、共に戦う仲間より、今から戦う敵勢力の方が団結しているように見えると、勝てるかどうか不安になってしまうだろう。つまり、ロウの敗因は、ラティオスとの絆の強さが相手よりも劣っていたことだ。

「——知らない間にラティオスの強さに吞まれていたのか、自分は」
濁りなき事実をロウは認めていた。



ポケモンリーグから数か月の時が経ち、ロウはコトブキシティに

戻ってきていた。次に開催されるポケモンリーグに向けてロウは、ラティオスと鍛錬に励んでいた。ラティオスという伝説のポケモンを扱うトレーナー、ロウに多くの人が視線を向けている。街中で伝説のポケモンを持ったトレーナーはとても目立つ。

その中で藍色のスーツを着た中年男性がロウに近づいてきていた。「珍しいポケモンをお持ちで、もし良ければ私たちの捜査に協力してくださいませんか？」

彼の名前は、マチエス。”国際警察”と名乗り、悪事に働き、この町に潜んでいるとされるグレイ団を捕えるためにやってきていた。そして、ジムバッジを8つ持つロウに、捜査の協力を頼んでいた。

ロウは躊躇うことなく捜査に協力した。

——ロウはグレイ団を知らなかった。しかし、危険を顧みず捜査に協力した理由は単なる正義感からではなく、自身の強さに絶対的な自信を持っていたからだ。グレイ団の事を大した組織ではないだろうと思っていたロウは、ぶらぶらと暗く人が寄り付かない裏道を歩き回る。

そして、グレイ団らしき人達を見つけた。マチエスから聞いていた灰色のダウンベストを着ていた怪しげな集団。ロウはこの集団がグレイ団であると確信する。1人、威厳を放ち集団を束ねるリーダー格の女性がいた。ロウは、マチエスから渡されていた通信機のボタンを押した。その時、同時に後姿のリーダー格の女性が振り返り、その顔がロウには見えた。

——その顔を見たロウ、通信機が手から転げ落ちる。

見間違いではなく、幻覚でもない。紛れもなくその顔はトレーナーズスクール時代、共にバトルをした仲であった少女、クロの顔であった。

そして、その隣には、伝説で語られるポケモン、ラティオスがいた。『ラティオス』

高い知能を持ち、人間の言葉を理解することが出来たとされる伝説で語られるポケモン。他のポケモンや人間の気配に非常に敏感、気配を察知すると直ぐに姿を消す。羽毛はガラスのような物質になって

おり、これで光を屈折させて姿を隠したり変えたりすることも出来る
ポケモンである。

第29話 願い続けた一試合

ロウはその場を去っていた。深い理由はなく、あのリーダー格の女性はクロに間違いはなかった。しかし、今尚間違いであってほしいと願い続ける自分がいた。

事が済んでから”国際警察”のマチエスに聞かされたことだが、目撃者の証言を照らし合わせて、グレイ団は異変に察知したのか町から去っていったようだった。

「——ラティアス」

ラティアスの他のポケモンや人間の気配に非常に敏感という能力を上手く利用すれば、”国際警察”がこの町でうろついていることを知るのは容易なもの。そして何故クロがトレーナーズスクールで優秀な成績で卒業していながら、グレイ団という組織に属しているのかロウは気になって仕方がなかった。彼女のこととは忘れようという考えもあつた。ロウは当時、彼女とのバトルで数多く打ち負かした過去を思い返す。

旅立つ前まで彼女に敗北を味合わせ、そこからもし自信を無くし、グレイ団に入ったとするならば、少なからず自身にも非がある。しかし、グレイ団に入った原因はロウのせいではない。彼女の意思でグレイ団に入ったとロウは考えた。

——トレーナーズスクール時代、誰よりも正義感が強く負けず嫌いだつたクロを思い出し、そんな彼女が悪に屈するののかという考えもロウにはあつた。

「グレイ団は、どのような組織なのですか？」

——ロウはマチエスにそう質問を投げかけた。

『グレイ団』

シンオウ地方の元研究施設、グレイ研究施設の元関係者たちが作り上げたと言われる組織。組織の主な目的は不明。上の立場の者から出される”依頼”を下の立場の者がこなすと評価がもらえ、その数に応じて各団員のランク付け行われる徹底した成果主義の組織だとされる。

団員には多くの少年や少女がいて、グレイボールで捕獲されてしまった大切な自身のポケモンを取り返そうとするポケモントレーナーを上手く唆し、強引にグレイ団に入らせるといふ所業をしているとされている。

「———こういったとんでもない組織なんだ、いくら伝説のポケモンを持つていたとしても過信はしないほうがいい」

何度も念を押すようにマチエスは、ロウにグレイ団の危険性を事細かに伝えていた。

しかし、ロウはマチエスの話した中であつたある言葉が頭から離れないでいた。それこそ、団員に少年や少女がいる理由だ。クロは自身のポケモンを取り返そうとして、グレイ団に入ってしまったんだとロウは確信した。

———グレイ団に入り、クロのポケモンを取り返す。それがロウがグレイ団に入った目的であつた。



「———ここまでが、自分がグレイ団に入った理由だ」

アトリエとトロナツに向け、淡々と話し続けていたロウは、ようやく口を閉ざす。2人もまたロウの過去を知り、言葉を失っていた。

「そして、グレイ団を抜けた理由はクロのポケモンを取り返せなかったから。詳しくは言えない」

「———それを私たちが知って、貴方には何か得することはあるの？」

アトリエはロウに言葉をぶつける。グレイ団に入っていた理由を知ったとはいえ、考えてみればロウが得することといえば、2人を安堵させることぐらいだ。アトリエはグレイ団に入った理由を鮮明に話すロウの本当の目的を確かめようとしていたのだ。

「———グレイボールが無くならない限り、グレイ団は壊滅しない。自分が言いたかったことは、そのブイゼルをグレイ団から全力で守れ」

険しい表情でロウは声を出した。ロウが言いたかったことは、そう

いうことだった。

「ラテイオス、”サイコキネシス”を解け、用事は済んだ」

ようやく、宙に浮かび身動きの取れなかったアトリエとトロナツの足が地面へと着いた。

「次に会うときは、ブイゼルの力を借りたい。先にそう言っておく」

ロウは溶け始めていた玄関の氷を砕き、薄暗い森の中に消えていった。少し経ち、マチエスとエルフィーがやってきていた。クオンとソルナも近くにいた。

「――無事か！」

「うん、大丈夫！」

トロナツとアトリエは、この古びた洋館で起こったことを話した。



「――クオン、ジム戦頑張ってる！」

事が全て終わり、翌日の朝、クオンはジムに挑戦する。トロナツたちは急いで観客席に向かっていた。多くはないが間もなく始まる試合を眺めようと、人々が既に座っていた。

「アトリエ、あの人つてもしかして」

その人々の中には、白い衣服を身にまとい、頭に赤いバンダナを巻いた高身長 of 若い男性がいた。彼こそアトリエが今まで探し回っていたヒノキア博士だった。

『――試合開始!!』

ジムリーダーアールスと、挑戦者のクオンの試合が今、始まった。使用ポケモンは2体、ポケモンの交代は挑戦者のみ認められる。これがジム戦での基本的なルールだ。

バトルフィールドには、チコリータとコジョフー。戦う2人にとつては待ちに待った試合。互いに無意識ながらポケモンへの指示を躊躇っていた。

「――手加減はしないよ！ クオン！」

アールスはチコリータに”やどりぎのたね”を指示。瞬く間にコ

ジヨフーの周りから蔓のようなものが現れ、襲い掛かる。コジヨフーの体に蔓が纏わりつく。

「コジヨフー、”はっけい!”」

臆することなくコジヨフーはチコリータへ攻めに入る。それを見たアールスは静かに笑う。

「チコリータ、”カウンター!”」

”はっけい”を正面から受けきったチコリータは、コジヨフーの懐に渾身の一撃を入れた。大きく吹っ飛ばされるも、コジヨフーは受け身を取った。

「コジヨフー、”ドレインパンチ!”」

コジヨフーは拳に力を入れる。そして体勢を低くし、瞬きする間にチコリータの間合いに入っていた。不意を突かれたチコリータは、まともに攻撃を受ける。

しかし、技を放ち終えた後にコジヨフーが倒れた。体に纏わりついていた”やどりぎのたね”が残り少なかったコジヨフーの体力を吸いつくしたのだ。クオンはコジヨフーをボールへ戻す。

「――俺の指示が甘かった。すまないコジヨフー」

クオンはもう一つのボールをバトルフィールドに投げ入れた。ボールから現れたのはガバイト。

「ガバイト、ドラゴンクロー!”」

風の如く、ガバイトはチコリータの間合いに入り、技を放つ。

チコリータが倒れ、アールスはボールへ戻す。そして、一つのボールを手に乗せて見つめていた。

「――本当はこのポケモンは、”からめ手から攻める戦術”を得意とする種族なのだけど、そういう性格じゃないんだよねウチのは」

アールスが持つボールの中のポケモンはエルフィン。アールスの切り札のポケモンだ。

「今日は最初っから全力で飛ばしていくよ! エルフィン!!」

第30話 100年に1人のトレーナー

残ったポケモンは互いに1体、しかし現時点ではアールスが圧倒的に有利であった。”くさタイプ”の他に、”ドラゴンタイプ”の技を無効化する”フェアリータイプ”というものをエルフーンは持っている。更に”フェアリータイプ”の技は”ドラゴンタイプ”には”こうかはばつぐん”で、ガバイトが持つ技の1つの”あなをほる”は、”くさタイプ”のエルフーンには”こうかはいまひとつ”だ。

ガバイトが持つ技でまともにエルフーンに与えられる技は”きりさく”のみ。

この勝負、クオンが勝つことは絶望的であった。

「エルフーン、”ぼうふう”！」

ガバイトの周囲から強烈な風が襲い掛かった。

「エルフーン、”エナジーボール”！」

続けざまにアールスは指示を放つ。体勢を立て直すガバイトに緑色で輝く塊が向かう。難なく避けるが、とあることにクオンは気付く。

エルフーンの技を放つ速度は、ガバイトの倍くらいあり、攻め入る隙がなかったのだ。

「エルフーン、”マジカルシャイン”！」

クオンは、急に眩しくなったと思っていると、バトルフィールドを輝かせるように、多くの光が現れた。全ては避けきれない、そう判断したクオンはある指示をする。

「突っ込め！ ガバイト！」

——この瞬間、ガバイトは少し嬉しそうな表情をしていた。

ガバイトはエルフーンに攻めに入った。そうはさせないとエルフーンの”マジカルシャイン”が牙をむく。ガバイトはその攻撃を軽く受けていても、足だけは止めない。そして、エルフーンの間合いにガバイトが入った。

「一撃で決めろ！ ”きりさく”！」

”マジカルシャイン”が地面に当たった衝撃でバトルフィールド

は、煙に包まれていた。2匹のポケモンはこの煙の中にいる。徐々に少なくなる煙、クオンとアールスはその時を待つ。

『——エルフーン、戦闘不能!』

このバトルの勝者はクオン。

◆ ◆ ◆

——ジムの入口でクオンはアールスから受け取ったジムバッジを眺める。

「——おめでとう! クオン」

アトリエとトロナツがやってきた。

そんな雰囲気の中、3人の元にある人物が近づいていた。

「先程のバトルは見事だった!」

声をかけた人物、それはヒノキア博士であった。彼はクオンのバトルセンスを高く評価し、ポケモン図鑑を懐から出していた。

「実はポケモン図鑑を完成させてくれるトレーナーを探していて、もし良ければだが、協力してくれないか!」

そんな博士に一言に、クオンは首を横に振っていた。

「俺よりも、適任のトレーナーがいます」

そう言っただけクオンはトロナツの方を向いた。

「トロナツはポケモン博士を目指しています。渡すなら彼に」

その言葉を聞き、ヒノキア博士は少し黙る。何を思ったのか懐から2つのポケモン図鑑を出した。

「いいか、これは大人の気まぐれだ。ある条件を呑んでくれるのなら、君たち全員にポケモン図鑑を渡してもいい!」

「——その条件って」

「そこにいる彼女の新しい小説を貰いたただけだ」

この瞬間、ヒノキア博士は最初から3人にポケモン図鑑を渡すつもりでいたのだとクオンは気付いた。おそらく、ヒノキア博士の一番の目的はアトリエの小説が見たかったのであると。

「——そんなことでもいいのなら」

アトリエはクロガネシティで書いていた小説をヒノキア博士に渡していた。

——ヒノキア博士と別れた3人は次の目的地のことで話し合う。
「これからコトブキシテイへ向かう」

コトブキシテイでは近く大会が開かれる。クオンはソノルナとそこで再び会う約束をしていた。

「バトルの約束？」

「まあな」

コトブキシテイに向かうため3人はその道中にあるソノオタウンに向かうことになっていた。



——ハクタイシティにある伝説のポケモンの像。その近くにマチエスとエルファイがいる。

「——3人、”ハクタイのもり”の方面に行くことは、ソノオタウンへ向かうね」

旅立った3人を見ていたエルファイがマチエスへ告げる。

「あの3人なら問題ない。それにその町で依頼をこなすグレイ団の中には私たちの仲間がいる」

「あの少年の事？ 彼ってよく知らないけどそんなに強いのか？」

「知らないのか、1つの年のポケモンリーグの大半を優勝した怪物だぞ」

「——あんな少年が、人って見かけによらないものだね」

——ある年だけ、全世界が注目するチャンピオンリーグが開かれなかった。その理由は公にされていないが、各地方で開かれるポケモンリーグ、その大半を優勝で飾ったポケモントレーナーが存在した。正に彗星の如く現れた1人のトレーナー。彼はそのままシンオウ地方のチャンピオンに勝利したが、それでは飽き足らず、チャンピオンの座を直ぐに辞退した。そしてたどり着いた場所こそ。